日義村の文化財　2

長野県木曽郡お玉の森遺跡

―平安時代後半の集落―

1977・3

長野県木曽郡日義村教育委員会

日本研究室

はじめに

日義村は木曽郡下でも遺跡の数も多く、比較的台地（段丘地形）が発達しているので遺跡の規模は大きい。中でもお玉の森遺跡は上の原遺跡とともに村内一の大きさである。この遺跡中央部に日義村小中学校があり、学校建築時には、考古学的知識が行きわたっていなかったため、知らず遺跡をこわしていた。校庭造成時には、神村透先生が中学校に勤務しておられたので、中学生と木曽西高校地歴部の協力で発掘調査をされている。その結果平安時代住居址が7軒検出された。また、水道工事で縄文時代住居址も確認され、神村先生や日義村教育委員会によって発掘調査がされた。縄文時代と平安時代の遺構が数多く検出され、木曽を代表する遺跡として知られた。

最近遺跡を横切って国道がつけかえられたことにより、この遺跡地にも住宅が建設されるようになった。また農業の近代化は耕地の基盤整備事業として村内でも計画、実施され当遺跡にもその事業が予定されている。一方日義小中学校の設備充実化の一つとして、体育館の建設化が具体化され，現校地の東側に建設用地が求められた。ここは遺跡地内なので遺構の存在が予想された。

教育委員会では、このような情勢から、遺跡の広がりの確認と、体育館用地内の調査を計画し、長野県教育委員会の指導をうけ、国庫補助金事業としておこなうことにした。

木曽教育会郷土館委員の先生方と、木曽考古学研究会会員の協力で調査団を組織し、木曽西高校地歴部、豊科高校郷土班、そして日義中学校・上松中学校・三岳中学校の生徒諸君の参加で、昭和52年の夏発掘調査を行なった。関係の皆様に厚く感謝したい。

発掘調査は雨続きで、作業が進まず、予定より調査期日を延長して、ようやく終了することができた。その結果が本文の中でも説明されているように、平安時代住居址を10軒検出できた。

一方、分布確認調査は、遺跡周辺部に試掘溝を入れて行なった。耕地の作物の関係で11月になって　地主の承諾を得て20か所を調査し、その広がりを確認できた。

今までの調査と今回の調査の成果を、当遺跡や、村内の遺跡保護のために活用していきたいものと思います。

昭和52年3月

日義村教育長　今井秀夫

例　　言

1. 本書は日義村教育委員会が、昭和51年度国庫補助金事業として行なった調査報告書である。
2. 本書には神村透が調査した校庭用地内での平安時代遺構もあわせてのせてある。
3. 発掘調査は日義村教育委員会が組織した発掘調査団が行なった。
4. 発掘調査については長野県教育委員会文化課樋口昇一指導主事の指導をうけた。
5. 発掘で得られた白瓷については、岐阜県多治見市の田口昭二先生の指導をうけた。
6. 作業分担は、写真撮影を神村透・青沼博之、遺構実測図は全員で、遺物整理を神村、青沼、伊深智、遺物実測を神村、遺構と遺物の図面作成を神村と分担してあたった。
7. 報告書は神村が担当した。
8. 出土遺物のうち、校庭用地内分は木曽福島町木曽教育会の木曽郷土館に、体育館用地分については日義村教育委員会に保管してある。
9. 図面関係の原図は神村が保管している。
10. 御霊の森は古地図によると在家部落にあって、当遺跡はお玉の森となっているので遺跡名を訂正した。

目　　次

はじめに
例　言
I　調査について
1　今までの調査……1
2　今回の調査……2
3　調査の経過……2
II　遺跡の立地
1　遺跡の立地……5
2　日義村段丘地区の遺跡……8
III　遺構と遺物
1　遺構と分布……9
2　1号住居址……13
3　2号住居址……15
4　3号住居址……17
5　4号住居址……18
6　5号住居址……19
7　6号住居址……21
8　7号住居址……23
9　8号住居址……25
10　9号住居址……26
11　10号住居址……27
12　11号住居址……31
13　12号住居址……34
14　13号住居址……35
15　14号住居址……37
16　15号住居址……38
17　16号住居址……40
18　17号住居址……41
19　その他の遺構……42
IV　遺跡の広がりについて
1　地点の設定……43
2　地　層……43

3　遺跡の広がり……43
V　調査の結果から……
1　住居址から……45
2　出土遺物から……48
VI　まとめ……61

挿図目次

1　遺跡地形図……6
2　日義村段丘地区遺跡分布図……7
3　竪穴住居址模式図……9
4　校庭用地遺構分布略図……9
5　校庭用地内A群遺構分布図……10
6　校庭用地内B群遺構分布図……10
7　体育館用地内地形図、遺構分布図……11
8　白瓷椀各部の名称……8
9　1号住居址実測図……13
10　1号住居址出土土器実測図……14
11　2号住居址実測図……15
12　2号住居址出土土器実測図……16
13　3号住居址実測図……17
14　3号住居址出土土器実測図……16
15　3号住居址出土石器実測図……18
16　4号住居址実測図……18
17　5号住居址実測図……19
18　5号住居址出土土器実測図……20
19　5号住居址出土石器実測図……19
20　6号住居址実測図……21
21　6号住居址出土土器実測図……22
22　6号住居址出土鉄器実測図……22
23　7号住居址実測図……23
24　7号住居址出土土器実測図……24
25　8号住居址実測図……24
26　8号住居址出土土器実測図……24
27　8号住居址出土石器実測図……24

28　9号住居址実測図……26
29　9号住居址出土土器実測図……27
30　9号住居址出土土器実測図……28
31　10号住居址実測図……29
32　10号住居址出土土器実測図……30
33　11号住居址実測図……31
34　11号住居址出土土器実測図……32
35　12・16号住居址実測図……33
36　12号住居址出土土器実測図……34
37　12号住居址出土石器実測図……34
38　13号住居址実測図……35
39　13号住居址出土土器実測図……36
40　13号住居址出土石器実測図……36
41　14号住居址実測図……37
42　14号住居址出土土器実測図……36
43　15号住居址実測図……38
44　15号住居址出土土器実測図……39
45　16号住居址出土土器実測図……40
46　17号住居址実測図……41
47　17号住居址出土土器実測図……41
48　遺構外出土土器実測図……42
49　試掘各地点の地層図……44
50　住居址の大きさと主軸方向……47
51　各群における住居址の位置・大きさ・主軸方向……48
52　住居別器種量比一覧……53
53　白瓷窯群と長野県……54
54　種別器形量対比一覧……56
55　東濃窯群白瓷編年図……57

表　目　次

1　住居址一覧表……46
2　住居別・遺物別一覧表……50
3　白瓷座地別・時期別窯数……55
4　東濃白瓷器種……55

5　関係する年表……59
6　実測土器一覧表……62

写真図版目次

1　遺跡遠景……75
2　遺跡航空写真……76
3　1・2・3号住居址……77
4　4・5・6号住居址……78
5　6・7号住居址、V字溝……79
6　8号住居址……80
7　9号住居址……81
8　10号住居址……82
9　11号住居址……83
10　12・16号住居址……84
11　13号住居址……85
12　14号住居址……86
13　15号住居址……87
14　17号住居址……88
15　試掘地点土層写真……89
16　土師器整形状況……90
17　墨書白瓷・フイゴロ・鉄くそ……91
18　調査団と調査参加者……92

Ⅰ　調査について

1.　今までの調査

日義小中学校のある平を「お玉の森」と呼んでいる。学校のすぐ東の道よりの畑の中に一本の木があり、そのまわりはわずかだが原野となっている。そこがお玉の森で、黄金伝説が残されており、以前里人によって掘られたけれど、何も出なかったという。また、この場所は木曽義仲の四天王の一人、樋口次郎兼光の屋敷跡ともいわれている。古図でお玉の森とあり、御霊の森は部落がちがい、通称を訂正する。

この一帯は遺跡地として早くから知られており、遺物の散布も多い。信濃史料の地名表によると、縄文時代中期土器、石器各種、古墳時代の土師器、須恵器、歴史時代の白瓷（灰釉陶器）、緑釉陶器が出土遺物として記録されている。蜂谷隆一氏によると緑釉陶器は耳皿の完形だったというが、現存していない。

この遺跡の考古学的調査は今までに４回行なわれている。

第１回の調査　昭和36年（？）長谷川悦夫によってされている。宮越下町部落の水道工事で山麓に溝を掘ったところ、縄文時代中期加曽利Ｅ期の竪穴住居址にあたり、その部分を少し広げて調査し、石囲炉と柱穴を確認している（第１図下１）。

第２回の調査　昭和37年、神村透が行なった。宮越区の水道工事で道路に深さ２ｍ程の溝を掘った。そのおり土器が出土し、それを家にもって帰った父親から生徒に、そして神村に連絡があり、早速に溝を調べた。山よりに縄文時代中期加曽利Ｅ期の住居址が２軒、木曽川よりに平安時代住居址が４軒とＶ字溝が切られているのを確認した。耕地の都合もあって、縄文時代の住居址を１軒調査した。これについては報告してある。この住居址はその後国道19号線のバイパス工事で破壊された（第１図下２）。

第３回の調査　昭和39年　神村透が行なった。日義小中学校々庭が校地北側につくられることになった。早速、地教委と連絡とるが、当時は今日程の理解はなく、調査するなら工事前にやってくれればという言葉だけだった。木曽西高地歴部と連絡をとり協力を得ることにした。また日義中学校郷土班の生徒にも参加してもらって調査することにした。途中、工事が早くはじまることになり、放課後や時には授業を自習にして調査したが、日数と人手不足で約１万㎡の用地内の全面調査は出来なかった。５月３日から６月23日までの20日間の調査で、用地の東上半部に４軒、西隅に３軒の計７軒の平安時代竪穴住居址と、Ｖ字溝を検出した。その後整地によって、３号住居址の西側に２軒、６号住居址の北側にＶ字溝を確認する。
また校庭東側の切取り斜面に２軒の住居址を確認した（第１図下３）。この調査は未報告である。

第４回の調査　昭和47・49年、青沼博之が行なった。日義村水道の貯水槽の予定地を調査し、確認された縄文時代中期加曽利Ｅ期の住居址を１軒調査した。この結果については報告されている（第１図下４）

今までの調査によって、縄文時代早・前・中・後期と平安時代の土師器・須恵器、白瓷が得られており、遺構の検出も上記の通りである。分布を見ると、縄文時代の遺構は山よりの沢にそって並んであり、平安時代の遺構は中央部に散在していることがわかった。弥生時代・古墳時代の遺物・遺構は発見されていない。中世・近世の陶器片は量が少ないが発見されている。

2. 今回の調査

国道19号線が時代の要求に従って、道路巾をより広く、集落をはなれて東山麓につくられて以来、食堂ガソリンスタンド、諸工場等が国道端に建てられるようになった。また個人住宅ブームは新しい場所にと広がり、学校のまわりにも次々と建設されている。一方、農地の方も農業の近代化ということで、農業基盤整備事業が村内の各地で計画・実施されている。このように開発は日増しに進んできている。

日義小中学校は教育基本的条件から見ると、体育館がないという不備をもっている。また社会体育の発展もあって、規模の大きい体育館の建設が具体化し、校地の東側桑園に用地が確保された。この用地内には遺物の散布も多く、先に調査した校庭に隣接しているので、遺構の存在が予想された。このため、長野県教育委員会の指導をうけて、遺跡の広がりを確認する周辺分布確認調査と、体育館用地内の全面調査をあわせて「お玉森遺跡緊急発掘調査事業」として、昭和51年度国庫補助をうけて、日義村教育委員会が実施することとなった。

調査事務局　日義村教育委員会　教育長　今井秀夫　事務局　田中茂　川上清入　上羽幸子

調　査　団　団長　神村透　調査員　山下生六　伊深智　田中博　長谷川悦夫　青沼博之　福沢昭司　樋本修一　竹田泰三　村井龍彦　千村喜万男

調査協力　木曽西高校地歴部　豊科高校郷土班　上松中学校考古学クラブ　三岳中学校郷土班　日義中学校職員及生徒

調査指導　長野県教育委員会文化調指導主事　樋口昇一
　　岐阜県多治見市小泉小学校教諭　田口昭二

調査中の全期間、木曽西高校地歴部員の合宿、調査関係者の宿泊、調査用具の保管について、日義小中学校の全面的な協力を得た。特に感謝したい。

3. 調査の経過

今回の調査は当遺跡にとって前記したように５回目の調査である。１・２・４回はいずれも山よりで縄文時代中期住居址を各一軒調査し、報告している。３回は現在の校庭のところを調査し、７軒の平安時代住居址を調査した。今回のはそれに隣接しており、調査の結果平安時代住居址９軒を検出した。３回のが未報告であるので、今回のにあわせて報告したい。

遺構確認調査　遺物の散布状態から見て、用地内に遺構の存在は当然と考えられたが、全面的な調査をするにつれて、作業の手順や土捨場をきめるために確認調査をすることにした。５月１～３日の連休にそれを行なった。校庭の調査で住居址の一番小さいのが３ｍ四方であったので、グリットを３ｍに設定した。中央西よりに南北に農道があり、そこに基線をとり、西側をＩ区、東側をII区とし、西からＡＢＣＤ……とする。北より南に０１２３……と呼んだ。Ｉ区Ｙ列、II区Ａ列、Ｃ列の３列に、２ｍ四方のはり下げをして、地層と遺構の存在をさぐる。その結果、北端は黒土層が浅く、砂礫土層となって遺構がない。大きく北半分は黒土層が深く、住居址と思われる黒土の落ちこみを４か所確認し、この部分に遺構が集中する

ことを知る。中央部は現地形でもわずかに高くなっている。この部分は浅い耕土ですぐ砂礫土層となっていて、遺構は存在しない。南半もずっと砂利層になっているため、遺構はないのかとおっていくと、南端近くで3か所のおちこみを確認する(第7図)。この結果、北半を全面調査することにし、中央部は土捨場とし、南半部は住居址を確認して調査することにした。

地形測量、調査に先立って、体育館予定地の地形測量を7月24・25・27日の3日間行なった。

本調査　夏休みを予定して8月1日から10日までを計画する。北半における住居址の確実な存在の確認と、南半での住居址の分布をおう。南半の方が耕土も浅く、住居数も少ないのでこちらから調査を進める。校庭用地で平安時代住居址を7軒調査しているので、住居番号を8号からつけることにする。南半から4軒、8～11号住居址が、北半からは6軒、12～17号住居址を検出して調査する。雨と排土に手間取り予定の10日では終らず、9月まで調査が残る。日誌を簡単に見ると、

8月1日　II地区東側のグリット2列を南へとおう。住居址を2か所（13・14号住）を確認する。

2日　II地区南部東側のグリットを4列おう、住居址を確認する（8号住）。　I地区南端で確認されている住居址（9号住）のプランをおう。用地内北半の表土排土をする。午後雨で中止。

3日　II地区南端のグリットをおい、8号住のプラン確認、10号住を確認する。9号住のプランをおう。北半はブルトーザで表土を排土する。午後雨で中止。

4日　8・9・10・13・15号住のプラン確認を5班にわかれて行なう。8号住は小形の住居址で、一部床面までほり下げをする。9号住は大形の住居址で西側は黒土層が深くほりこみがはっきりしない。10号住は南壁が用地外にのびている。13号住は中形の住居址である。15号住も中形の住居址である。

5日　8・9・10号住は床面へとほりさげる。13・15号住はプランをおう。14号住を確認する。午後雨のため作業中止。

6日　8号住は完掘する。遺物の出土は少ない。9号住は遺物の出土が多い。床面へとほりさげる。10号住も床面へとほりさげる。遺物は比較的多い。13号住も床面へとほりさげる。遺物はほとんどなし。白瓷椀に「主」の墨書あり。15号住もほりさげる。遺物は少ない。

7日　朝方まで夜の雨が残っていたので、作業を中止した。10時頃より晴間が見えてきたので発掘をする。8号住は実測、9号住はほりさげ、完形品はないが遺物量は多い。10号住もほりさげる。埋土内に礫が多い。カマドは石組が全くなくなっている。

8日　8号住のカマドの実測、9号住を完掘、北西隅とカマド周辺に遺物が多い。10号住はほりさげ。11号住のプランをおう。13号住を完掘、カマドほとんどくずされている。15号住も完掘、床面より鉄器（鎌・鍬）が出土する。12・14号住を確認する。

9日　雨で中止

10日　時々雨の降る中を調査する。9号住の実測、10・13・15号住の完掘、13号住の実測、11号住をほりさげる。埋土に礫が多い。

17日　9・13号住のカマドの実測、10・15号住居址の実測。13号住のカマド内よりフイゴの口が出土する。14号住をほり下げる。張り床があり、東へと拡張している。

25日　12号住周辺の黒土をとりのぞく。

29日　10号住のカマドの確認、11・14号住をほりさげる。11号住はカマドは痕跡をわずかに残る程度にこわされる。中央部には石の集積が見られ、人為によるものと思われる。14号住の下の床面は非常に不安定である。柱穴の途中に土師器坏が落ちこんで出土する。12号住のプランをおう。東隅がはり出す大形の住居址である。東南部に焼土の推積がいちじるしい。

9月2・6・13日　放課後を使って日義中学生の作業協力をうける。北半部の西一帯の黒土をのぞいて住居址の有無を見る。17号住居址を確認する。

15日　12号住をほりさげる。東隅のはり出しはもう一軒の住居址があることがわかり、16号住とする。12号住がそれを切ってほりこんでいる。

19日　11・12・14・16号住の実測、17号住をほりさげる。遺物は一個体の土師器坏のみである。石組のカマドがよく残る。

26日　17号住の実測。

11月24・25日　遺跡周辺部に、遺跡の広がりを確認するために、試掘穴をいれる。これにより遺跡の広がりを確認する。

遺物整理　図面作成は神村が中心となって、伊藤、青沼の協力を得て行なう。

白瓷についての指導　遺物のほとんどが東濃窯のものであるので、多治見市で研究を進めている田口昭二先生の指導を2月13日にうける。

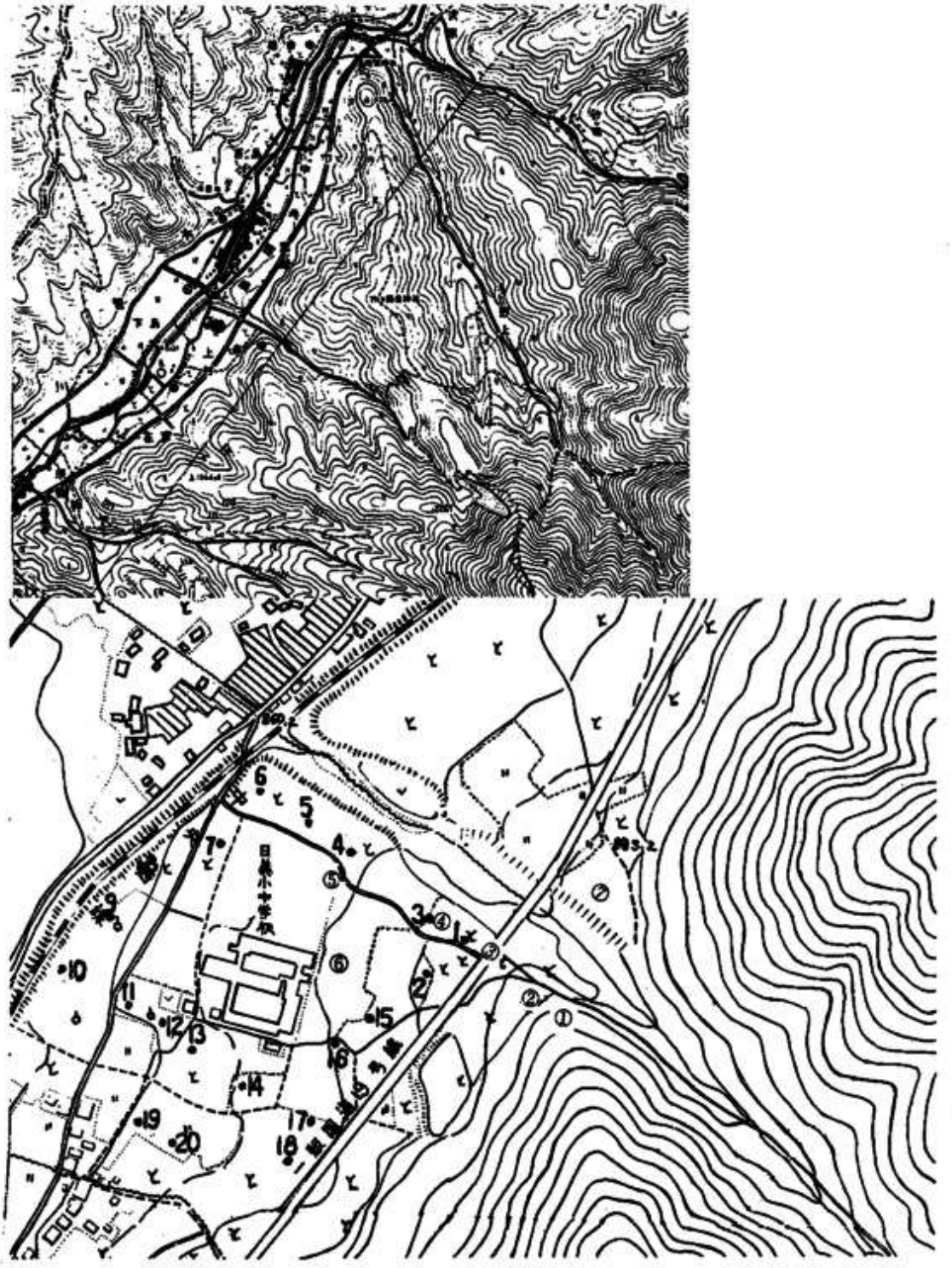
II 遺跡の立地

1. 遺跡の立地

お玉の森遺跡は長野県木曽郡日義村宮越地籍に所在する。日義村は木曽川最上流部にあって、村の地形を山間渓流部・木曽川段丘部・木曽駒高原部とわけると、木曽川段丘部にある。木祖村から越尾の渓谷を流れてきた木曽川は、東西両側からせまってきている山尾根が断層崖で急に落ちこむ間を、北東から南西に流れている。川は支流の大きい木曽山脈側に段丘と小規模な扇状地を発達させて、西側断層崖下を流れている。その段丘巾が最も広い所が遺跡地のあたりで、谷巾約800 mある。宮越部落の南ずれにある。

木曽山脈からの支流尻平沢川は段丘上に扇状地を形成するとともに、段丘をきって東南から北西に流れている。そのため段丘上は傾斜となり、水便が悪い。遺跡は尻平沢川によってきられた段丘の南側段丘上にある。遺跡全体が西傾斜地である。山麓で標高900 m、段丘端で標高870 m（木曽川で標高840 m）の標高差をもち、今回調査したところは標高880 mある。東は木曽山脈の一支山である水沢山（2003 m）の尾根が断層崖でさえぎっており、その尾根の間から尻平沢川が流れだしてきている。北は段丘をきりこんで尻平沢川が流れており、川の北側は上の原遺跡となっている。さらに北側は段丘が巾をせばめていって山吹山にぶっつかる当りでなくなっている。この北端に巾部落があり、八稜鏡が出土している。この当りに木曽義仲の屋形があったといわれ、部落北はずれには義仲が挙兵の時祈願したという旗挙八幡社がある。また、中山道の宿場宮越は上の原段丘の下、木曽川に沿ってある。西側は約10mの段丘崖で木曽川沖積地にとおちている。この段丘崖をけずって中央西線が走り、段丘崖下を中山道が通じている。このあたりの沖積地は尻平沢川によって木曽川が西山麓におされているため、村内では最も巾広く細長く見られる。南は水田となっているわずかな凹地をはさんで上村部落があり、さらに在家・原野部落へと続いている。(第1図。第一図版)。遺跡は日義村の段丘地帯のほぼ中央部、最も巾広く、沢に近く、そして沖積地に恵まれた場所に位置している。遺跡の広がりは尻平沢川に沿ってのびて、一辺約300 mの底辺を木曽川よりにおく正三角形にあり、山よりに縄文時代が、中央から木曽川よりに平安時代の集落が見られる。小中学校はその中央部に位置している。

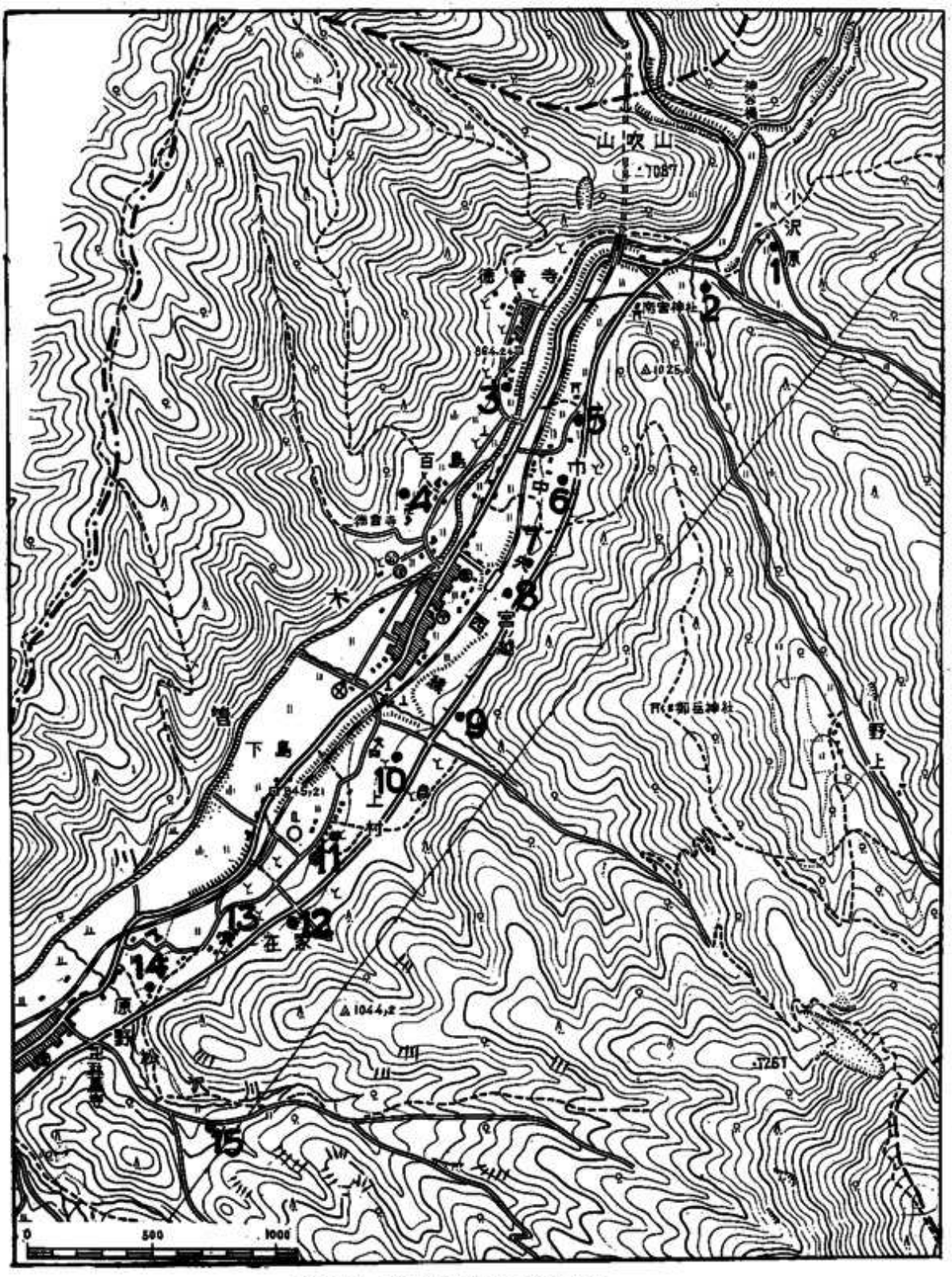
遺跡地は河成段丘であるため、洪積世砂礫土層が厚く推積し、その上に御岳火山灰のローム層がのっている。尻平沢川のおし出しがその上に扇状地を形成しているため、部分的にローム層であったり、砂礫土層であったりしている。遺跡の北半にはロームが見られ、竪穴住居はロームをほりこむ。南半は砂礫土をほりこんで竪穴住居が見られる。ロームの推積している部分は上にある黒土層も礫があまりまじらなく、木曽川よりほどその厚さも厚くなる。山麓尻平沢よりから、南半部は砂礫混り黒色土が20m前後の厚さで推積している。そのため畑も土よりも石の方が多く見える。



第1図　遺跡地形図　（上$\frac{1}{50,000}$、下$\frac{1}{500}$）

上図が遺跡、下図⑥が調査地、⑤が校庭

1～20は試掘ピット地点



第２図　日義村段丘地区の遺跡分布

2. 日義村段丘地区の遺跡

木曽郡には約380の遺跡が知られている。長野県下では最も遺跡分布の少ない地域である。この遺跡の80%が縄文時代であるが、最近の調査では縄文時代と同じ位に平安時代の遺跡が確認されている。日義村には66遺跡が知られていて、うち27遺跡が平安時代のものであって、縄文時代中期についで多い。村内では6遺跡を発掘調査しているが、3遺跡で平安時代住居址を検出している。このように、木曽地区は平安時代の遺跡分布が多い。日義村の遺跡は、木曽川に沿った段丘地区と、木曽駒ケ岳西麓に広がる木曽駒高原に多く分布し、さらに支流の山間部にも点在する。お玉の森遺跡は段丘地区の中にある。

段丘地区の遺跡を見ると(第2図)、15遺跡があり、13遺跡は段丘の発達する東岸に分布する。

1.小沢原遺跡（7398）縄文時代、弥生時代、平安時代の遺物が出土し、中でも弥生時代前期の遠賀川系土器壺片が注目される。

2.古宮平遺跡（7401）縄文時代の遺物が採集されている。

3.芝垣外遺跡（4419）縄文時代、平安時代の遺物があり、藤沢宗平先生によって発掘調査されている。縄文時代後・晩期の遺物が多く、人骨も発見されている。

4.上垣外遺跡（4420）縄文時代の遺物が採集されている。

5.宮の原遺跡（4416）縄文時代・平安時代の遺物があり、内耳鉄鍋と瑞花双鳥八稜鏡が注目される。ここには木曽義仲が旗挙げした時に祈願したという八幡社がある。

6.巾遺跡　（7402）縄文時代と平安時代の遺物が採集されている。

7.経塚遺跡　（7403）縄文時代の遺物が採集されている。

8.駅東遺跡　（7404）縄文時代の遺物が採集されている。

9.上の原遺跡（4417）縄文時代・歴史時代の遺物が出土し、中期勝坂式土器期の住居址と平安時代の住居址が発掘されている。

10.お玉の森遺跡（4418）4421の学校附近遺跡と全く同じであり、今回調査した遺跡である。

11.上村遺跡　（7405）縄文時代・歴史時代の遺物が採集されている。

12.心光寺遺跡（新発見）家具工場建設工事で白瓷陶器椀と壺が出土している。

13.長渡遺跡　（7406）縄文時代・歴史時代の遺物が出土しており、白瓷陶器壺の完形品がある。

14.マツバリ遺跡（4422）縄文時代・平安時代の遺物が採集されており、後期後半の遺物が多い。

15.大寺遺跡　（7408）縄文時代・平安時代の遺物が採集されている。

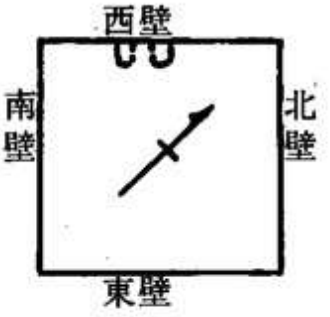
木曽駒高原地帯には縄文時代早期・弥生時代後期　平安時代の遺跡が多い。ほぼ中央部にある二本木遺跡の発掘調査では平安時代の住居址を検出している。

Ⅲ　遺構と遺物

1.　遺構と分布

日義小中学校用地内の調査は、昭和39年の校庭用地の調査と、今回の体育館用地の調査の２回あって、いずれも平安時代の住居址が発見されている。昭和39年の調査が未報告であるため、あわせて報告する。

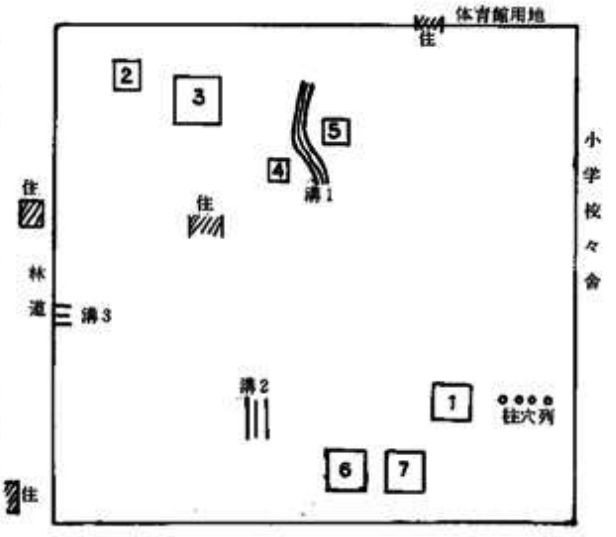
校庭用地で検出された遺構は、平安時代住居址７軒、柱穴列１、Ｖ字溝３で、体育館用地で検出した遺構は平安時代住居址10軒である。遺構で最も多い住居址はいずれも竪穴住居址で、隅丸方形を基本形とし、胴が外へ張った、辺の長さが一定でない不整方向である南北がほぼ対角線に来るように掘りこまれているので、便宜上、第３図のように四辺を東・西・南・北壁と呼ぶことにした。主軸方向は少しずつ変化があるが、東は山に向き、西は木曽川になっていて地形の傾斜方向と一致している。



第３図　竪穴住居址模式図

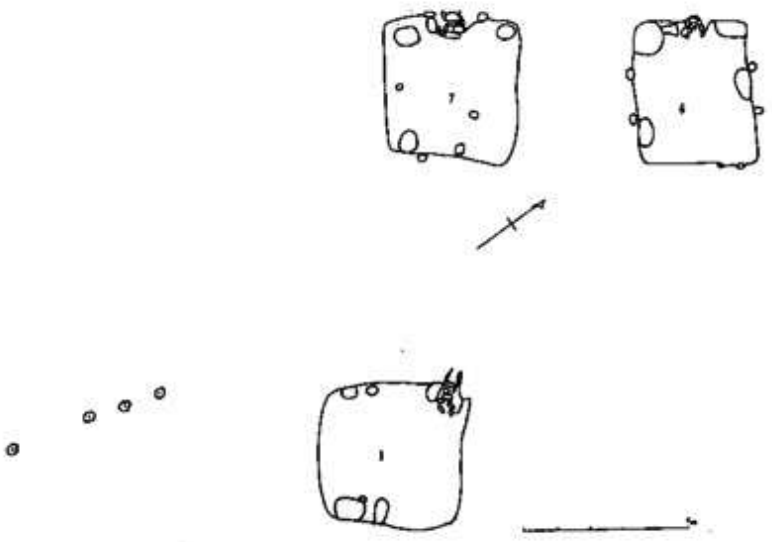
校庭用地は中学生に協力をえた個人的調査であるために、用地内の遺構分布図を測量することはできなかった。概略図のように、７軒の住居址は、校庭の西隅に１・６・７号住居址の３軒と柱穴列が、東隅に２～５号住居址の４軒がかたまってある。４号住と５号住との間にはＶ字溝が、４号住の北にもう一軒の住居址が整地の時に確認しているが調査できなかった。６号住の東にもＶ字溝の存在を確認している。校庭山よりのカッティングされた土手に住居址の落ち込みを確認しており、これは、体育館用地内で調査された住居址のうち、15号住に近い。また校庭北側村道に水道管を埋める溝をほった時住居址２とＶ字溝１を確認している。

Ａ群　１・７・６号住の３軒をＡ群とする（第５図）。校庭の西隅にあって、この附近は耕土が深くて完全な調査はできていない。そのためまだ住居址があった可能性が強い。１号住の北西７ｍに７号住が、北９ｍに６号住が、６号住と７号住とは3.5ｍはなれて並んでいた。７号住は６号住が火災にあったために建直されたもののように思われる。１号住の南西５ｍに柱穴列があり、Ａ群の北側にはＶ字溝も認められている。

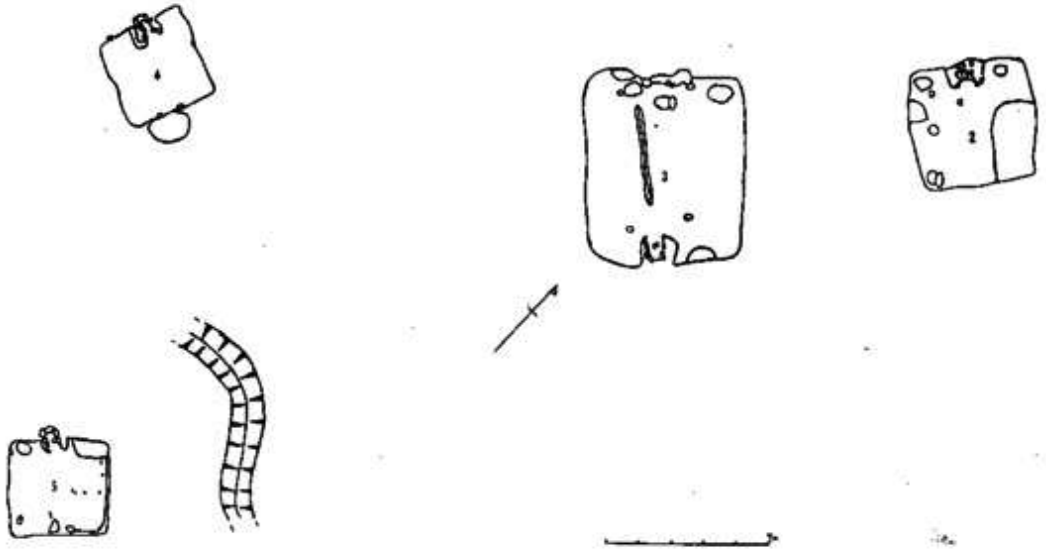


第４図　校庭用地内遺構分布概略図

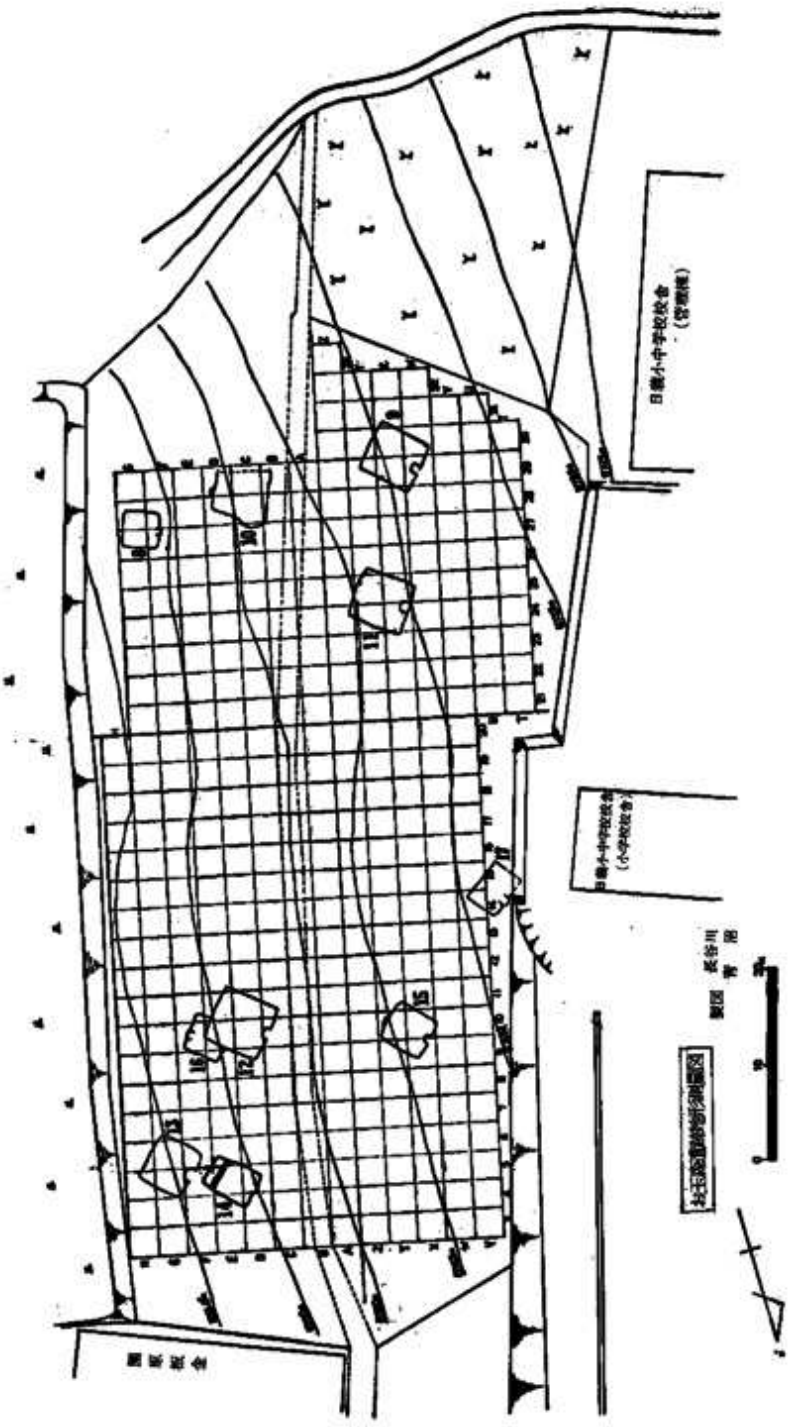
B群　校庭の東隅に検出された2～5号住の4軒をいう(第6図)。5号住はV字溝で区切られているので、南にその一群があると思う。3号住が中心になっている。2号住は3号住の北東5m、4号住は3号住の西12.2mのところにある。5号住は3号住の南13.8mにあって、4号住ともV字溝をはさんで北西9.7mのところにある。V字溝は5号住と3・4号住の間をS字に北西に走っている。溝2・3のどれにつながるかは不明である。これは住居址群を画するために掘られていたようにも思える。体育館用地内では注意して調査したが、V字溝を検出することはできなかった。



第5図　A群住居址配置図



第6図　B群住居址配置図



第7図　体育館用地内地形図・遺構配置図

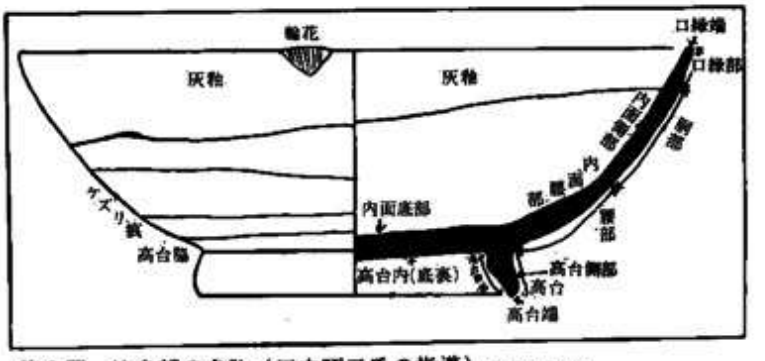
体育館用地は現校地の東にあって、ほぼ100×40ｍの広さである。全面調査を計画したが調査期間中雨天がおおく、西南部の桑畑の部分がグリットを少ししか調査できなかった。地形や遺構分布から見て、11号住と17号住の間には遺構の存在する可能性は少ない。遺構の分布を見ると用地内中央のわずかに高い部分をはさんで、北側と南側の２群にわけれる(第７図)。

C群　用地の南部に検出された８～11号住の４軒で、８・10号住、９・11号住のそれぞれがセットになっていたようで、主軸方向が近い。８号住の西5.4ｍに10号住が、10号住の西９ｍに９号住、10号住の北西12ｍに11号住が、９号住の北東９ｍに11号住がある。これらの住居址の南と西側に住居址が存在する可能性は強い。

D群　用地北半に検出された12～17号住の６軒で、13・16号住、12・14号住、15・17号住のそれぞれがセットになっていた可能性があり、13・16号住と12・14号住とでは、12・16号住の切り合いで前者の方が古い。一番大きな12号住を中心にして見ると、16号住は12号住に西隅を切られている。13号住は16号住の北東９ｍ、12号住の北西11ｍに、14号住は12号住の北11ｍ、13号住の北西１ｍにある。15号住は12号住の北西11ｍ、14号住とは19ｍはなれる。17号住は15号住の南西12ｍにある。

C群とD群とでは、11号住と12号住は40ｍ、11号住と17号住とは26ｍはなれている。

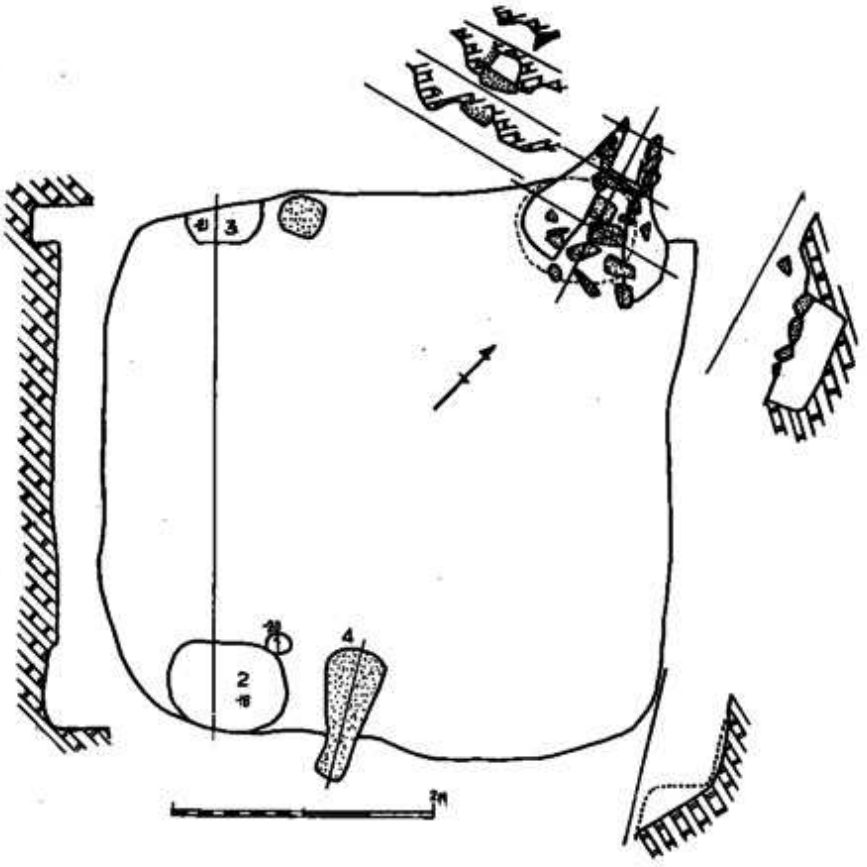
なお出土遺物のうち、今まで灰釉陶器と呼んでいた一群の陶器は、美濃古窯址研究会の見解により、白瓷とよぶことにする椀の各部の名称についても同研究会で統一しているので、この遺跡資料でもそれをとりたい。



第８図　椀各部の名称（田中昭二氏の指導）

2.　1号住居址

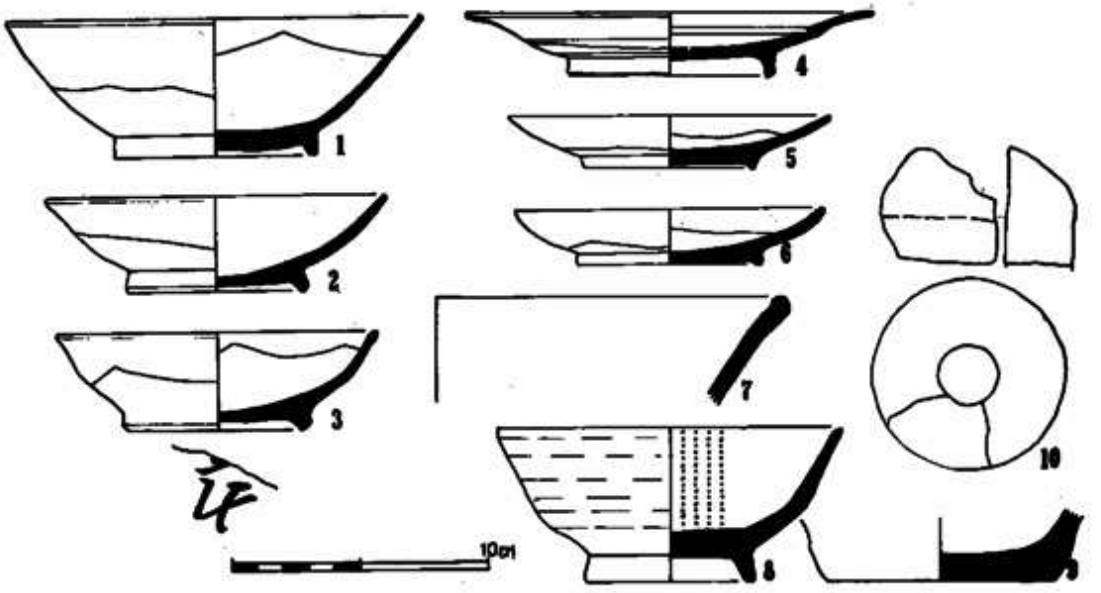
隅丸方形で、東壁4.10m、北壁4.20mの大きさである。カマドの方向を主軸方向とするとN45°Wとなり、対角線が南北に一致する。住居内の施設のあり方から見て、入口は南壁と思う。その場合の主軸方向はN45°Eとなる。壁は地形が西に傾斜していることもあって、ローム面からは東壁40m、西北壁20mと西に浅い。しかし、煙道上部は黒土層中（ローム面より10m高い）につくられていた。床面の状態は余りかたくなかった。柱穴は1のみである。貯蔵穴は2か所にあって、南隅よりの浅い大きいピットは鍛冶場にかかわるものである。いわゆる貯蔵穴は西壁に接して南よりにある。このピットに接して円形の扁平な石がおかれていた。



第9図　1号住居址実測図

カマドは北隅にあって、このような位置と、煙道部の残っているのは、当遺跡ではこの住居址1例である。最初の住居址調査とこの住居址の時だけ1日留守したこともあって、カマドたき口の調査は不充分である。石組粘土カマドでたき口部に直径85cm、深さ39cmの円形のほりこみし、あとでそこをうめて、石芯にして粘土で固めて両袖をつくっている。天井には石を使って組んでいたようで、たき口にそれと思われる石がうまっている。煙道部は境界に石を横に渡し、小礫を並べてつくっている。この部分は黒土であるが焼けている。カマドたき口部よりガラス状溶解物が2個出土している。

鍛冶場の火床と思われる掘りこみが南壁のほぼ中央部に見られた。巾45cm、奥行き70cm、深さ5mに床



第10図　1号住居址出土遺物土器実測図

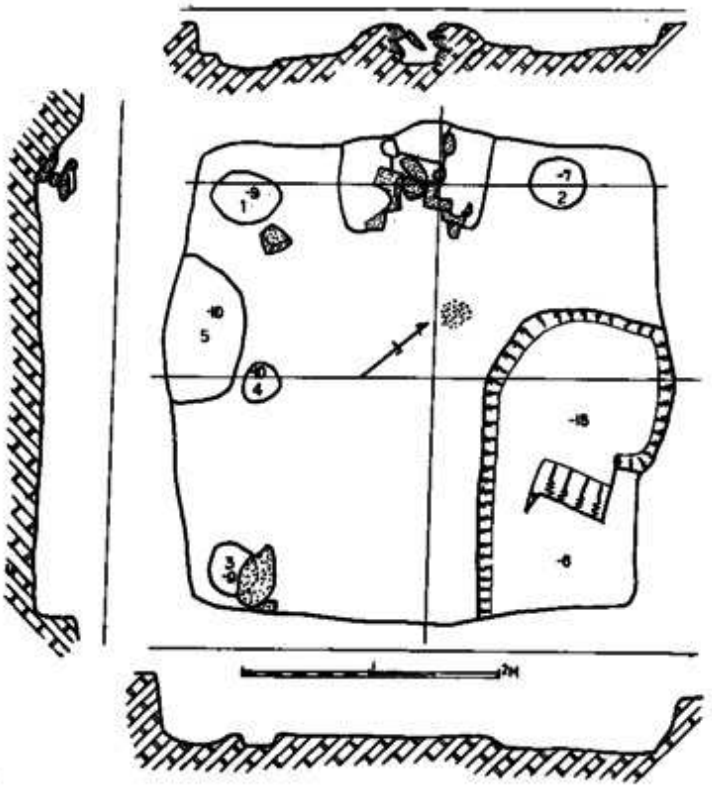
面をほりくぼめ、壁は上部で18mほって煙道部をつくる。全体によく焼けている。火床部からフイゴの口とカナクソが出ている。接して南側に浅い大きな掘りこみがあり、ここからは焼土と炭にまじってカナクソが多く出土した。この部分の調査時に神村が留守をして充分な観察ができなかった。

住居埋土中には礫が多く、特に南隅に集中し、廃絶時かその後意識的に入れこんだものである。

遺物は多くなく、種類は白瓷、土師器、フイゴ、カナクソ類である。白瓷は椀が4個体分あり、大形椀(1)、中形椀(2・3)で、1には5の皿が入っていた。3の底部には墨書がある。皿は完形品3個で段皿(4)、丸皿(5・6)である。土師器は坏(8)と甕(9)で、坏は高台の高い、深みのあるもので内面が黒色研磨されている。甕は糸切底の部分で、部厚さや直径から見て、当遺跡では大形である。フイゴの口は粘土でつくられ、直径7.5m、孔の径2.5cmの筒状で、先端部は半球状に丸味をもって終っている。その部分に高熱によって溶けたガラス状付着物が見られる。カナクソは溶解物を床面にすてて、それが自然にかたまったような状態で、裏面が半球状をしめし、小石が付着している。ガラス状溶解物は、フイゴの口に付着していたものと同じで、小さな塊である。

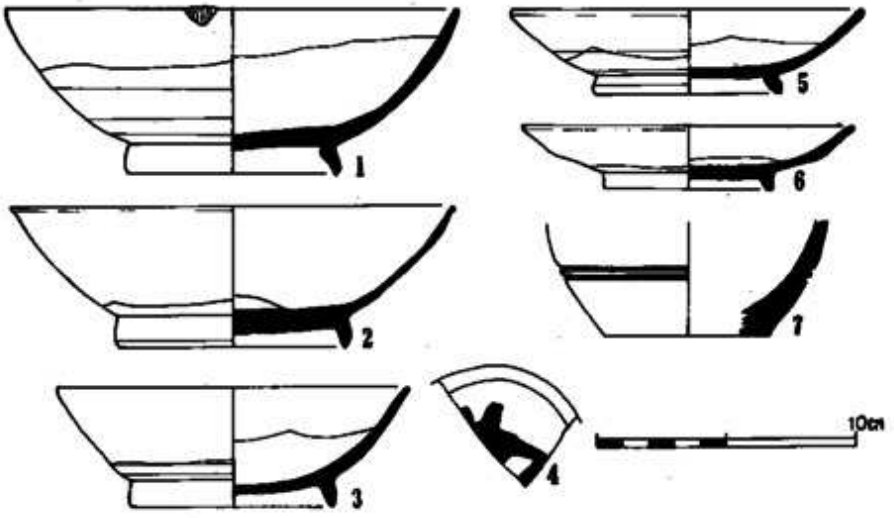
3.　2号住居址

隅丸方形で、東壁3.45 cm 北壁3.50 cmの大きさである。主軸方向N51°Wを測る。壁は山よりが高く、東壁41 cm、北壁19cmとなっている。床面は中央部がかたく、カマドに近く焼土部が見られた。東隅から北壁にそって長方形の大きなほりこみが見られ、東に浅く、西に深くと階段状になっている。これが当初からのものであるかは不明。このため主柱穴の一つは確認できないが、柱穴は4個あって1－3が主柱穴である。いずれも10以下の浅いほりこみである。貯蔵穴は西壁中央部に接してあって、ほりこみが10cmと浅い。カマドは西壁中央部にあって、石組粘土カマドある。両袖に扁平な石をつんで、たき口部には天井石をわたしている。つんだ石の外側を粘土でかためている。火床はよくやけている。煙道は壁面を少しほりくぼめてつくっている。

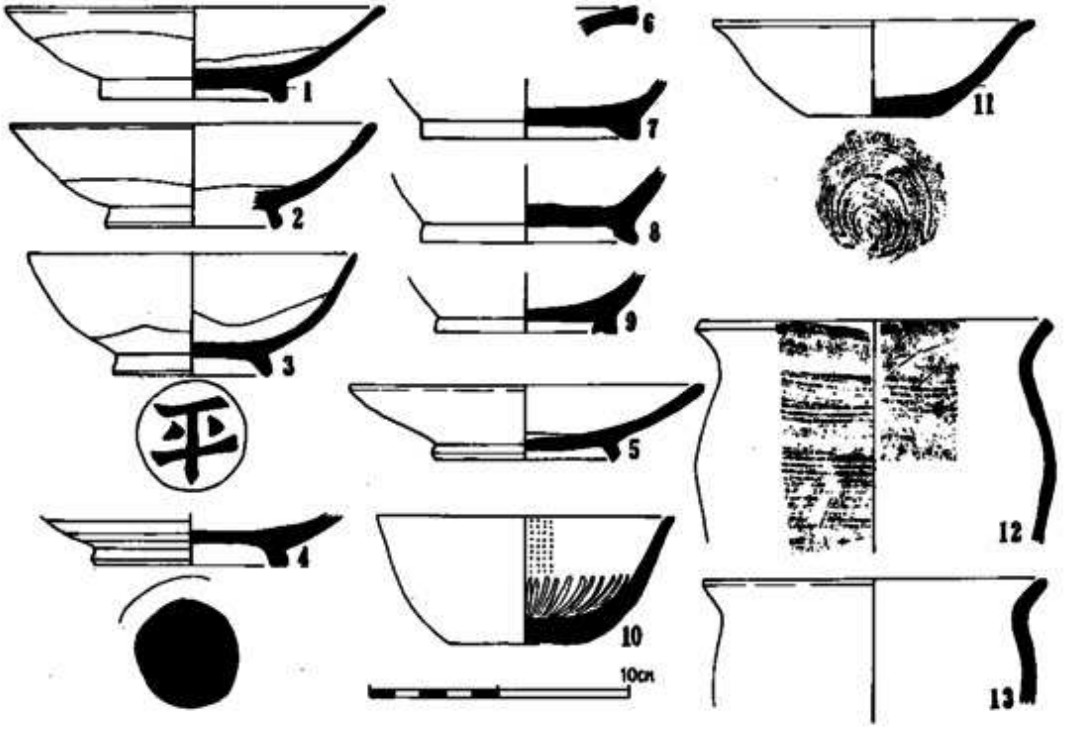


第11図　2号住居址実測図

遺物は白瓷、須恵器、土師器、かなくそが出ている。白瓷は約10個体分あって、輪花椀(第12図1)、大形椀(2)、中形椀(3)があり、底部に墨書のあるのも一片ある。皿は2個体分でいずれも丸皿（5・6)である。須恵器は甕の肩部と底部の破片がある。土師器は坏は内黒でないのが1個体分、甕は糸切底の胴下半部で、2本の平行状線がついている(7)。カナクソは2個ある。



第12図　2号住居址出土土器実測図

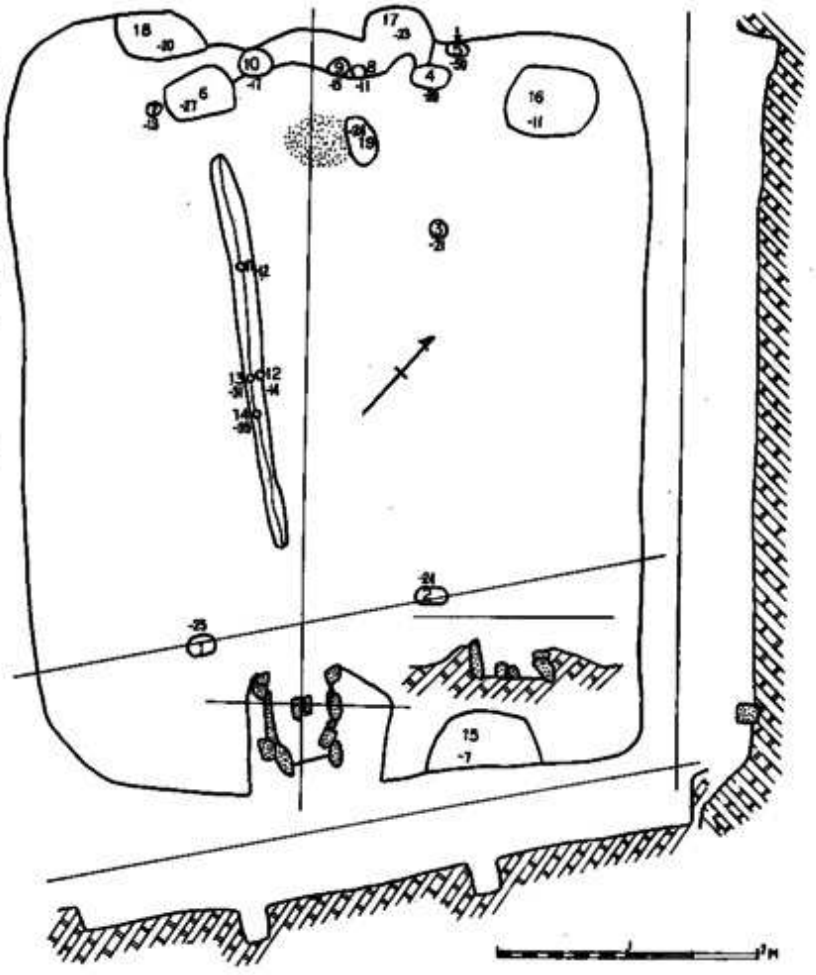


第14図　3号住居址出土土器実測図

4.　3号住居址

隅丸長方形で、東壁4.60m、北壁5.55mの大きさである。カマドが東壁にあるため、主軸方向は他の住居址と逆になりS41°Eとなる。壁は東に高く(40cm)、西に低く(22cm)となっている。床面は中央部がかたくなっていた。柱穴は多く、主柱穴は4本(1・2・4・6)で、5は壁面の下にほりこんで、中央に向いて傾斜していた。床中央より南によって、巾10～20cm、長さ3m、深さ5mの細長い溝があり、その中に小さな柱穴があり、間仕切り施設の溝と思う。貯蔵穴(15～17)は3こあって、15はカマドの北側に、16は北隅に、18は西隅によってある。西壁中央は周溝状の凹みがあり、床面より10cm低くなっている。17のように張り出し状にもなっている。なお、西隅は埋土が砂利で、廃絶後に尻平沢のおし出しがあったことを示している。

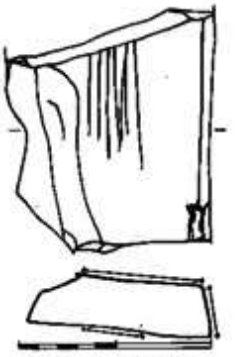
カマドは東部中央部に、壁が少し住居内に突出してつくられている。石組粘土カマドで、カマドの両壁を石をつんだり、立てたりしてつくり、その両側を粘土でおさえている。火床は床面をわずかにほりくぼめその中央に基部をわずかにうめて、角柱状の石を中央に立てて支脚としている。煙道は壁面を傾斜をつけてほっているのみである。このカマド天井は石でおおったらしく、焼けた石がカマドの周囲に30個出た。



第13図　3号住居址実測図

西壁より中央部に焼土が見られ、中央がわずかにくぼみ、その北側に炉縁石をはずした穴が見られる。

遺物は白瓷、須恵器、土師器、緑釉陶器、石器、かなくそが出ている。白瓷は椀が6個体分あり、図にとれるのは中形椀（第14図1～3）である。3には底に「平」の墨書があり、また、底の中央に丸く墨をぬったのもある（4）。皿は5個体分あって、段皿1以外は丸皿（5）である。瓶は5個体分あって、口縁（9）、胴部、底部（7・8）といずれも小破片である。須恵器は瓶底部片（9）がある。土師器は坏が5個分で、底は糸切底である。内面黒色研磨のもの（10）と、そうでないもの（11）とがある。甕は4個体あって、口縁が平に面をもち、胴の内外両面に櫛状器具の横走線のつくもの（12）で、胴が少し口径より大きい器形のものと、器面をなで整形した口唇が丸味をもち、胴があまり張らないもの（13）がある。1片の小破片であるが須恵質の坏に緑釉をつけた坏片が出ている。石器（第15図）はち密な片麻岩の砥石で、仕上げ砥と思われる。カナクソも1個出土している。



第15図　3号住居址出土石器実測図

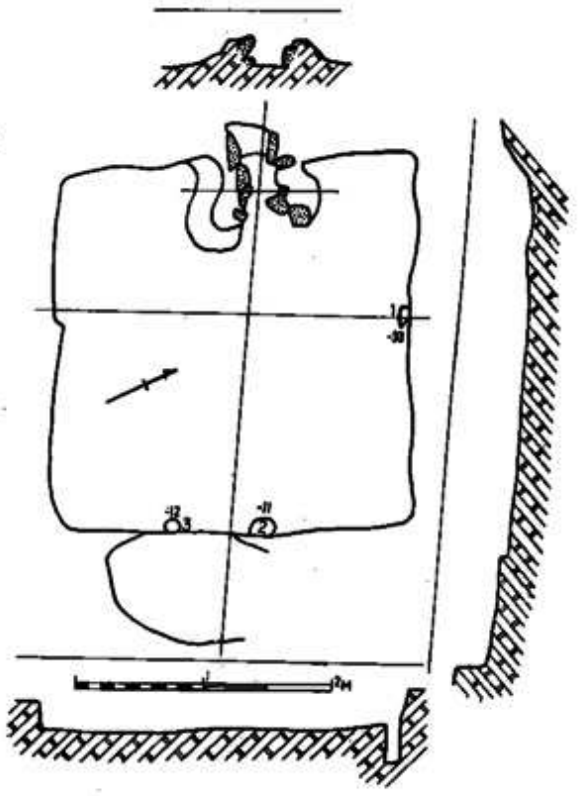
5.　4号住居址

わずかに角が丸味をもつ方形住居址で、東壁は2.80m、北壁は2.80mと小形の住居である。主軸方向N65°Wとなっている。壁は東壁に高く（31cm）、西壁に低く（25cm）なっている。床は全面にかたい。柱穴は3こあって、対応するところを注意したがなかった。東壁の入口部と思うところの壁が外側へ楕円形状にほりこんであったが、住居につくものか、後のほりこみかは不明である。

カマドは西壁中央にあって、石組粘土カマドである。煙道部にも石壁をつくっている。支脚石はない。

なお、埋土中の北隅、カマドの北側に焼石が集中して50個近くあった。これらの石はつみこんだようにあって、下部は床面より5cmういていた。

遺物は一片も出土しない。



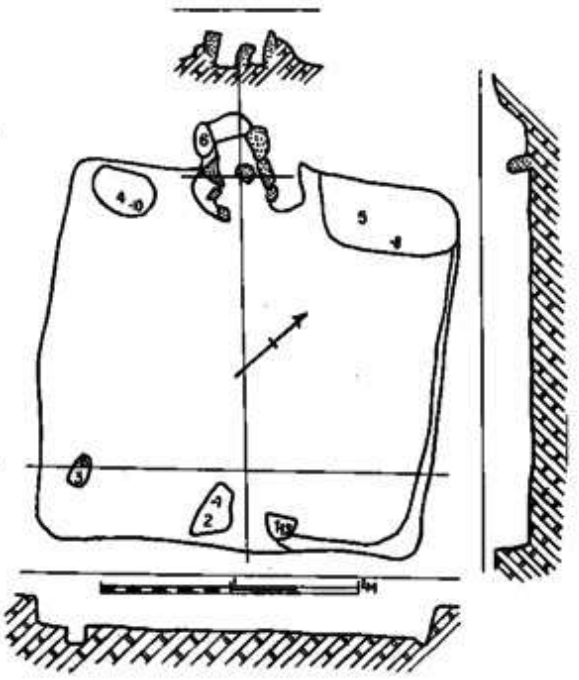
第16図　4号住居址実測図

6. 5号住居址

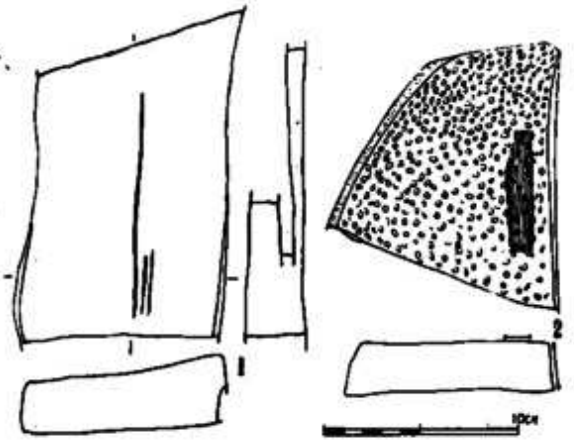
わずかに角が丸味をもつ方形で、東壁2.95m北壁2.80mの大きさで、主軸方向N42°Wとなる。壁は東に高く(30cm)、西に低い(20cm)。床面は全面にかたい。北壁から東壁の柱穴までに周溝がある。柱穴は4個(1～4)で、北壁側にない。貯蔵穴は北隅にある。

カマドは西壁中央にあって、方向が少し西へずれてつくられる。石組粘土カマドで、西側の奥の石はぬきとられている。火床に支脚石が立っている。このカマド中に土師器甕が出土した。

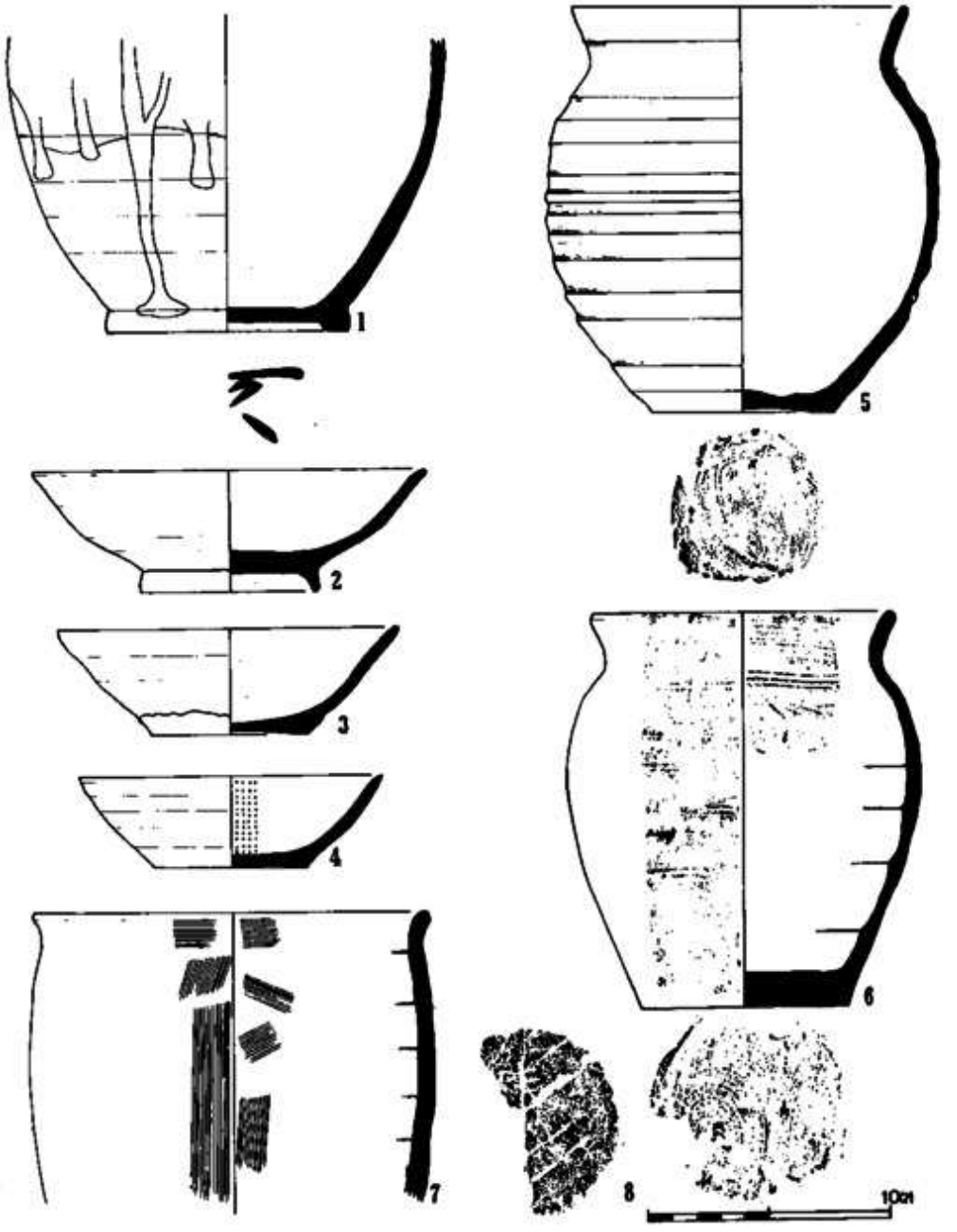
遺物は白瓷、土師器、石器がある。白瓷は椀・皿の小破片と、瓶の胴下半(第18図1)がある。土師器は坏が5個体分あって、2は高台がつくもので、内面底部に墨書がある。3は糸切底であって、4は内面黒色研磨されている。甕は6個体分あって、5・6は糸切底ロクロ整形であって5はロクロひきの凹みが強く残る。胴が中央ではる球形である。7は胴が上半部ではる器形で、櫛状器具の横走線がつく。7は輪積み整形で、口縁がわずかに外片し、胴のほとんどはらない器形で、その底部(8)と思われるものに木の葉圧痕がある。石器は砥石が2個あって、第19図1は仕上げ砥で、中央に刃部をすった溝が見られる。2は荒砥で、わずかしか使用されていない。



第17図　5号住居址実測図



第19図　5号住居址出土石器実測図



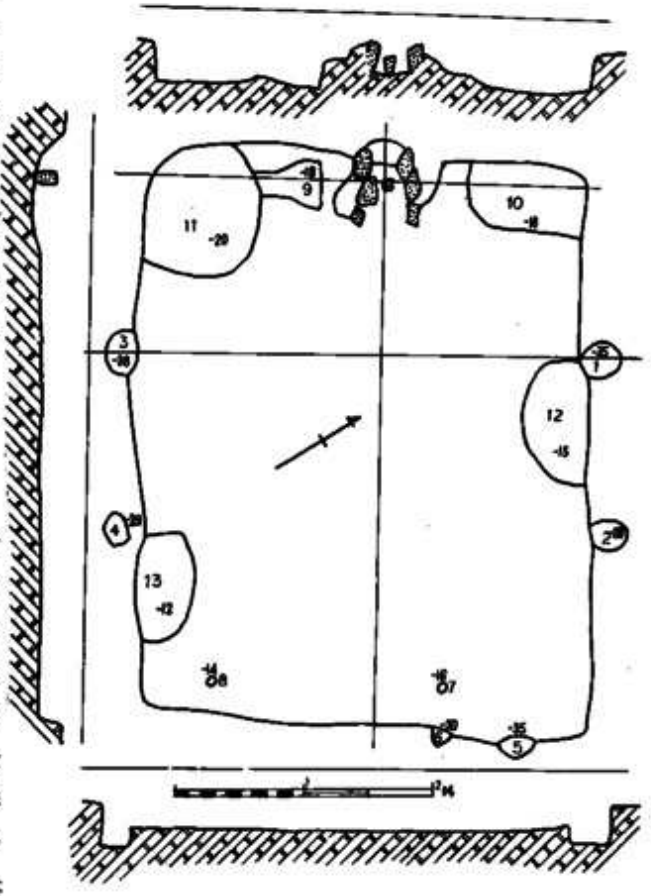
第18図　5号住居址出土土器実測図

7.　6号住居址

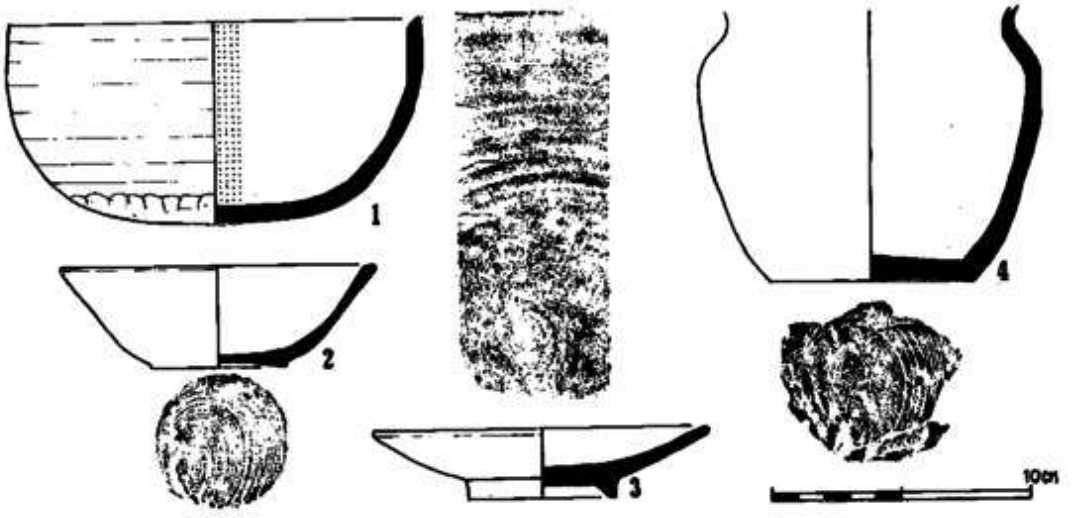
丸味が隅にない長方形で、東壁3.35m、北壁4.40mの大きさである。主軸方向はN59°Wとなっている。この住居址は住民の土取中、黒土の中から焼土や木炭が出土するとの通報で調査して確認する。この部分は耕作土・黒土が深く、上部の黒土はとり去られ、木炭が集中して出土していた。壁はローム面で20cmであるが、一部黒土残存部の観察では、黒土中から壁がほりこまれていたようである。生活時に火災にあったようであり、火を消すために土をかぶせたのか、東半部にかけて焼土塊が見られ、その下に木炭が多くあった。木炭とうまっている黒土中の柱穴2に近いところから、鎌と紡錘車が、東隅からは石を割るためのヤ、針、つり針が、東壁よりに鉄鉢形の土師器椀、刀子が出土する。木炭は建築材で、板状のものや木皮のついた丸太がある。床面にはワラを敷いてあったのか、床面にはワラの炭化したのが見られた。貯蔵穴13に接して米の炭化物が一握り、12に接して豆状の炭化物と7mm程の果実の種子が出土する。壁はローム面より黒土中10cm上からほりこまれていたようである。そうだとすると壁高は30cmとなる。床面は全面にかたい。柱穴は6個あって、南北両壁中央に、2対づつあるのが主柱穴（1～4）である。東壁に近くと、壁に、2つの対になった柱穴があり入口部の柱穴とも思われる。貯蔵穴は4個あって、カマドの両側の隅にと、北壁と南壁に接して1個ずつある。カマド南側には柱穴状のピットが見られる。

カマドは石組粘土カマドで、火床中央に支脚石が立っている。

遺物は土師器、鉄器、炭化種子がある。土師器は鉄鉢形椀の完形品（第21図1）で糸切底をヘラケズりして丸底にして、内面は黒色研摩している。坏は3個体で、糸切底のもの(2)で、他に内面黒色研磨のものもある。皿はきれいに磨かれた高台つきのもの(3)、甕はロクロ製糸切底の、肩で最大巾をもつ器形のものがある。鉄器は大形の曲刃の鎌(第22図1)、石をわる時のクサビにつかうヤ(2)、小形の刀子(3)、三本の鉄棒をねじりつけた大形の釣針(4)、と一本の釣針上部(5)、ぬい針のわずかに上

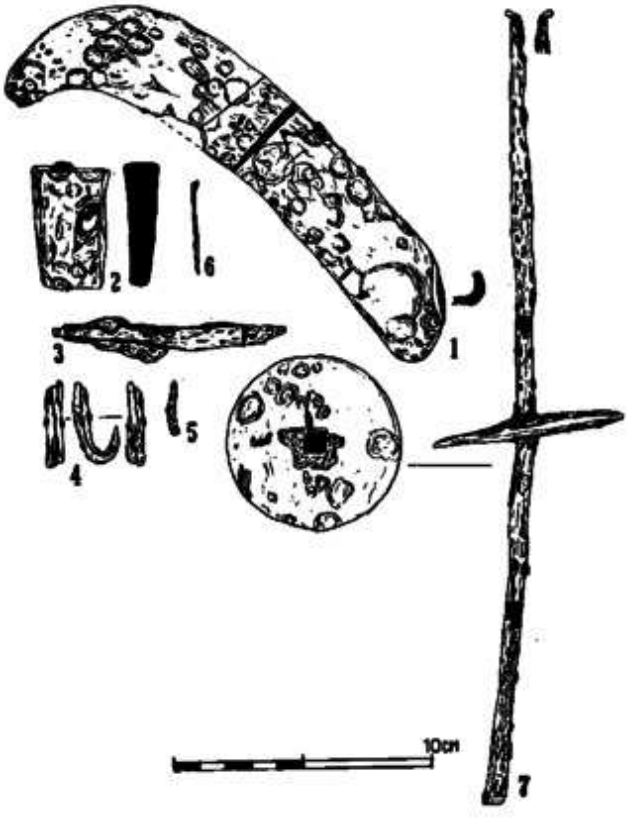


第20図　6号住居址実測図



第21図　6号住居址出土土器実測図

端をかくもの(6)、先端が引っかかるようにまげられた紡錘車の完形品がでている。炭化種子は米と小豆ともう一つは調査中こわれてしまい不明であるものが出土している。現在、炭化種子を計測研究している仲間に計測を依頼してある。



第22図　6号住居址出土鉄器実測図

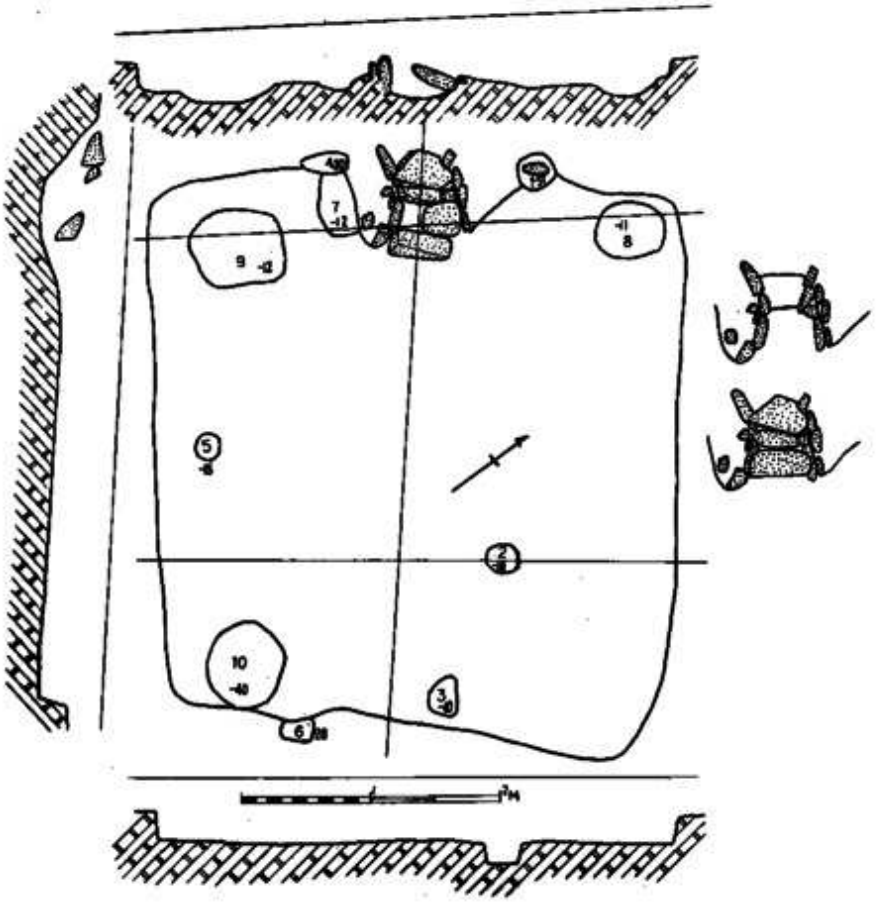
8.　7号住居址

隅丸長方形で、東壁3.80m、北壁4.30mの大きさである。主軸方向はN42°Wとなる。土取中に発見された。壁はローム面からで20cmあるが掘りこみは黒土中からであったと思う。床面は全体にかたい。

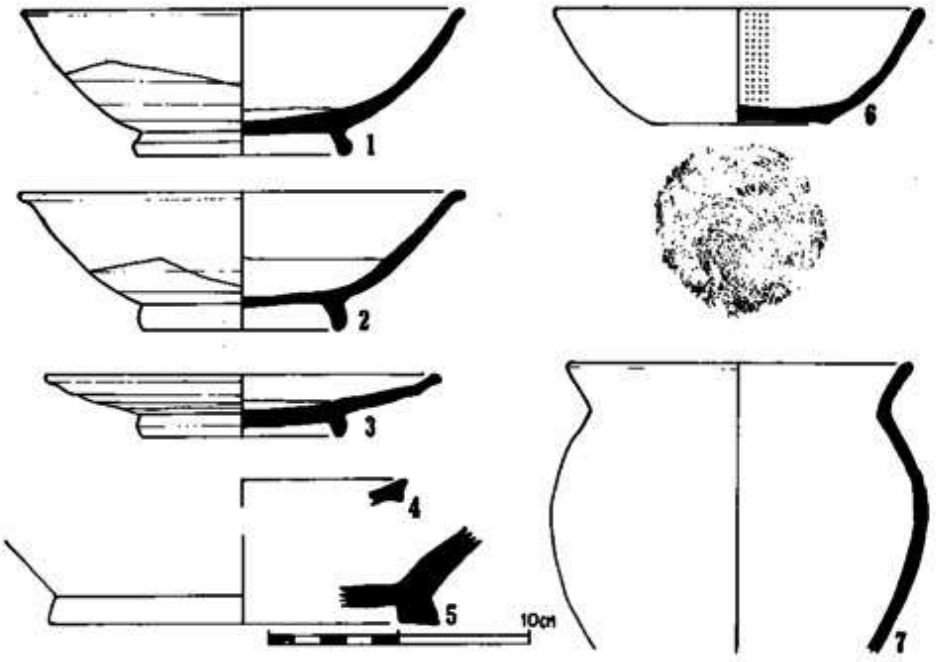
柱穴は6本あって、西壁の1・4、東壁の3・6が対になる。1・4の中には白瓷・土師器片がおちこんでいて、1には礫も入っていた。このことは柱穴だとすると、廃絶時に柱をぬいたものと思う。カマドの南側には貯蔵穴がある。同様に大きくて浅い掘りこみが東隅を除いて3隅にある。あるいはこれが主柱穴かも知れない。掘り方がすり鉢状であるので貯蔵穴としておく。

カマドは西壁中央部にあって、石組粘土カマドである。保存の状態がよく、天井石が完全に残っていた。天井石には粘土でおおってなく、扁平な長い石をのせてある簡単な造作である。たき口部の石がずれおちていたので、のして見たら、甕などを置く穴がなくて、この石の位置がはっきりしない。火床に支脚石はなかった。

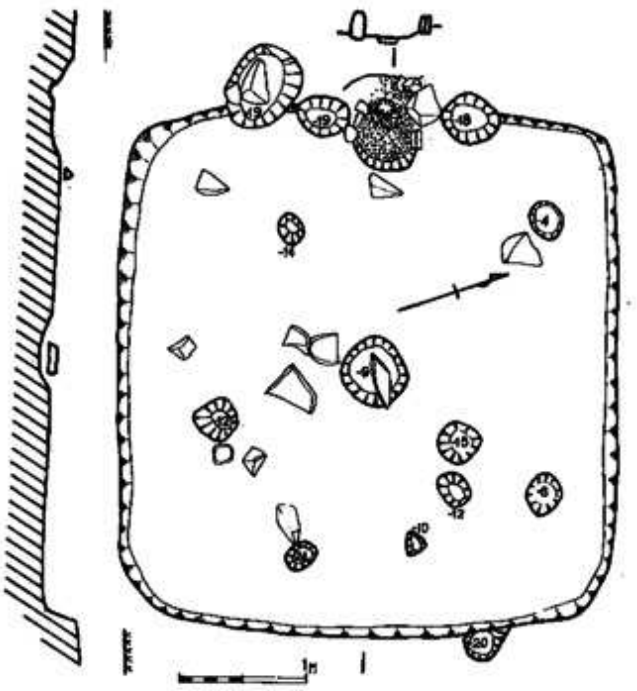
遺物は白瓷、土師器である。白瓷は椀が4個体分あり、大形椀（第24図1・2）である。皿は2個体で丸皿（3）である。瓶は口縁部片（4）が、甕は底部片（5）がある。土師器は坏が3個体分で、糸切底内面黒色研磨されたもの（6）と、甕は1個体で、胴がほぼ中央ではる球形の小形甕である。ロクロ整形で、器面は細かい横走条線がつく。内面には附着物が見られる。



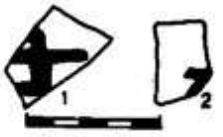
第23図　7号住居址実測図



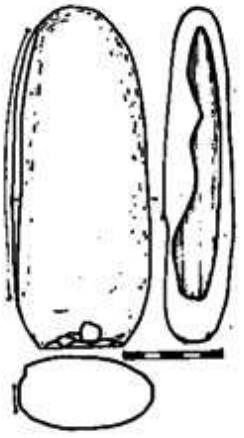
第24図　7号住居址出土土器実測図



第25図　8号住居址実測図



第26図　8号住居址出土土器実測図



第27図　8号住居址出土石器実測図

9.　8号住居址

隅丸方形で、東壁3.65ｍ、北壁3.63ｍの大きさで、主軸方向はN71°Wである。砂礫土層をほりこんでいるため、壁や床に礫が露呈し、不安定な感をもたせる。柱穴は４主柱で壁にほりこむ。床面内のも主柱となるのもあるだろう。貯蔵穴はカマド南側の壁を大きくほりこんでつくられ、中に大きな礫がおちこんでいた。床面のほぼ中央部に円形のスリ鉢状の直径50cm、深さ９cmのほりこみがあり、その上面はかたくたたかれていた。その周辺に石が多く、カマド用の石と思われる。

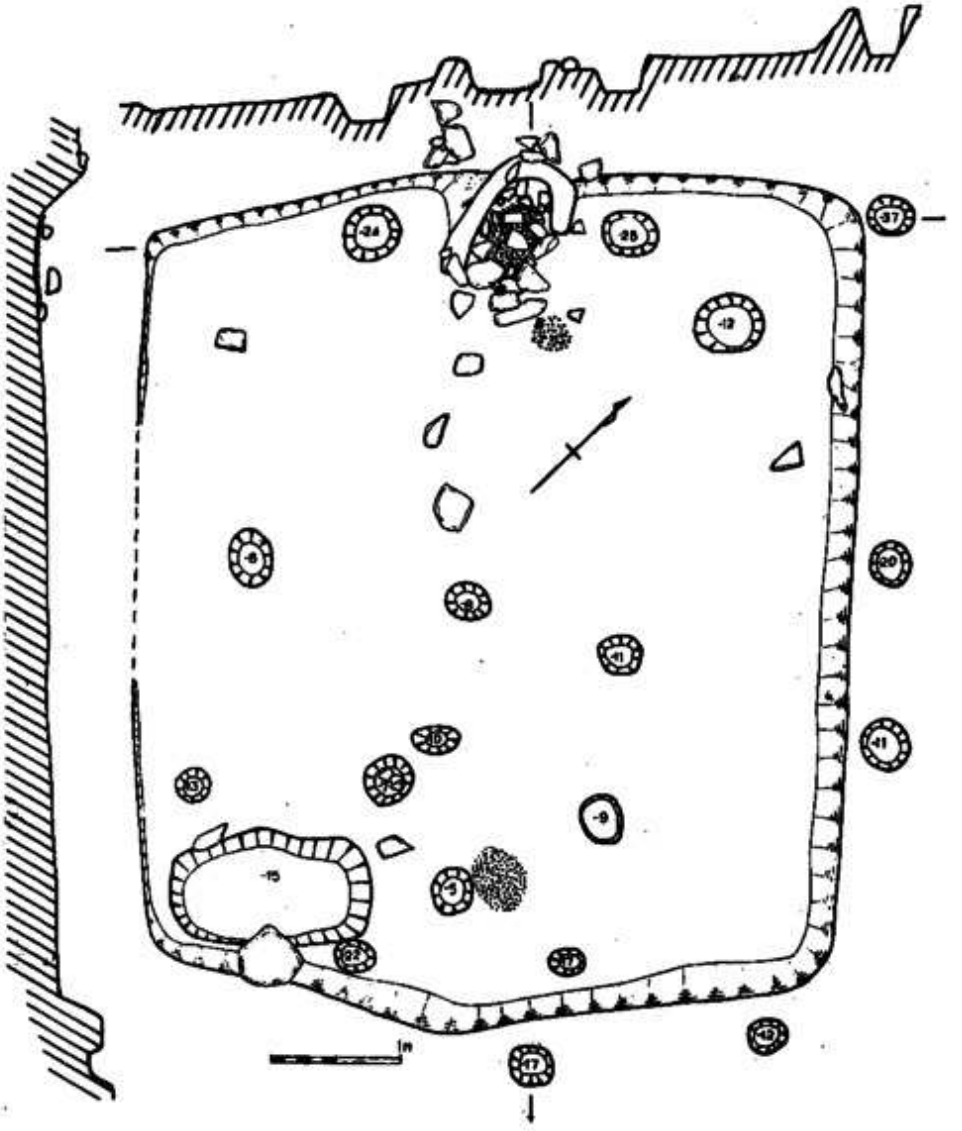
カマドは西壁の中央部にあって、石組粘土カマドである。石壁や天井石はくずれて、カマド前の一帯にちらばっていた。火床の煙道よりに小さな円形の凹みがあり、支脚石の抜けたものである。カマド中にあった石の中に特殊磨石があり、これが支脚石に使われていたものと思う。

遺物は白瓷、須恵器、土師器、石器があるが、石器以外はいずれも小破片で器形を知るものはない。白瓷には椀、瓶があり、椀には墨書や墨痕のあるものも（第26図１）ある。須恵器は坏・瓶・甕である。土師器は坏、甕で、坏には内黒色研磨されたものや墨書されたもの（２）がある。石器はいわゆる特殊磨石で、扁平長楕円形状の河原石を利用し、長辺の１側縁を使っている。また短辺の一端を敲石に利用したらしく打割が見られる。当遺跡から縄文時代早期押型文土器も出土しているので、その時代の石器を再利用したものと考えられる。特殊磨石は12号住居址からも床面から出土していて、この時代にもあったとも考えられる。

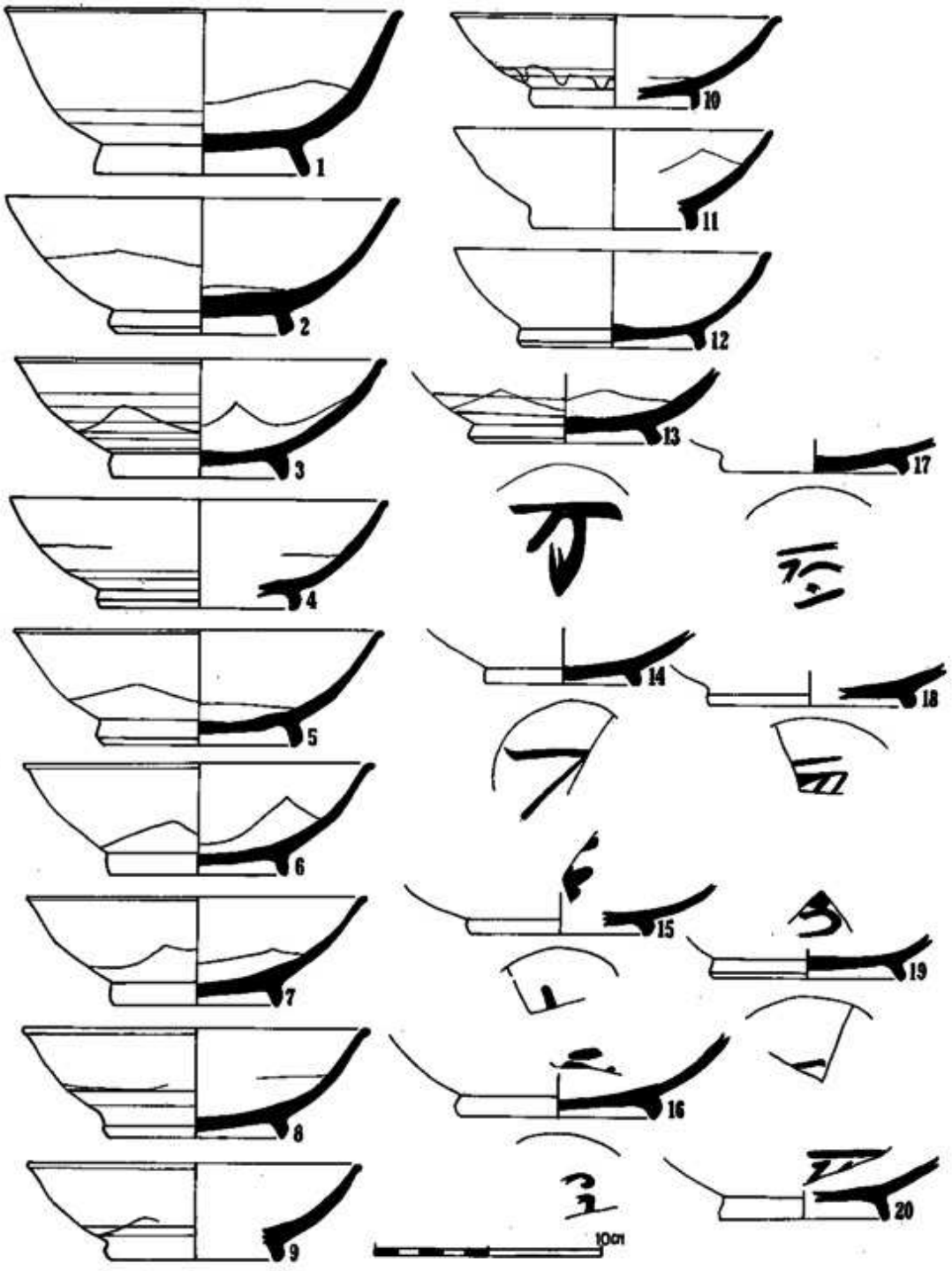
10.　9号住居址

角の強い隅丸方形で、東壁5.04m、北壁5.80mの大きさで、主軸方向はN44°Wである。当遺跡では大形の住居址になる。礫まじりの土層をほりこんでいるが、傾斜地のため南壁の一部と床は黒土中につくられている。壁は東隅に高く(46cm)、南壁に低い(4cm)。床面は中央部ではとくにかたくなっている。

柱穴は18あるが、4主柱で、他は支柱と思う。この住居址には壁外支柱が見られる。東・北壁外で確認し



第28図　9号住居址実測図



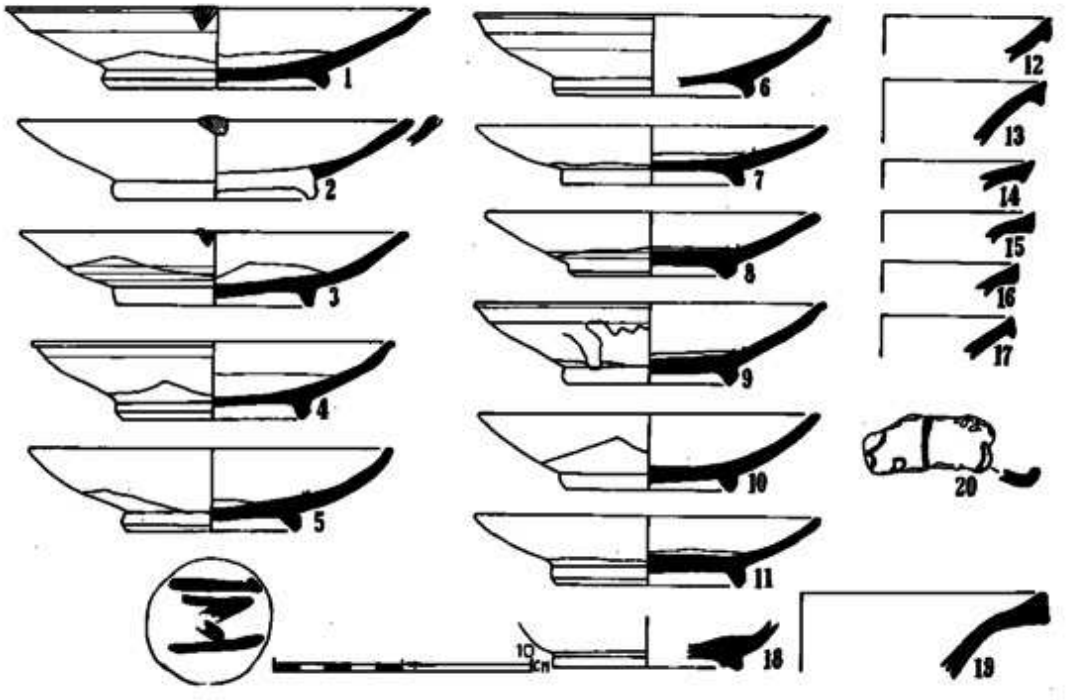
第29図　9号住居址出土土器実測図

たが、南壁は黒土であったのと、壁面をほりすぎていることもあって柱穴を確認できなかった。西壁にはなかった。南隅に長方形のほりこみがあり、その底面には焼けた角礫がしきつめてあった。東壁側のほぼ中央部には円形の扁平な石が壁によりかけるようにおかれていた。大きさやありかたから見て貯蔵穴とはちがっている。墓拡のように思われる。この場合は竪穴とは時期を異にし、後のものとなる。

カマドは西壁中央部にあって、石組粘土カマドであるが、石組はすっかりこわされて、カマドとその前面床に散在していた。火床はよく焼けていた。床面が焼土となっているところが2か所あって、1か所はカマド近くに、もう一つは東壁よりの中央部に見られた。

なお、この住居址がほとんどうまったころに、尻平沢の押し出しがあったらしく、砂礫土まじりの黒土層があおっていた。

遺物はどの住居址よりもその出土が多く、全て破片で完形品はない。白瓷、須恵器、土師器、緑釉陶器鉄器とある。ほとんどが白瓷で、口縁部と底部の破片で見ると、白瓷が345片、須恵器3片、土師器5片となっている。白瓷は椀が多く、器形のわかるもの（第29図）は住居址西半の壁際とカマド周辺から出た。輪花椀、墨書のあるものがある。皿は丸皿が多く（第30図）、輪花皿、段皿もある。墨書もある。瓶は小破片（12～17）である。須恵器は坏（18）と甕（19）で、土師器は坏と甕の小破片である。緑釉陶器は椀の小破片である。鉄器は小形の長方形で、一端におりかえしがあるので鎌と考えられる。2の白瓷坏は底部をつくって日乾しをしてから坏部をつけた変った整形手法をとっている。



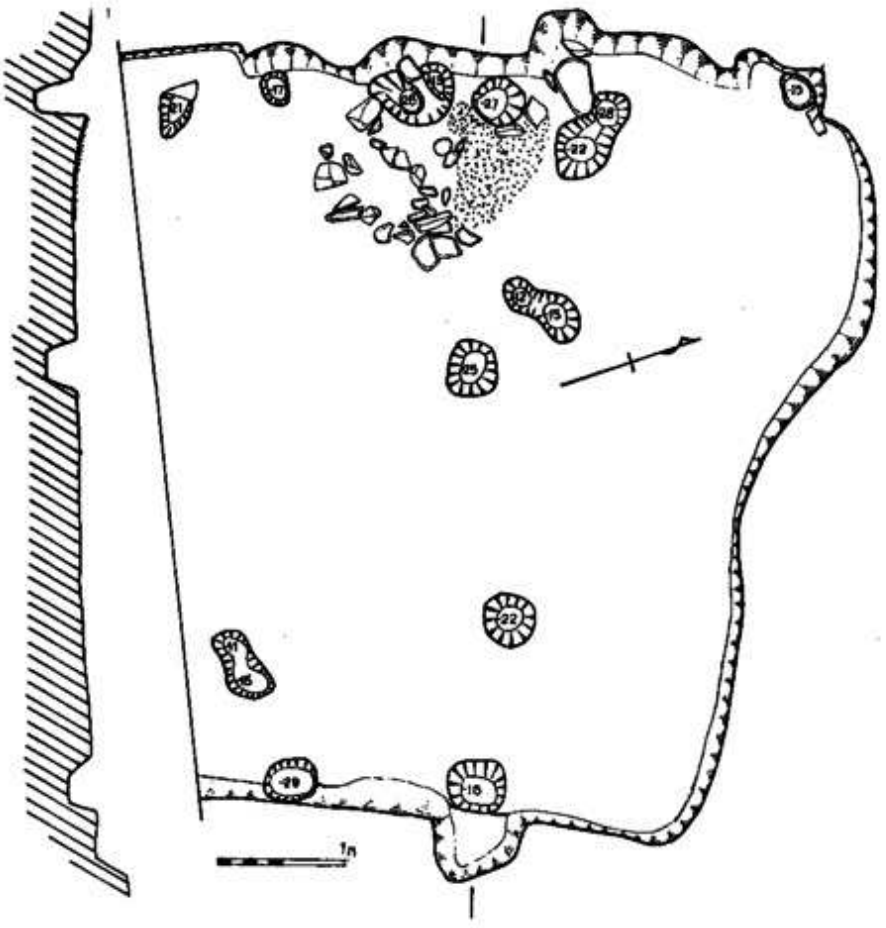
第30図　9号住居址出土土器実測図

11. 10号住居址

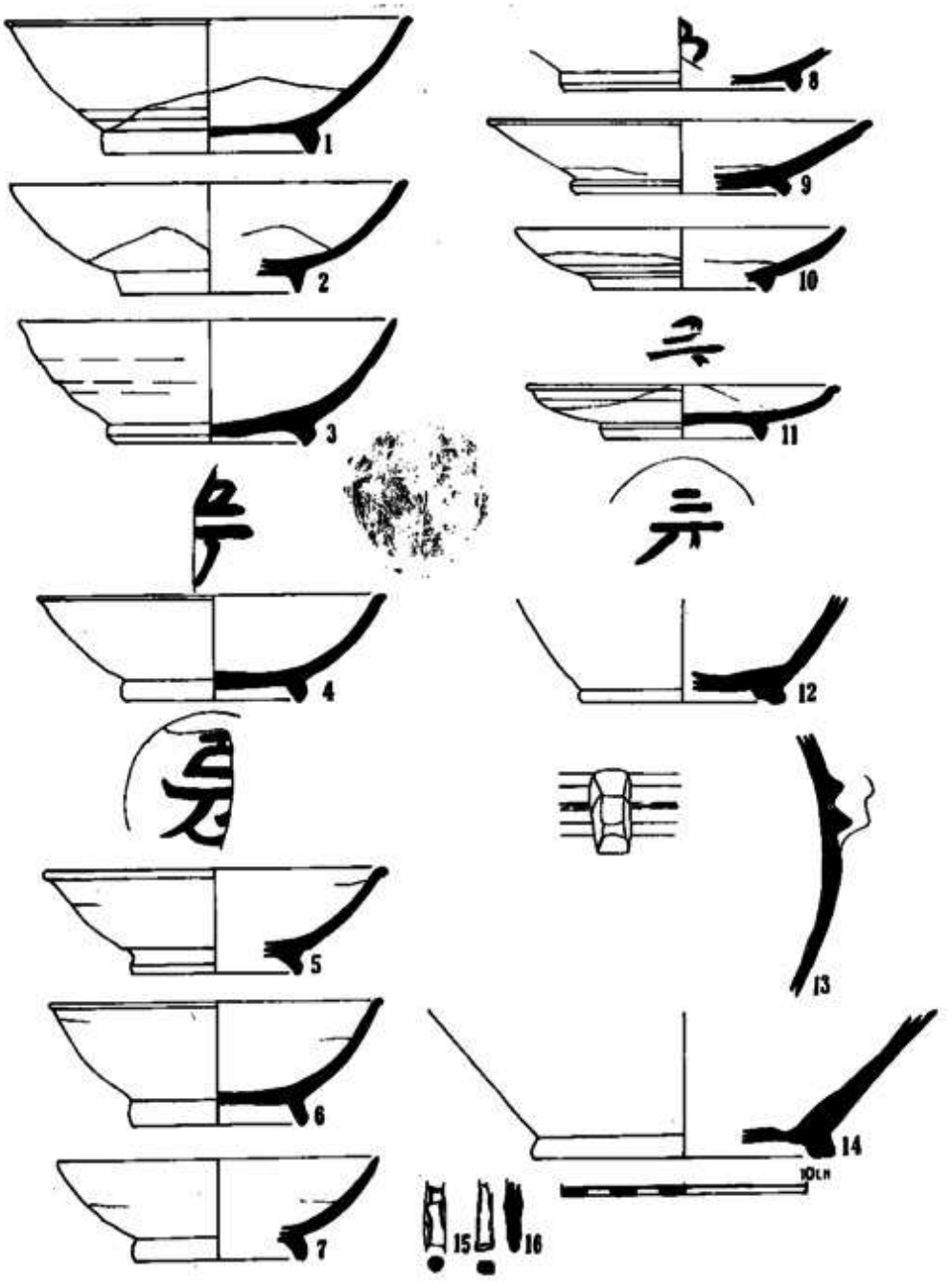
隅丸不整形で、南壁は用地外にあって調査できない。北隅に張り出し部のあること、東壁に階段状の掘りこみのあるのが注意される。床面はかたく良好である。柱穴は多くあるが、東・西壁の２こ対の四主柱と思われる。北壁6.00m、主軸方向N70°Wの大形の住居で、埋土内に礫が多く入っていた。

カマドは西壁中央部にあって、石組や粘土はすっかりこわされて、石が床面におかれていた。

遺物の出土量は多い方で、白瓷、須恵器、土師器、鉄器がある。白瓷は椀が多く、皿が少ない。椀（第32図１－８）は大形・中形の椀で、輪花椀や墨書のあるものもある。３は生焼きで、やわらかく使用が困難だったと思われる。底にカマ印かと思うヘラ描き文がある。皿（９～11）には丸皿、輪花皿、段皿があり、墨書も見られる。瓶は底部(12)が大きい。鉢の破片もある。須恵器は大形の四耳壺肩部（13）や甕（14）がある。土師器は坏と甕の破片で、内面黒色研磨の坏もある。鉄器は小破片で、15は断面が円形、16は断面が方形を呈し、いずれも鉄鏃の中子と思う。



第31図　10号住居址実測図



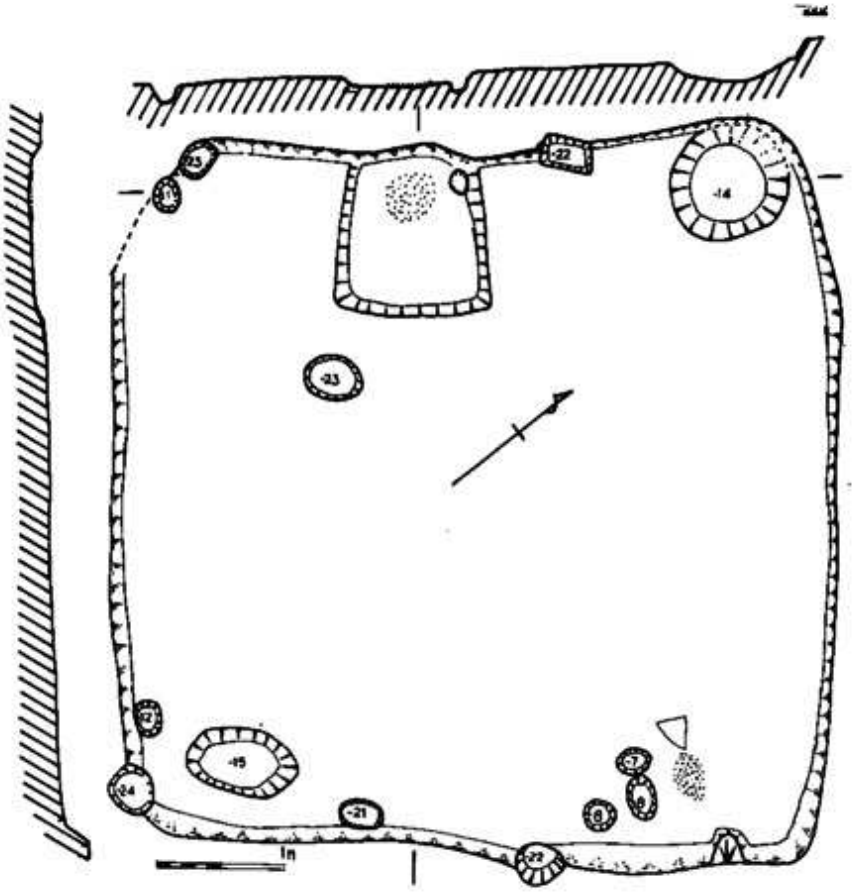
第32図　10号住居址出土土器実測図

12. 11号住居址

角がわずかに丸い隅丸方形で、東壁5.10m、北壁5.50mの大きさである。主軸方向N53°Wである。西隅は耕作のため不明確であり、北隅はポイントがあって調査できなかった。礫まじりの褐色土層をほりこんでいる。埋土中には頭大の角礫が入れられ、住居址廃絶時にわざとうめたようである。東壁にそったところには赤土もともに埋めて、さらに火をたいたための焼土が見られ、それは住居外にものびていた。床面はあまり良好でない。柱穴は東壁の3と西壁の2とカマド前の1の6主柱と思われる。貯蔵穴といっている大きなほりこみは2か所にあって、1つは北隅に円形プランでスリ鉢となっている。もう1つは南隅にあって、不整楕円形である。

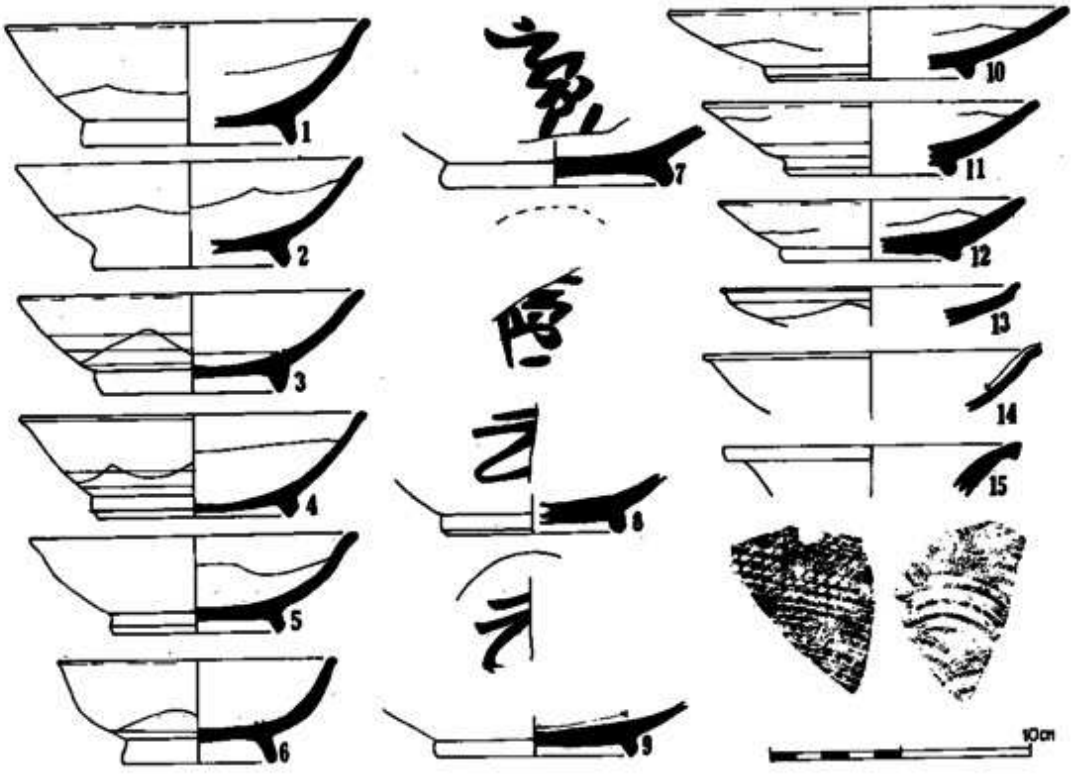
カマドは西壁の中央部にあるが、完全にこわされていて、長方形の掘りこみと焼土によって、そこにカマドがあったのを知る。カマドをこわすことと、埋土内に礫を入れたことと関係がありそうである。焼土部は東隅近くにもあるこの部分には壁がわずかに突出している。また焼土の南側には柱穴が3個集中してあり、特別な遺構があったとも考えられる。

遺物は多い方である白瓷、須恵器、土師器緑釉陶器、かなくそがある。器形のわかるものは北壁際にあった。第34図の3と5は接合で完形品となった。白瓷の椀は大形なのがなく、中形が多く、小形のものもある(1～9)。墨書のあるもの(7・8)と、内面底部で朱をといだと思うもの(9)もあった。皿は9号住居址についで多く、丸皿(10～12)稜皿(13)、段皿、耳皿があり、と

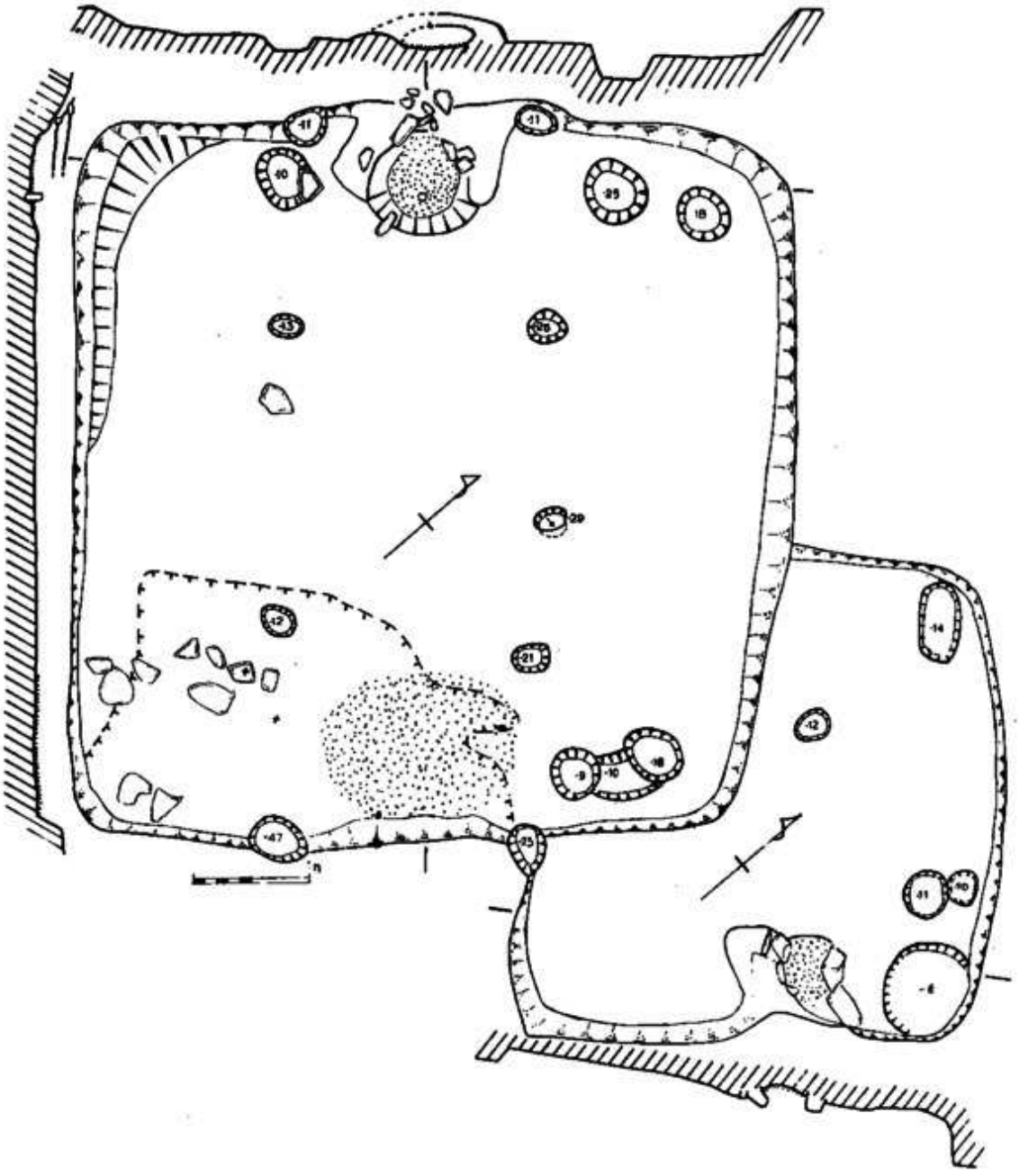


第33図　11号住居址実測図

くに耳皿の存在は注目される。また14の内面には黒色の附着物があり、ウルシをぬってあったと思われる。瓶(15)、甕(16)もあり、甕には両面にタタキ痕がついている。須恵器は甕片がでている。土師器は甕片がある。カナクソは１号住居址のと全く同じである。量も１号住居址についで多い。



第34図　11号住居址出土土器実測図



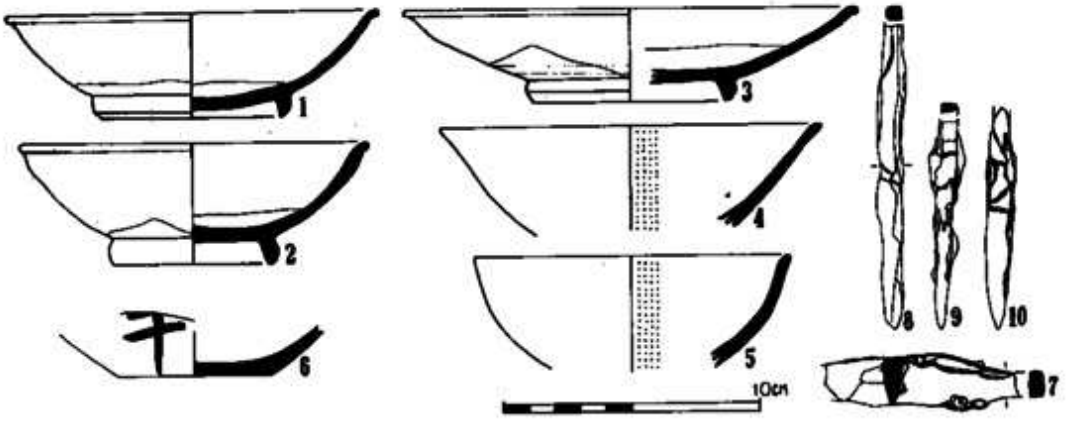
第35図　12・16号住居址実測図

13. 12号住居址

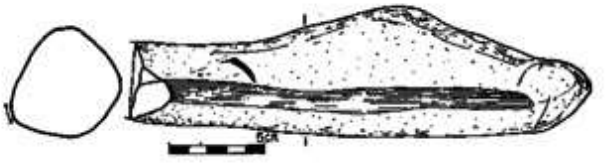
隅丸方形で、東壁5.35m、北壁5.63mの大きさで、一番大きい。主軸方向N47°Wである。16号住西隅をきって作っている、南隅の埋土は木炭・焼土、礫があって、住居廃絶時に家の建築材をもやしたようである。床面は全面がかたい。柱穴は東・西壁2個1組のが、住居内にも同列上に4こあって、8主柱である。床中央の1こは掘りこみが西へ傾斜している。カマドの両側と東隅には大きくない貯蔵穴がある。

カマドは西壁中央部にあって、石芯粘土カマドで、たき口部がこわれていたが、煙道部はそのまま残っていた。扁平な石をおいて粘土でおおっているのがわかる。火床には支脚石が立っていた。焼土部は東壁よりにも見られ、これは埋土で見られた火災と関係がある。

遺物は白瓷、須恵器、土師器、鉄器、石器とある。白瓷は椀（第36図1・2）が多いが、器形のわかるのは2個のみである。皿（3）は大きい。瓶片も1片ある。須恵器は坏・瓶・甕片が見られる。土師器は坏（4～6）と甕があって、坏は内面黒色研磨されたもの、墨書のあるものがある。底は糸切底である。鉄器はいずれも破片であるが刀子（7）と鏃かヤリガンナの中子で（8－10）で、大きさから見てヤリガンナのものと思う。また紡錘車の一部とも考えられる。石器はカマド前の床面にあって、棒状の1側縁をすっており、一端がおれている。いわゆる特殊磨石（第37図）である。



第36図　12号住居址出土土器実測図



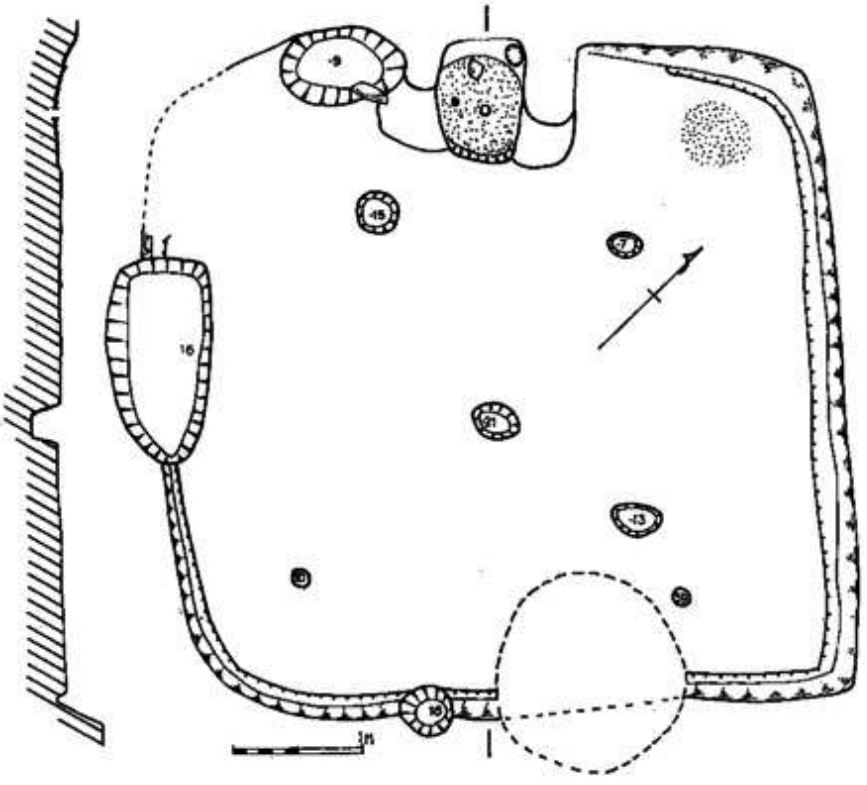
第37図　12号住居址出土石器実測図

14. 13号住居址

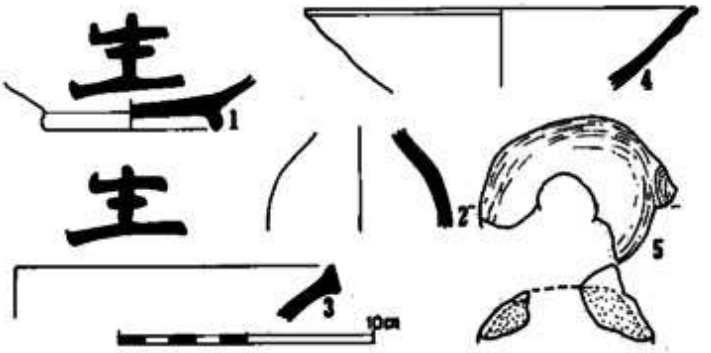
南壁は角が丸く、北壁は角のある方形で、東壁4.76m、北壁4.50mの大きさである。主軸方向N49°Wとなっている。南壁が耕作であれており、とくに西隅は不明確である。その部分をのぞいて周溝が壁をめぐっている。東壁と床面をこわして肥桶がうめられていた。床面は全面にかたく良好である。柱穴は4主柱で、東壁の一つはこわされて検出できない。他は支柱である。床中央に比較的深い（21cm）柱穴があるのが注目される。貯蔵穴はカマドの西側と、南壁の中央に壁にくいこんである。後者のは後の耕作にともなう掘りこみとも考えられる。

カマドは西壁の中央部にある。ほとんどこわされていて、わずかに両袖の粘土を残し、石を使用していた痕跡がないので、粘土カマドであったと思われる。火床には支脚石をおいたと思われる小さな凹みがあった。また西袖よりに「ふいご」の羽口の部分のみがあった。

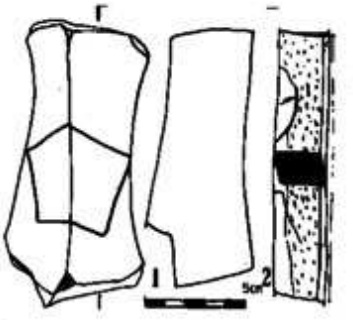
遺物は余り多くない。白瓷、須恵器、土師器、ふいご、かなくそ、石器がある。白瓷は椀の小破片で、内面底部と底裏に「主」の墨書のあるの（39図1）、皿、小瓶（2）がある。須恵器は瓶（3）と甕がある。土師器は坏(4)片のみである。ふいご羽口はカマド内から出土した。直径7cm、孔径2.2cmの大きさで、円筒上のふいご先端の溶解物だけがはずれておちたもので、その4分の1を欠く(15)。石器は砥石（第40図）で、1はよく使いこまれており、縦断面や横断面で見ても中が凹んでいる。2は角柱状節理にわれた石の一面を使っている。



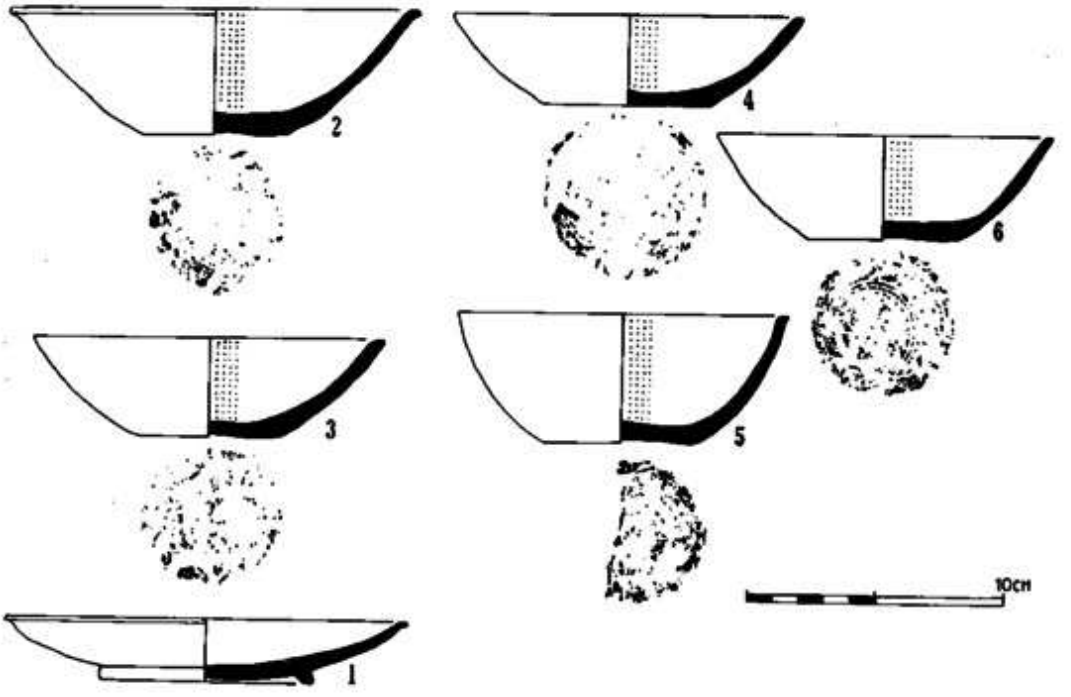
第38図　13号住宅址実測図



第39図　13号住居址出土土器実測図



第40図　13号住居址出土石器実測図



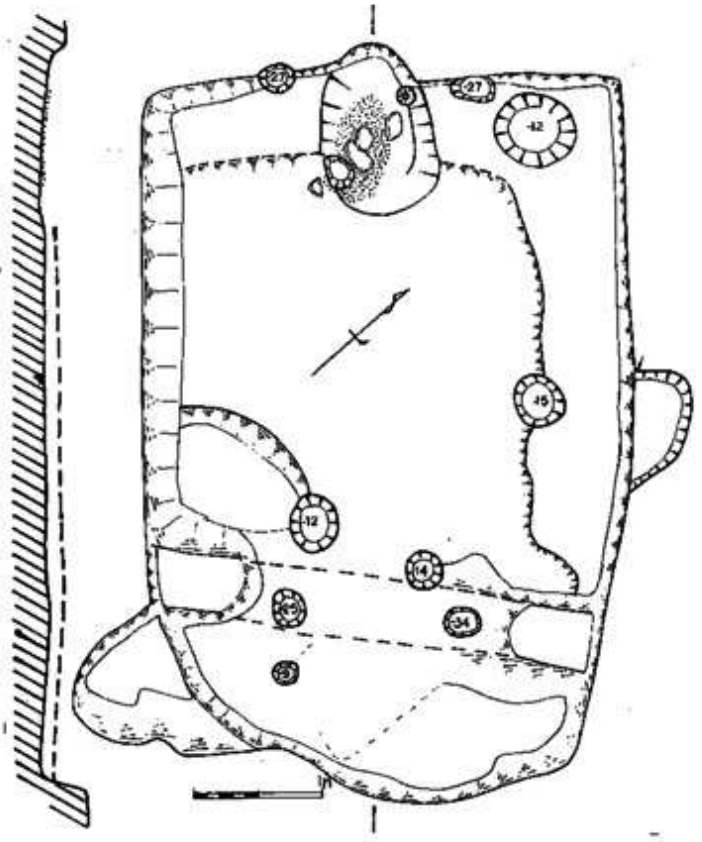
第42図　14号住居出土土器実測図

15. 14号住居址

西壁は角があり、東壁は弧状をしている長方形で、東壁2.70m、北壁5.00mの大きさである。主軸方向N50°Wとなっている。床中央部にローム混りの張り床があって、その張り床をとり除いたら、ほぼ13cm下部にローム面がある。その部分のプランや床面の状態はあまりよくないが、3.90m×3.20mの大きさで、小形の住居址の大きさになる。しかし、この住居址のカマドを確認できなかったが、位置的に上面の住居址のと重なる。上面の住居址は下部の住居址をうめ、東、北、西の三方へと拡大されている。この場合不自然なのは東への拡大で、土手状に旧壁を残し、その外側を一度掘り凹めてからまたうめている。柱穴は8こあるが、東の土手と西壁にある四主柱である。貯蔵穴はカマド北側にある。下部のは南隅にある。北壁中央部に階段状の段が見られる。

カマドは西壁中央部にあって、ほとんどこわされて掘りこみと焼土で存在をしる。この部に焼石がいくつか点在しているのを見ると石組粘土カマドと思う。

遺物は多くないが、土師器坏のしめる割合が大きく、それがいずれも器形のわかるものである。また第42図1は東土手の北側柱穴から、2はカマド北の柱穴の中から出土し、柱穴から柱をぬいたあと、埋まる途中におちこんだものと思われる。白瓷、土師器とあって、白瓷は椀と皿で、皿は完形である。土師器は坏と甕で、坏（2～6）は全部内黒研磨で糸切底のものである。3～6の土師器は張り床下部から出土している



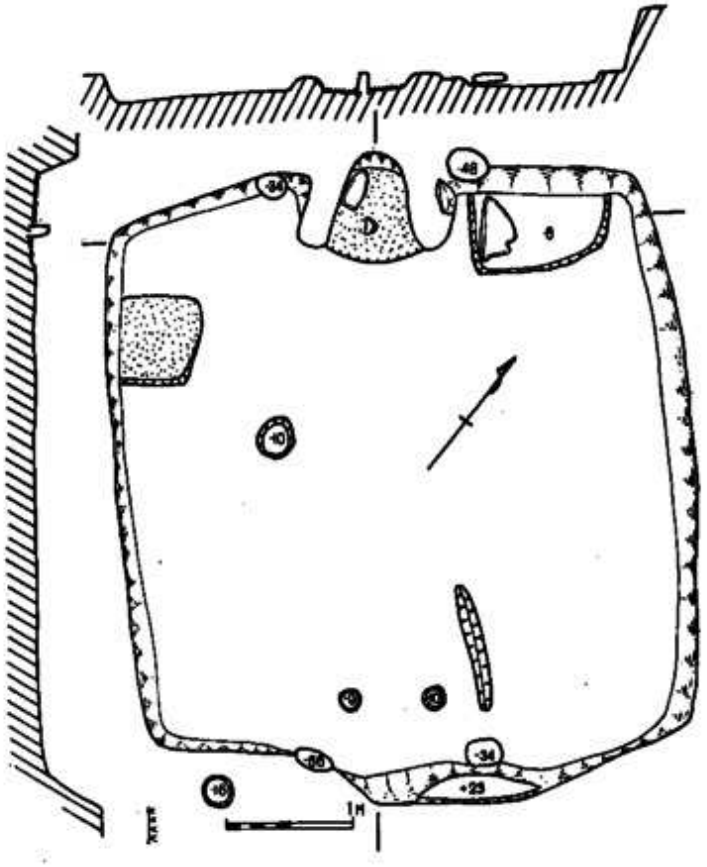
第41図　14号住居址実測図

16. 15号住居址

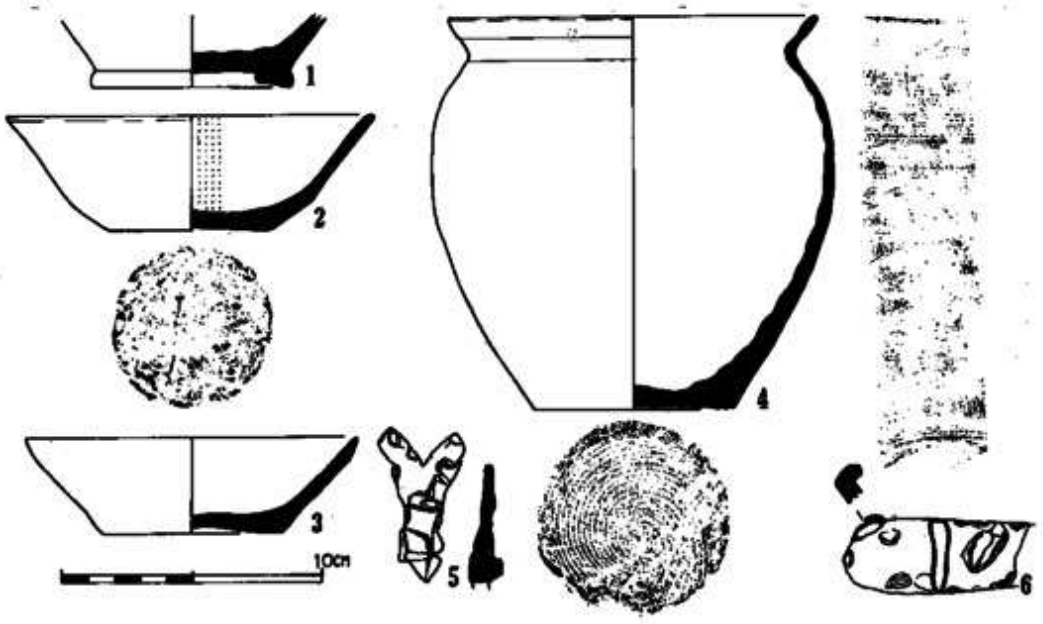
隅丸方形で、東壁3.90m、北壁4.15mの大きさである。主軸方向N43°Wとなる。礫まじりの土層をほりこんでいる。床面は中央部がかたい。壁のほりこみは割と深く、東隅で50cm、西隅で25cmとなっている。柱穴は8こあって、東・西壁の4本が主柱で、東壁の入口部には壁が階段状にほりこまれ、床面には2本の支柱穴と、間仕切溝と思われる浅い溝が1mの長さにある。貯蔵穴はカマド北側にある。また南壁に接しても方形の浅いほりこみがあり、そこには焼土が見られた。

カマドは西壁の中央部にあって、粘土の両袖がのこり、石壁などの石組はこわされて、いくつかの石が散在している。火床には支脚石が立っていた。

遺物は白瓷、須恵器、土師器、鉄器とあるが、量的には少ない。白瓷は皿、瓶（第44図1）の破片で、椀片がないのが注目される。須恵器は杯、瓶、甕がある。土師器は坏、甕で、坏は内面黒色研磨（2）とそうでないもの（3）とがあり、前者が多い。甕（4）は口縁から底部までの大破片で、カマド南袖先端近くにつぶれたようにあった。口縁が開き、胴上半で張る小形のもので、ロクロ整形、糸切底である。内面にはラセン状に凹線が見られ、外面には横走する櫛状器具の条線が全面につく。鉄器は北隅の貯蔵穴近くの床面にあって、鉄鏃（5）と鎌（6）で、いずれも破片である。



第43図　15号住居址実測図



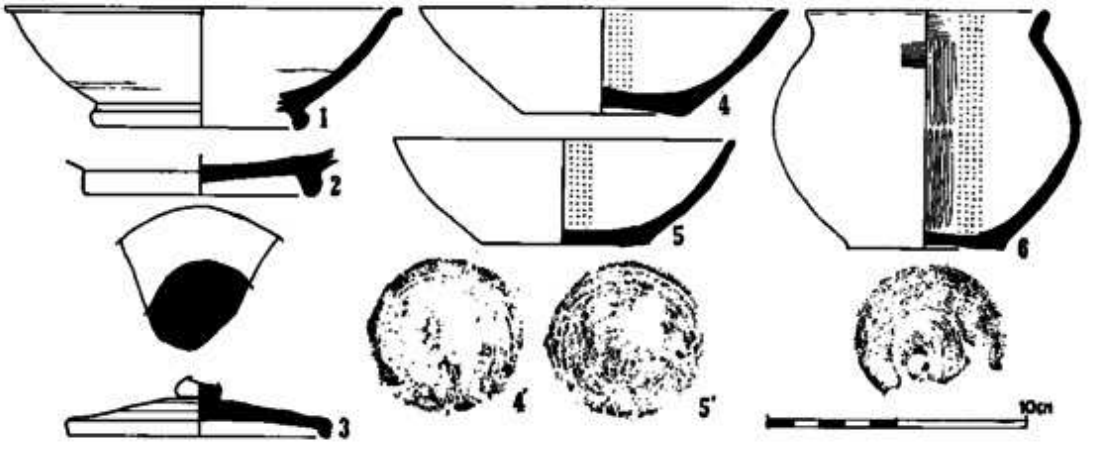
第44図　15号住居址出土土器実測図

17.　16号住居址

隅丸方形で、東壁3.64ｍ、北壁3.85ｍの大きさである。主軸方向はS50°Eとなる。住居址の西四分の一を12号住居址によって30ｍも深く掘りとられている。床面はかたく良好である。柱穴は３こあるが不規則である。貯蔵穴は東隅と北隅の２か所にある。

カマドは東壁の中央よりやや北によってあり、石組粘土カマドである。南側の粘土袖はよく残っているが、北側にはあまりよく残っておらず、壁際には、壁よりも高い石が直立していたのが注目される。火床は焼けているが、支脚石はない。

出土遺物は多い方ではない。白瓷、須恵器、土師器が出土している。白瓷は椀（第45図１・２）、皿、瓶で、椀の底裏に円形の墨痕のつくものがある（２）。須恵器は蓋（３）で、宝珠形つまみはあまり尖らない。そのまわりをヘラでけずって整形している。土師器は杯、小形壺、甕がある。杯（４・５）は内面黒色研磨され糸切底のものである。小形壺（６）は口縁がみじかくおれて開き、胴中央で張る球形をしている。器面は細かい櫛状器具で横ナデ整形している。内面は口縁部は外面と同じ器具で横ナデし、胴部は棒状器具でナデおろし、黒色研磨となっている。甕は小破片である。



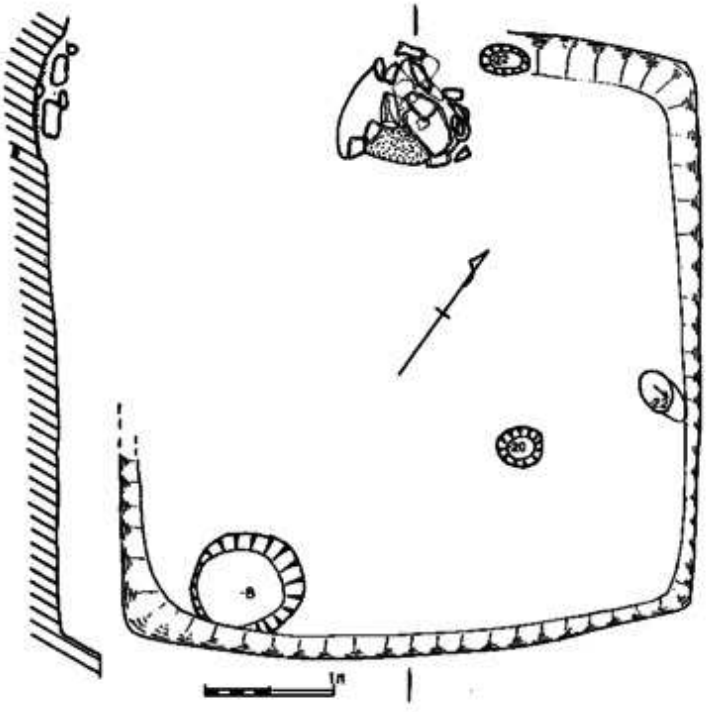
第45図　16号住居址出土土器実測図

18. 17号住居址

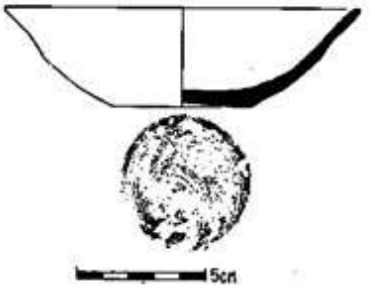
角のある方形で、東壁3.90m、北壁3.90mの大きさである。主軸方向N38°Wとなる。西隅が学校建築によって一部切り取られ、さらに床面には電柱のひかえ線がうめこまれていた。床面の状態はあまりよくなかった。柱穴は3こあるが、カマド北側のと床の中にあるのが主柱で、四主柱と考えられる。北壁よりの柱穴は西から東へと傾斜してほりこまれている。

カマドは西壁中央にあって、石壁粘土カマドで天井石がおちこむが、他の住居址に較べて保存がよい。両壁の外側を粘土でおさえ、たき口の天井は石で、煙道部は石の上を粘土でおおっている。火床には支脚石が立っていた。

遺物は土師器のみで、坏と甕があり、器形のわかるのは坏（第47図）1このみである。



第46図　17号住居址実測図



第47図　17号住居址出土土器実測図

19. その他の遺構

校庭用地内の調査で、柱穴列とV字溝が検出されている。

柱穴列、1号住居址の南西5mの所に一列の柱穴列を検出している(第5図)。ほぼ直列に4こ並び、北からイ・ロ・ハ・ニとする。イは直径25cm、深さ20cm、ロはイと70cmはなれ、直径24cm、深さ20cm、ハはロから90cmはなれ、直径24cm、深さ20cm、ニはハから220cmはなれ、他とはなれ方がちがう。直径26cm、深さ20cmある。この柱穴列の東西にも広げて柱穴の存在を追求するがなかった。N12°Eをとっている。

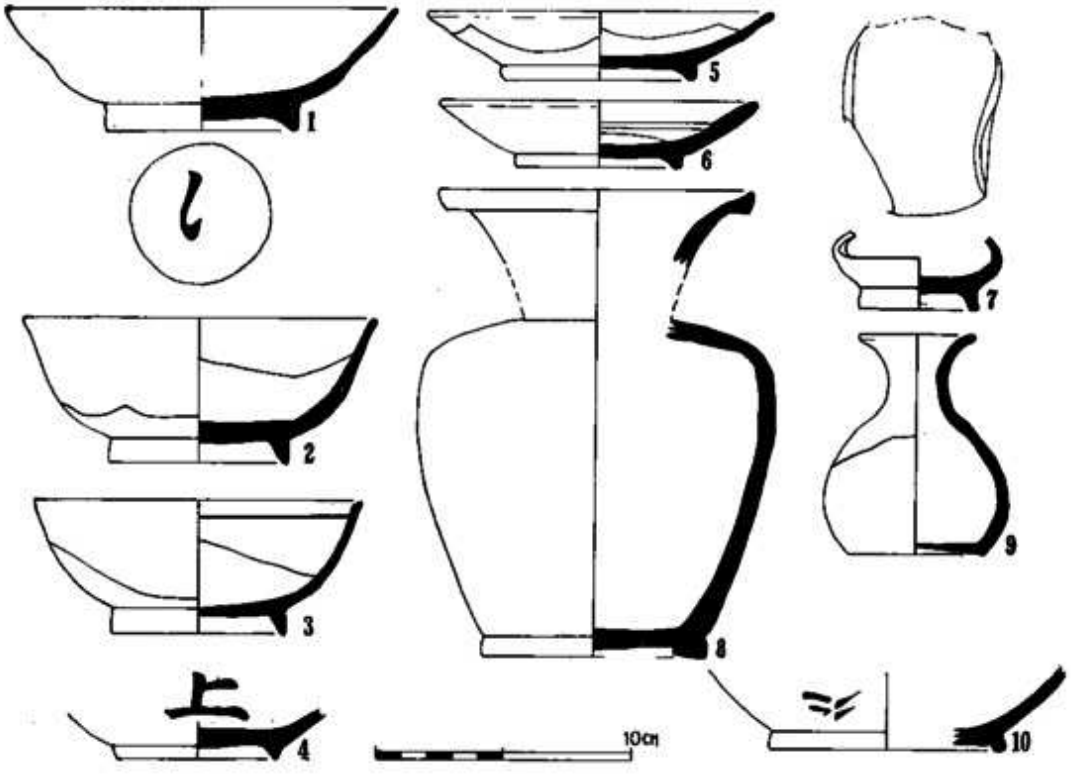
溝はV字溝で、校庭用地内で3か所確認された(第4図)。今回の遺跡範囲確認調査で、No.5点で溝を確認している。いずれも追跡調査はしていない。

溝1は3号住居址と5号住居址の間にあって、5号住居址によってある(第6図)。S字状にまがって4号住居址と5号住居址の間を通り西へ走っているようである。東から西へ深くなっている。

溝2は6号住居址の北東にあって、相当に深かった。溝1と通ずるかも知れないが、はなれているためきめられない。西へと走っている。

溝3は村道の水道工事溝で確認され、北東へと走っていた。溝1・2の流れから分流してきたのかも知れない。

溝4は試掘No.5地点で検出され、北東へと走っていて、溝3とつながるように思われる。



第48図　遺構外出土土器実測図

Ⅳ　遺跡の広がりについて

1.　地点の設定

お玉の森遺跡は表面採集もよく行なわれており、学校の北側と東側に遺物が分布していることは知られていた。また工事などで遺構が検出され、その都度発掘調査され、遺跡の中心はつかんでいる。この結果から、試掘地点は国道より西側におき、尻平沢にそって１・３・４・５・６を、国道にそって１・２・15・16・17・18を、段丘縁にそって６・７・８・９・10を、学校の南側に10・11・12・13・14・17を、さらに上村部落北側の水田に牧舎工事があったので、19・20を設定した（第１図）。

耕地の耕作物の都合もあって、一列というわけにはいかなかったが、２ｍ×２ｍの大きさにほりさげた。

2.　地　　層（第49図）

１・３～６は尻平沢にそって縁端までをさぐった。１は水田、耕作土の下に床土があってすぐロームとなっている。包含層である黒土はない。３は耕作土・褐色土・ロームとなっていて、褐色土層はうすい。４は水田で耕作土そしてロームとなっている。５は耕作土の下に黒土の厚い所があり、そこを見ると、北へと走るＶ字溝となった。６は耕作土の下の黒土が厚く、褐色土・ロームとなっていた。

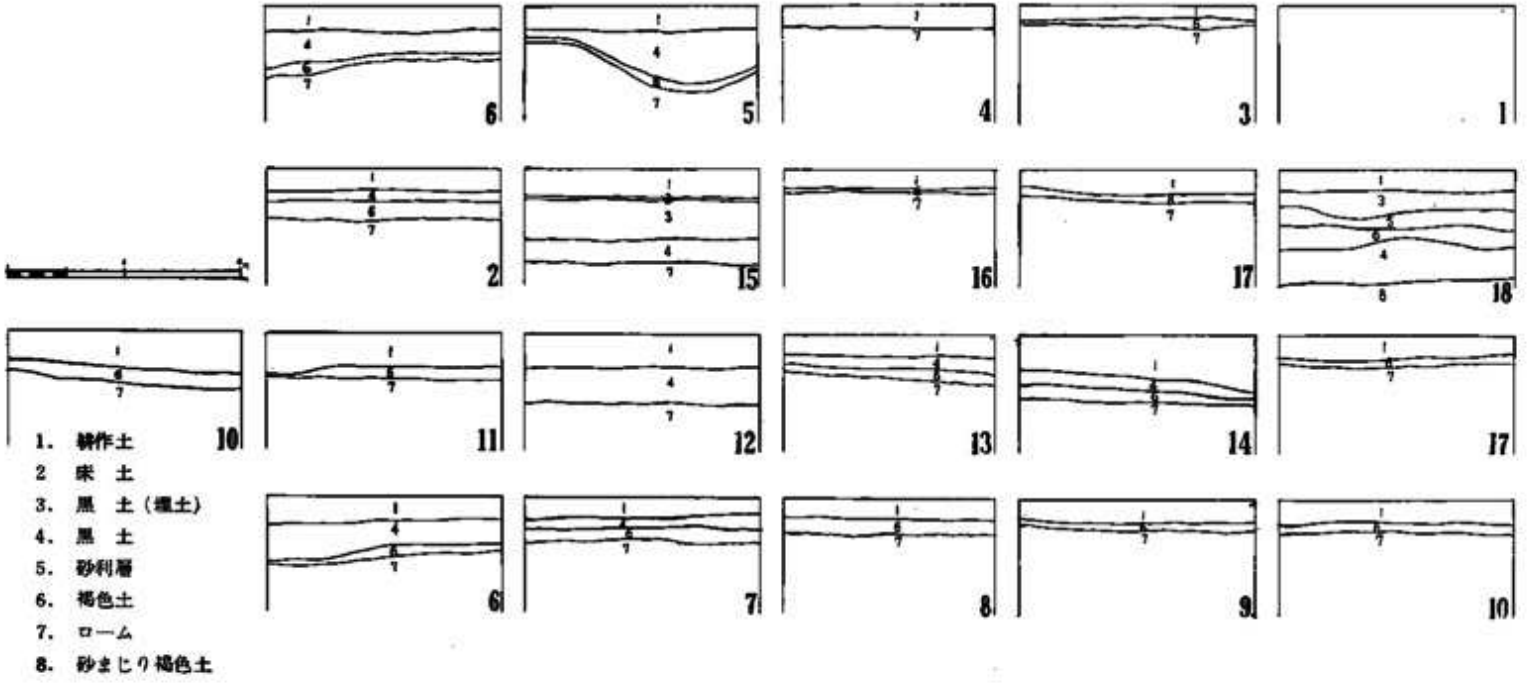
２・15～18は国道にそって、扇縁へとさぐった。２は耕土・黒土・褐色土・ロームとなっている。15は水田で耕作土の下に床土があって、その下にじぎょうで埋めた黒土があり、そして黒土・ロームとなっていた。16は耕作土・うすい褐色土層でロームとなっている。17も同じで、褐色土には砂がまじっている。18は扇縁につづく凹地で、耕作土・黒土・砂利層・褐色土・黒土・砂利まじり褐色土となって、変化がはげしい。

10～14・17は扇縁を東西にさぐった。17は耕作土、うすい褐色土・ロームとなっている。14は耕作土、黒色土・褐色土となっている。13も14と同様である。12は耕作土で黒土・ロームとなるが、黒土は厚い。褐色土はない。11は耕作土・褐色土・ロームとなる。10も11と同様である。

６～10は台地縁端を北から南へさぐった。６は耕作土・厚い黒土・うすい褐色土・ロームとなる。７は耕作土・黒土・褐色土・ロームとなる。８は耕作土・褐色土・ロームで、９・10も同様である。

2.　遺跡の広がり

包含層である黒土を見ると、２・５～７・12～15とあって、地形から見ると扇状地の扇頂から尻平沢にそって台地縁端までと、小・中学校の西側と東側にあって、第１図の①・６・12を結ぶ三角形が遺跡の範囲である。今までの調査から扇頂部に縄文時代の集落があり、早期押型文土器、中期勝坂式・加曽利Ｅ式土器、後期堀之内式土器が検出される。中央から扇端は平安時代の集落となっている。



第49図 試掘各地点の地層図

V　調査の結果から

1.　住居址から

昭和39年、校庭用地内の調査をした時、当時としては木曽谷では最高の検出数であり、県的に見ても平出遺跡につぐ数であった。そのため随分と意気ごんで資料を集め、原稿も何回かかいたりしたものでした。しかし完成しないまま今になっている。再度調査して資料もふえてくると、かえって取り組むのがこわくなってくる。調査を終えて、資料を見ていると、あれこれと考えられるが、いざ筆となると進まない。十分な検討ではないが、お玉の森遺跡の調査から考えたことをふれて見たい。

住居の廃絶　17軒の住居址を調査して、この住居の廃絶が自然埋没ではないように思った。

1号住居址　カマドがくずされ、住居内には礫がうまっていた。

2号住居址　カマドは石組がくずれておちこんでいた。煙道部の石は取りはずされている。

3号住居址　カマドの天井石はくずれ、床面中央部まで広がっていた。

4号住居址　カマドの天井石ははずされ、住居内に礫が多かった。

5号住居址　カマドの天井石ははずされ、住居内床面に散在していた。

6号住居址　カマド天井石ははずされてなかった。住居は火事で焼けており、建築材が炭化してあった。この焼けた上面に焼土塊があり、火災を消すために土をかぶせたように思われる。

7号住居址　カマドのたき口が土圧でくずれていただけで、カマドの石組は17号住居址とともに保存がよかった。住居内には人頭大以上の礫がいくつも入っていた。またカマド北側の柱穴には礫が入りこみ、これは柱をぬいた後、おちこんだものである。

8号住居址　カマドは両壁の石を残すのみで、天井石ははずされ、床面中央部にかけて散在していた。

9号住居址　カマドはくずれて、たき口部床面に集積していた。また、白瓷は当遺跡では最も多く出土したが、すべて破損品で、中にはわざとこわしたものもあって、この住居址が集落のゴミ捨場であったとも考えられる。

10号住居址　カマドは完全にこわし、わずかに火床部が焼けていてカマドの位置がわかる。カマドに使用した石は床面に集積してあった。また床面には全体に礫が多かった。

11号住居址　カマドは10号住居址以上にこわしていて、カマドの掘りこみと焼土でその場所を知る。住居内には礫がつめこまれており、東壁よりではその礫上面から壁外にかけて焼土が見られ、埋めた後火をたいたものと思う。

12号住居址　カマドはたき口の部分がこわされていた。住居南隅には建築材を集めて焼いたのか、床面から壁土面までの厚さに焼土や木炭が見られた。

13号住居址　カマドはわずかに粘土が残るのみにこわされ、石もほとんど残っていない。

14号作居址　カマドはほとんどこわされて、わずかに両袖部が残り、石組の石もいくつか床面に散在し

第1表　住居址一覧表

住居番号	プラン	主軸方向	大きさ m					壁高 cm		カマド			周溝	柱穴		貯蔵穴	その他
			東壁	西壁	北壁	南壁	面積(約)	東壁	西壁	位置	構造	残存		主柱	支柱		
1	隅丸不整方形	N45°W	4.10	4.00	4.20	3.70	16.1	40	25	北隅	石組粘土カマド	両袖と煙道部を残す	無	1		2	鍛冶場の炉(?) 石でうめる
2	隅丸方形	N51°W	3.45	3.50	3.50	3.52	12.2	32	30	西壁中央	〃	両袖を残すのみ	〃	3	1	1	北東床にほりこみあり
3	隅丸長方形	S41°E.	4.60	4.80	5.55	5.85	26.7	37	17	東壁中央	〃	〃	〃	4	10	4	西壁よりに焼土あり 間仕切溝
4	隅丸方形	N65°W	2.80	2.70	2.80	2.70	7.5	35	23	西壁中央	〃	〃	〃	3			東壁にほりこみあり
5	〃	N42°W	2.95	2.95	2.80	2.90	8.4	27	25	〃	〃	〃	有	2	1	2	
6	隅丸長方形	N59°W	3.35	3.35	4.40	4.35	14.7	20	16	〃	〃	〃	無	4	5	4	火事にあう 炭化種子あり
7	〃	N42°W	3.80	4.10	4.30	4.00	16.2	23	20	〃	〃	略完存	〃	4	2	4	
8	隅丸方形	N71°W	3.65	3.60	3.63	3.68	14.4	25	5	〃	〃	両袖をわずかに残す	〃	4	7	2	中央に円形凹みあり
9	〃	N44°W	5.04	5.15	5.80	5.33	31.5	22	21	〃	〃	〃	〃	4	14	1	東壁よりに焼土あり 墓拡状のほりこみあり
10	隅丸不整形	N70°W			6.00		(30㎡上)	24	18	〃	?	焼土部のみ	〃	4	12		北隅に張り出しあり 南壁は用地外
11	隅丸方形	N53°W	5.10	4.80	5.50	5.12	28.4	26	10	〃	?	焼土と掘りこみのみ	〃	5	6	2	東隅に焼土あり 石でうめる
12	〃	N47°W	5.35	5.60	5.63	5.91	35.1	29	29	〃	石組粘土カマド	略完存	〃	8	4	2	南隅を焼土、灰がうめる 16住をきっている
13	〃	N49°W	4.76	4.75	4.50	4.90	24.7	28	8	〃	粘土カマド(?)	両袖がわずかに残る	有	3	4	2	北隅に焼土あり
14	隅丸不整長方形	N50°W	2.70	3.33	5.00 (3.90)	4.40 (3.20)	17.4 (12.7)	37	12	〃	石組粘土カマド	両袖をわずかに残す	無	4	4	1	張り床あり 東に拡張する
15	隅丸方形	N43°W	3.90	3.95	4.15	3.90	18.8	48	24	〃	粘土カマド(?)	両袖のみ残す	〃	4	4	2	入口部に階段あり 間仕切溝あり
16	〃	S50°E	3.64		3.85		15.6	20	22	東壁中央	石組粘土カマド	〃	〃		3	2	12住にきられる
17	〃	N38°W	3.90		3.90		18.0	28	28	西壁中央	〃	略完在	〃	2	1	1	西隅は校地できりとられる

ていた。柱穴内の途中から土師器坏と白瓷皿をだした柱穴が2こあった。柱をぬいたあとおちこんだのか、供儀のためかは不明である。

15号住居址　カマドの石はほとんどとりはずして、いくつかの石が残っていた。

16号住居址　12号住居址に切りとられる。カマドは天井石ははずされて両壁の石が残る。

17号住居址　カマドの天井石は土圧でつぶれおちていたが、保存はよい。

このあり方をカマドの残存状況から見ると

A　カマドの保存がよいもの。2・7・17号住居址。

B　カマドの石はくずされ、両壁の石だけが残るもの。3・5・6・8・9・15・16号住居址。

B′　Bであるが、住居内に礫を集めているもの。1・4・12号住居址。

C　カマドを完全にこわし、わずかに火床の痕跡が残るもの。13・14号住居址。

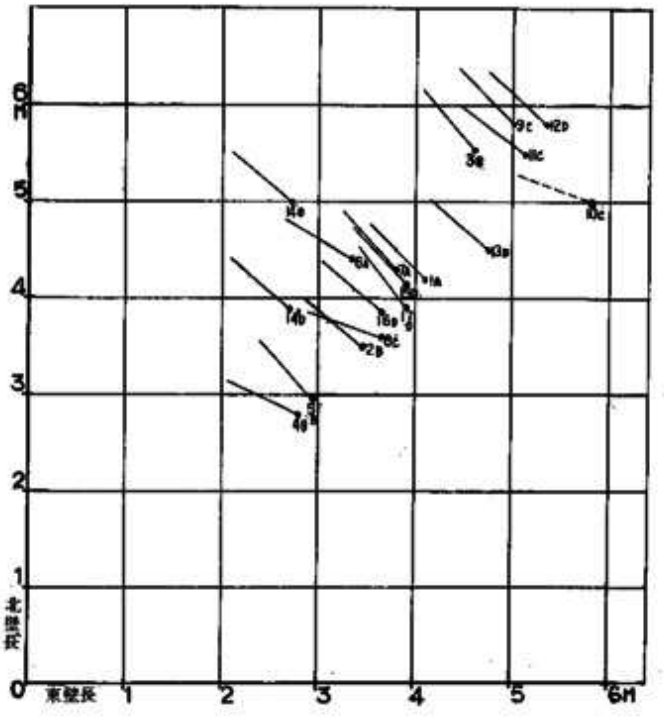
C′　Cで、住居内に礫を集めているもの。10・11号住居址。

と、大きく3分類できる。B　Cの中に火をつけてもやしたと考えられるもの、6・11・12号住居址があり、A以外は残存の状況が異常であり、人為を感じさせる。集落は全てが同時期ではないが、廃絶時にわざとこわしているといえる。後に継続する住居址がないということは、この集落は何らかの理由があって廃絶し、移住したものである。

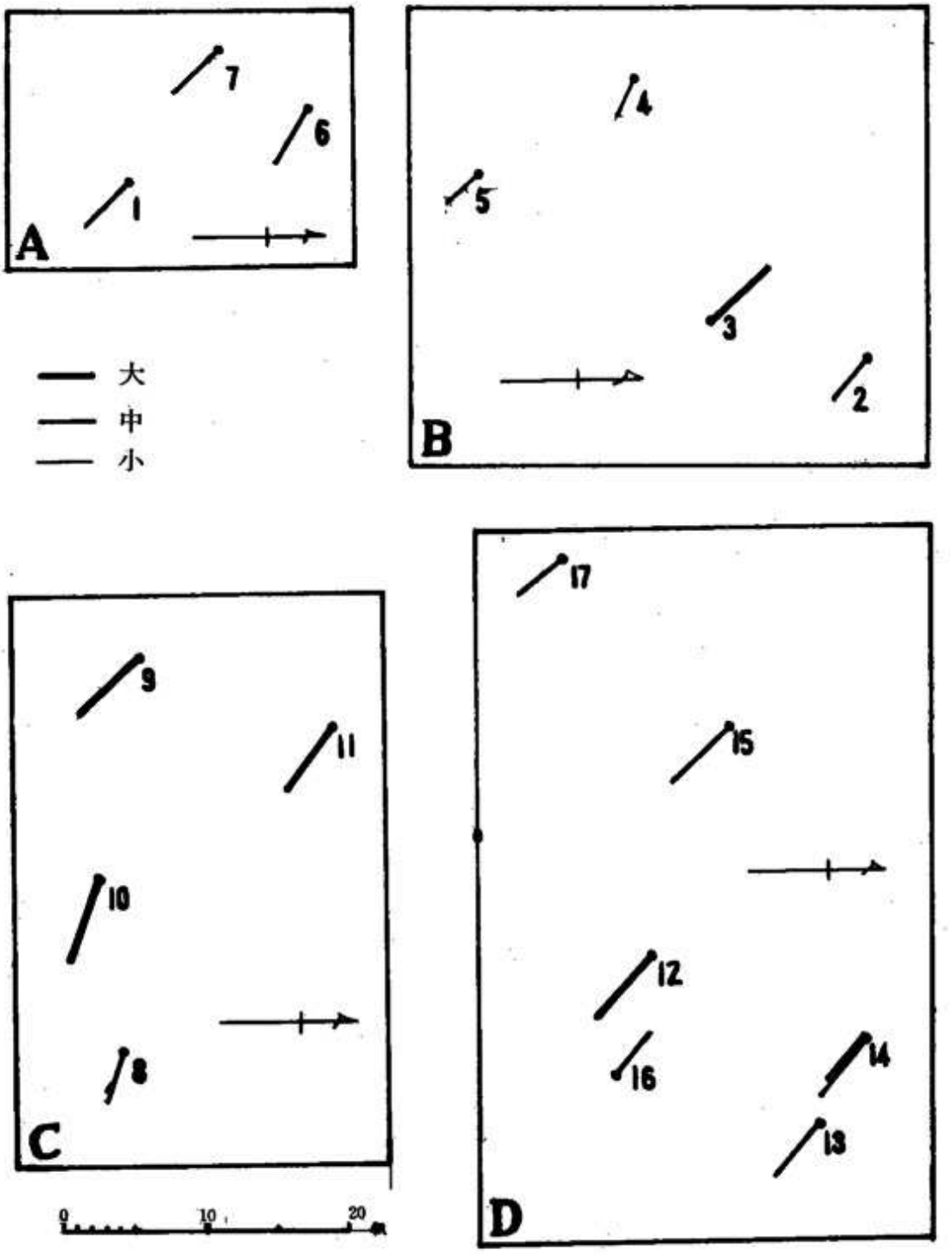
住居群　調査した用地内で17軒の住居址を検出した。これ以外にも住居が存在したことは校庭の地ならし、水道工事で検出していることから知る。表採から見ても集落が広がっていることを知る。

住居址の分布を見ると、集中してあるのではなく、いくつかの住居址で群をつくり、間をおいて散在していることがわかる。大きくA～Dの四群にわけれる。今回の調査で、12号住居址が16号住居址を切っていること、13・14号住居址が近接してあり、14号住居址は拡大建替をしていることから、D群では2時期あることがわかった。他ではそのような例はなかったが、C群では主軸がちがうグループかあるので、群が細分されるのか、建替をしているのかどちらかと思う。

住居址の大きさを東壁と北壁の長さの相関図にして、それに主軸方向を入れたのが第50図である。これを見ると面積的



第50図　住居址の大きさと主軸方向（上が北）



第51図　各群における住居址の位置、大きさ、主軸方向

（●はカマドを示す）

に見ると大・中・小の三群にわけれる。大は3・9・11・12号住居址で、10・13号住居址もこちらに近い。住居址群で見ると、A群になく、B1、C3、D2となる。中は1・2・6・7・8・14・14′・15・16・17号住居址が入り最も多い。各群に見られる。小は4・5号住居址2軒で、今回の調査ではこの大きさのものが検出されなかった。

これらの住居址を各群別に見ると（第51図）

A群　1・6・7号住居址とも中に入るもので、大がない。6号住居址の主軸がわずかに東にふれている。7号住居址の並び方から見て、同一群と考えられる。6号住居址が火災にあい、7号住居址のカマドの保存がよいことから、あるいは6号住居の人が7号住居を建設したものかも知れない。大がないということは、調査が充分にできなかった周辺に存在したとも考えられる。

B群　3号住居址が大で、2号住居址が中、4号住居址が小である。5号住居址も小で、主軸方向が、2・3号住居址と近いが、3・4号住居址との間にV字溝があって、群としては区別されるのではないかと思う。このB群とC群との間の校庭カッティング斜面に住居址が確認されているので、それと結びつく可能性が強い。

C群　9・10・11号住居址の3軒が大で、8号住居址が中である。8・10号住居址の主軸方向が一致し隣接しているので、同一群となる。9・11号住居址は主軸方向がわずかにずれており、群を異にするものと思う。いずれも西側に中・小の住居址があったものと思う。

D群　12～17号住居址の6軒あって、12～16号が近接しあっている。先にもふれたがこの群は2時期になって、13・14′（下部）、16号住居址の3軒が古いのではないかと考える。この場合、13号住居址が大で14′・16号住居址が中である。12・14・15号住居址が新しい群で、12号住居址が大で、14・15号住居址が中である。17号住居址は中であり、石組カマドの保存もよかった。12号住居址の群と主軸方向がほぼ一致するが、距離的に離れすぎるように思う。B群との関係も考えられるので、一応別群と思われる。

当遺跡の住居址の大きさと分布から見ると、A群は1つの群でよく、B群は溝によって二つの群に、C群は大形住居址を中心に三つの群に、D群では時期を異にする二つの群ともう一つの群が考えられ、計九群が最大限に考えられ、時間差を考えると、同一時期の群はもっと少ないものと思う。一つの群は大・中それに小の住居が集まって構成されていたようである。この2～3軒の住居の群が当時の家族構成を示し、その家族がいくつか散在して集落を構成していたものと思う。

2.　出土遺物から

17軒の住居址から出土した遺物は第2表のとおりで、土器類、鉄器、その他にわけれる。その絶対量は多くなく、完形品が少ないのが注意される。

住居別の出土　各住居址からの出土種類・量は第2表のとおりである。4号住居址からは全く遺物が出土していない。他は数や種のちがいがあるが出土している。遺物の中では土器類が圧倒的に多く、中でも白瓷のしめる割合が大きい。土師器、須恵器、緑釉陶器の順となっている。白瓷は量的に多いが、6号住居址からは小破片が、17号住居址からは全く出土していない。5・14・15号住居址も量的には少ない。量

種	白磁					須恵器				土師器			緑釉	白磁		土師器	鉄器	その他
器種	椀	皿	瓶	壺	鉢	坏	蓋	壺	甕	坏	皿	壺	椀か皿	椀	皿	坏	紡錘車 釣針 刀子 鉄鏃 ヤ針 かご 石製品	砥石 ふい 熔解物 なべ
住居番号 ＼ 部位	図 口縁部 底部	図 口縁部 底部	口縁部 底部 胴部	口縁部 底部 胴部	口縁	口縁部 底部		口縁部 底部 胴部	口縁部 底部 胴部	図 口縁部 底部		図 口縁部 底部 胴部		輪花 墨書	輪花 皿 段皿 皿 皿 墨書	内面 黒色		
1 中	3 1	3			1					1 1		1		1		1		2 2 2 1
2 中	3 24	2 2	1						1	2 1		2		1				2
3 大	3 16 6	1 5	2 2 (4)					1		2		2 3	1	①	1	2		1 1
4 小																		
5 小	4 3	3	(1)							3 4 1		3 5 1				1 1		2
6 中										1 3 2	1	1 (椀1)				3	1 1 1 2 1 1	
7 中	2 3 1	1	1	1						1 1		1 1				1		
8 中	22 15		7			1		1 (2)	4	6 2		1		3 ②		3 1		磨石 1 1
9 大	12 105 104	11 99 7	12 6			1			1 1 12	3		2 2	1	6 9 ⑩	3 2 2	2	1	
10 大	7 49 31	3 6	1 2 (4)					3	3	2 4		2		1 1	1 1	3	2	
11 大	6 51 34	3 32	1 2					1	1 6			1 5	1	1 3	1 5 1			4
12 大	2 43 8	1 6 1	1	1		椀		1	2	3 6 5					2	3 1	1 3	磨石 1
13 大	6 4	1	6					1	1	1 1 4				1		2		1 1 2
14 中	2	1 1								5 13		1				13		
15 中		2	1			2 1		1	1	2 9 2		1 1 1				7	1 1	
16 中	1 9 4	3	1 2				1			2 4 1		1 1				4		
17 中										1 7		2				3		

第2表　住居別・遺物別の出土数一覧表

的に多いのは3・9・10・11・12号住居址で、いずれも大形の住居址である。土師器は全く遺物のなかった4号住居址以外からは全ての住居址から出土している。坏が多く、ついで甕となり、皿は6号住居址から1こ出土し、この住居址では鉄鉢形椀も1こ出土している。緑釉陶器はわずかに3片の小破片が出土している。3・9・11号住居址である。これら大形住居址は緑釉陶器以外にも白瓷の輪花椀・墨書椀・輪花皿・段皿・稜皿・耳皿・墨書皿も出土していて、中・小形の住居址とは遺物面でも異なっていて、群の核的な存在度を強めている。須恵器は量的にも少なく、校庭用地内では2・3号住居址しか出土せず、体育館用地では8～13、15・16号住居址と、多くの住居址から出土し、群によって所有がちがっていたのだろうかと思う。器種は水甕が多く、壺・坏となり、1例だが蓋が出土している。遺物の中では最も多い土器類であるが、出土時に完形品だったのは、白瓷で椀1（1住）、皿6（1・3・10・14住）、土師器で椀1（6住）の8個体しかなく、非常に少ない。このことは住居址の廃絶でもふれたように、当遺跡では建物をこわしてから移住しており、そのおり、完形品は搬出したものと思う。不要品は9号住居址で特に目についたが、こわしてすてていったのだと思う。土器類については改めて検討したい。

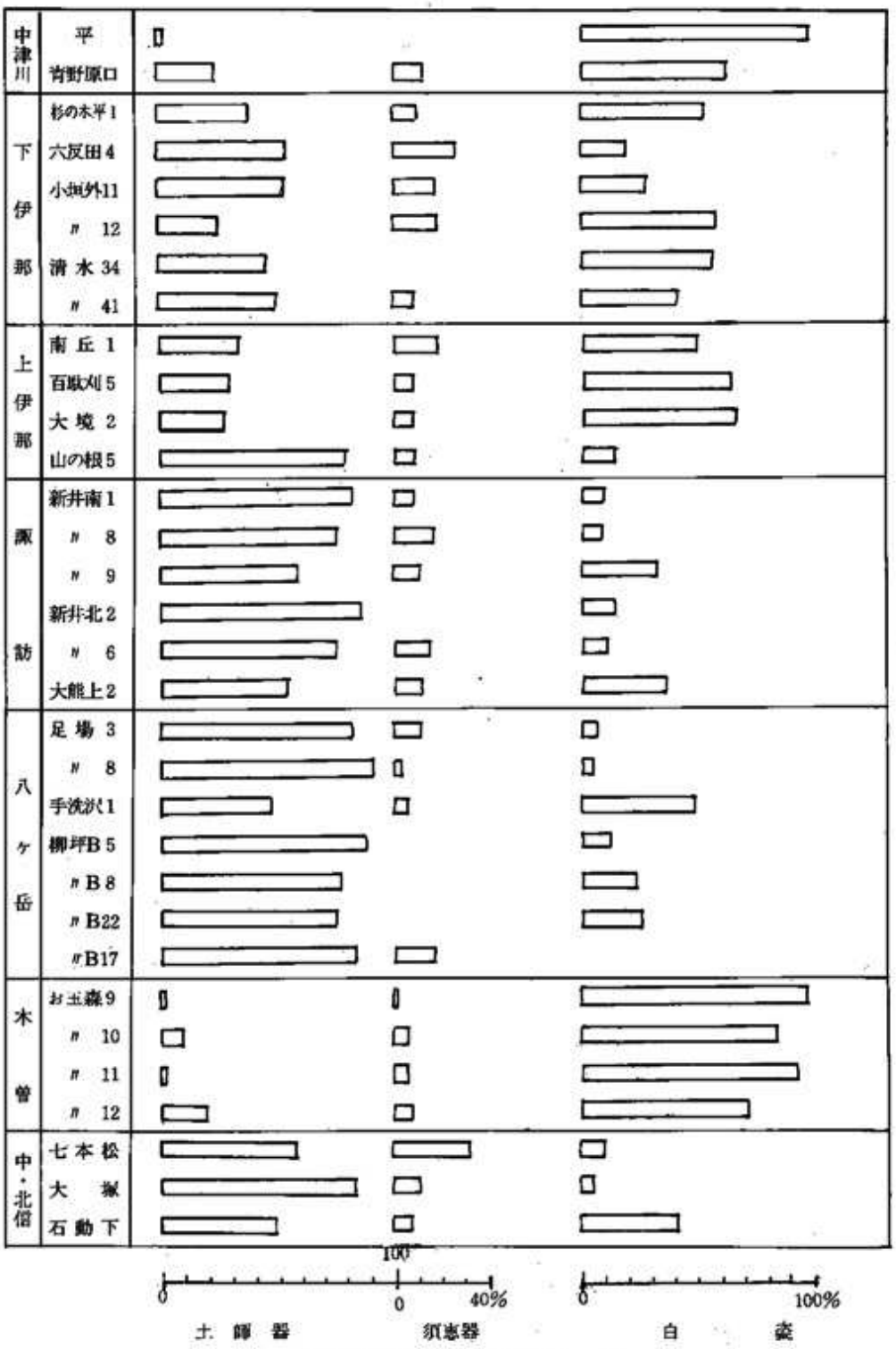
鉄器　出土したのは6・9・10・12・15号住居址の5軒と少なく、6号住居址が量的に多く、種類も多く、そして完形品である。これは火災にあったことと関係し、生活時に火災がおきたことを示すものと考える。他はいずれも破片である。種類を見ると、狩漁具に鏃（15住）と釣針（6住）がある。鏃はカリマタの刃部で、武具である可能性が強い。釣針は2例あって、完形品のそれは針金状のを3本合わせてつくっている大きなもので、大形の魚（ウナギ・マス類）を木曽川でとったものと思う。農具は鎌は6・9・15号住居址とあって、鉄器の種別では多い。それだけ日常性があったものと思う。6住のが大形で完形品である。9・10住のは小形で、9住のは手鎌とも考えられる。6号住居址の炭化種子（米、小豆）と結びついて、木曽川沿いの沖積地における水田と、遺跡のある河岸段丘上の畑とが農耕の姿として考えられる。利器として刀子（6・12住）がある。木工具や日常の必要に応じて使っていたものと思う。10・12号住居址から出土しているなかご片には、鏃・ヤリカンナ・紡錘車と考えられるが、木工具としてのヤリカンナの存在を考えたい。日常具として、紡錘車（6住）と針（6住）がある。紡錘車はおれているが完形品で先端部が糸を引っかけるようにわずかにまがっている。針は頭部の孔の部分がおれている。糸をつむぎ、ぬい物をしていたことがわかる。紡錘車をつかってつむぐ材料はなんだったのだろうか。特殊なものとしてヤ（剪）（6住）がある。これは石工が石を割るときに使うもので、当然これとともに鉄槌とノミがなくてはならない。石を割って加工したことを示すのだが、その石をどこで、何のために使用したのだろうか、水田地帯の川や用水路に使ったのだろうか。

その他の遺物　ここにはかなくそ、熔解物、ふいご、砥石が入る。これらの中で前三者が関係しあうもので注意される。かなくそは1・2・3・11・13号住居址で検出され、1号住居址がとくに多く、22個あり、11号住居址で4個、他は1個ずつである。1号住居址ではかなくそが住居址中に集中して出土し、その近くに火床とふいごが出土し、そこがかじ場であったと思われる。11号住居址でも火床が見られる。これらのかなくそを見ると、断面が浅い半球状をしていて、表面はとけた鉄が自然に固まった状況をしめし球面には石が附着している。これから考えるとカジ場での鉄くずではなく、鉄をとかした時に出来たもので、これがこの地で作られたのでなく、鉄をつくりだしたところから持ち運ばれてきたものと思う。そうだとすると、これが鉄器への原材料になったのだろうか。最近、かなくその研究が進んでいるので、専門

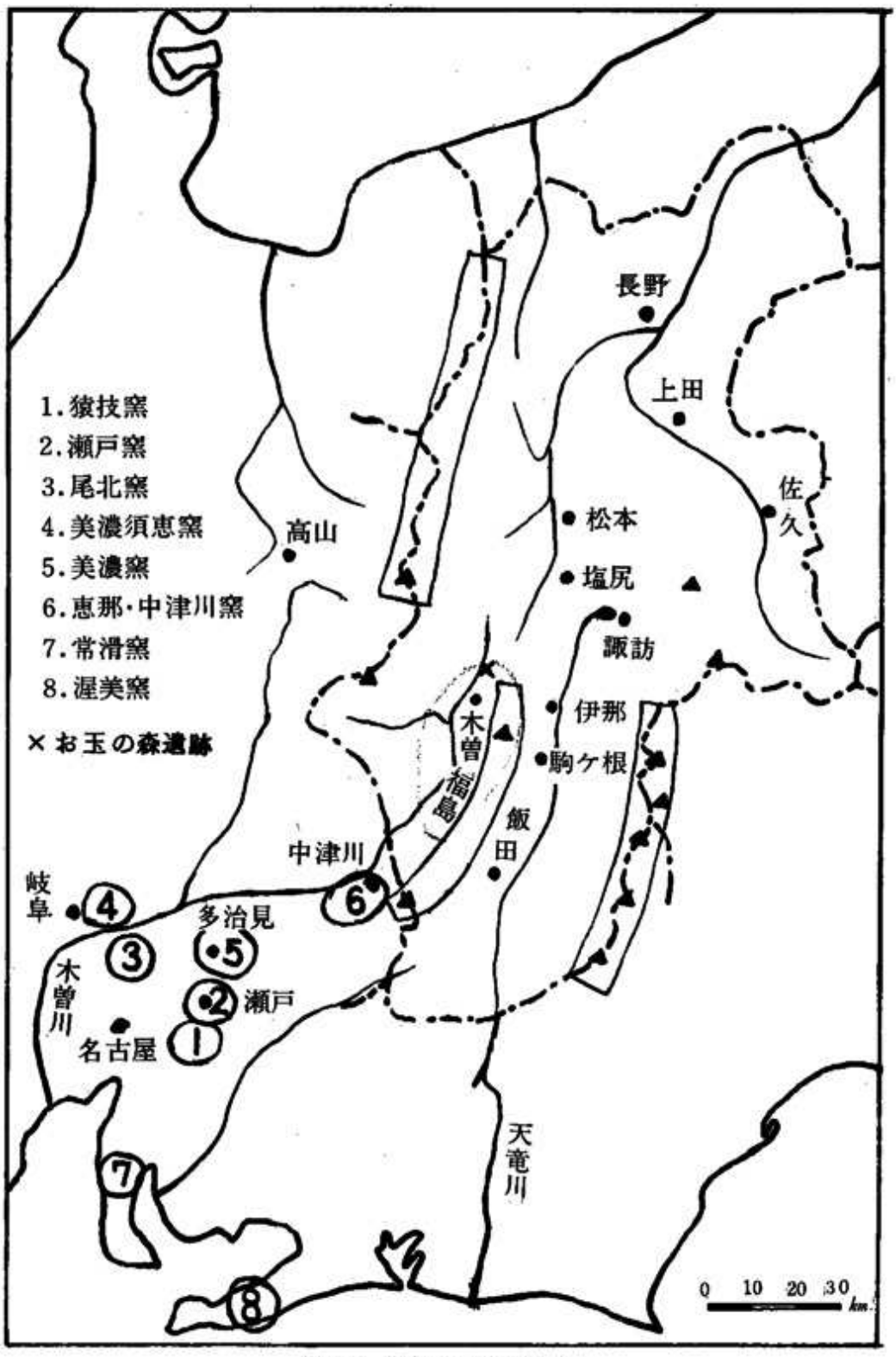
研究者に分析してもらえたらなと思う。13号住居址ではカマド内からフイゴの先端部が出土している。カマドを利用していたのだろうか。砥石には使用の激しいものと、ほとんど使用していないものとがあり、石質によって、目の細かい仕上げ砥、目の荒い荒砥がある。鉄器をといだものである。また2例だけ特殊磨石が出土していて、8号住居址ではカマド内、12号住居址では床面からあった。縄文時代のものを転用したものと考えるが、木の実（栃など）を敲くのにも使用した可能性もある。6号住居址からは米と小豆の炭化種子が出土している。農耕――水田と畑作の存在を実証するものである。

白瓷・須恵器・土師器　住居址によってその量に違いがあるが、当遺跡の土器類では圧倒的に白瓷が多いのが注意された。かって、中央道関係で下伊那地方で調査した同時代の住居址とちがうので、地域や道筋によって違いがあるのだろうかと、手元にすぐ見れる報告書で調べて見た。長野県下の白瓷は一部に猿投窯や美濃須恵窯が入っているが、大半が東濃窯である。それらは東山道と吉蘇路を通って入ってきている（第53図）。東山道は中津川市から神坂峠をこえて飯田・下伊那地方におりて、天竜川を北上して上伊那、そして諏訪に入り、さらに峠をこえて佐久、そして北関東へのびている。諏訪から東へわかれて、八ヶ岳の南麓を通って山梨にもいっている。吉蘇路は中津川市で東山道とわかれて、木曽川に沿って北上し松本平に出て北信・東信へとのびている。東山道にそって見ると、中津川市と山口村の2遺跡では白瓷のしめる割合が多く、特に平遺跡では須恵器はなく、土師器がわずかにあるだけである。下伊那に入ると、神坂峠をこえた杉の木平遺跡では、白瓷の出土量は大変なものであった。そこで調査された住居址では白瓷の量が多いけど、土師器の割合も多く、峠の西と東の違いをはっきりさせている。量比は遺跡によってまた住居址によっても違いがある。ここでは白瓷も含めて10個体以上器形のわかる住居址例をとりあげた。それでも遺跡差が見られる。しかし、一つの群として見ると共通性もある。下伊那地方を見ると、中津川や木曽地方に較べると土師器の割合が大きい。しかし、諏訪・八ヶ岳・中・北信に較べると少ない。反面必ずしも白瓷が多いとはいえない。他地域にくらべて平均して多いのは須恵器である。産地追求がされていないが、飯田市竜丘地区の窯址群と関係があるのだろうか。上伊那地区を見ると、下伊那よりも遠いのに白瓷のしめる割合が大きく、土師器の割合は少ない。楢崎彰一先生が見られた白瓷の産地別割合でも、長野県は東濃窯がほどんどなのに、上伊那地区には猿投窯が比較的多くあって注意されている。特別な地域の要求と高まりがあったことを、この図でも示している。諏訪地区に入ると、土師器のしめる割合が大きくなり、白瓷は少ない。八ヶ岳山麓でも同様なことがいえるが、この地区では須恵器のしめる割合が少ないが、ない住居址もある。傾向としては、北上するにつれて白瓷のしめる割合が少なくなり、土師器のしめる割合が大きくなっている。吉蘇路で見ると、お玉の森遺跡では断然白瓷が多く、中津川市平遺跡と同じである。土師器、須恵器は長野県のどの地域よりも少ない。中・北信へ入ると、白瓷は少なく、土師器の割合が大きく、長野県の各地域と同じである。こうして見ると、お玉の森遺跡の傾向は、長野県の各地域とはちがい、中津川市の平遺跡と同じである。これは、この時期木曽が美濃国に入っていたことと、より多治見市・中津川市を中心とする東濃窯に近かったことが理由であると思う。もう一つ考えると、白瓷を購入できる経済的背景もあると思う。

白瓷は楢崎先生の研究によって知られ、それは「奈良末から平安時代にかけて、愛知県の猿投窯を中心に、東海地方一円において焼かれた高火度灰釉瓷器のことである。」と説明され、8Cから12C後半にかけて生産されたもので、その時期も六時期に細分されている（第3表）。大きく、 前期・後期にわけて、前



第52図 住居別器種量比一覧



第53図　白瓷窯群と長野県

期は鳴海23号窯期、折戸10号窯期、黒笹78号窯期が入る。この頃は須恵器を主体にして、仏器と椀の白瓷が焼かれていて、白瓷は中央を対称としていた。後期には生産地も増加し、白瓷の椀・皿が主体となって、青瓷も生産されるようになる。黒笹14号窯期、黒笹90号窯期、折戸53号窯期がこの時期に入る。窯数は特に東濃地方に多くなり、その需要は東山道を通じて東日本にあったといわれている。これは11Cのことで、12Cになると白瓷系陶器へと変化していく。第3表で見てもわかるように折戸53号窯期になると、東濃地方に爆発的に白瓷窯があらわれる。これもさらに見ていくと、この地で研究している田口昭二先生の研究では、1多治見北部古窯跡群、2多治見南部古窯跡群、3土岐北部古窯跡群、4土岐南部古窯跡群、5瑞浪地区古窯跡群、6恵那古窯跡群、7中津川古窯跡群の7か所があるという。それらの古窯跡群で焼かれた白瓷の器種は第4表の通りである。この表の中でゴチで示している器種がお玉の森遺跡で出土しているものである。椀・皿はほとんどの器種があり、あとわずかに鉢、瓶、甕があって、鉢以下の大形品や特殊なものはない。このことは東濃窯が東山道を通して、東日本に製品をおくり出すために出来たといわれるが、それはあくまでも器種がかぎられていて、大量生産の出来る椀・皿と必要度のある瓶だけで、上物は中央へと送りだされていたものと思う。そうしたことを現わすものとして、欠損品（ひ割れ、接合品、孔あき、重ね焼き痕のあるもの、ひどいのは不完全燃焼品もある）があることで、そのようなものまで売れたという事実は、東日本の人々にとって、白瓷は貴重品であり、要求度も高かったものと思う。だから中央へは売れないものでも、形さえ整っていれば売れたものと思う。また、購入した方も、貴重であったために大事に使用したらしく、内面底部と高台端に使用ずれの痕跡がいちじるしい。長野県で、白瓷、須恵器、土師器の割合は先に見たが、器形量はどうなっているかを見たのが第54図である。見やすく●、◎、○と表現したが、5と6という数量差は特に意味があってつけたも

時期＼産地	猿投	尾北	東濃	美濃須恵	
鳴海23号窯期	1			1	8C後半
折戸10号窯期				1	9C前・中
黒笹78号窯期	14			1	9C後~10C前
黒笹14号窯期	13				10C後半
黒笹90号窯期	35	18			11C前半
折戸53号窯期	11	14	125	24	11C後半

第3表　白瓷産地別、時期別窯数
（増崎彰一、美濃古陶のながれ）

器形＼器種	器　種　名
椀	**大椀・中椀・小椀・輪花椀**・稜椀
皿	**丸皿・段皿・稜皿・耳皿・輪花皿**・托
鉢	**大平鉢**・片口鉢・稜鉢・鉄鉢皿鉢・深椀型鉢
瓶	広口瓶・**長頸瓶**・水瓶・水注・**小瓶**・把手付瓶・花瓶
壺	四耳壺・短頸壺・片口壺
甕	**丸底の甕**・把手付甕
蓋	薬壺の蓋・香炉の蓋・椀の蓋
硯	風字硯・円面硯
その他	火舎・陶沈・陶鈴・鐘　塼

（ゴチはお玉の森遺跡出土器種）

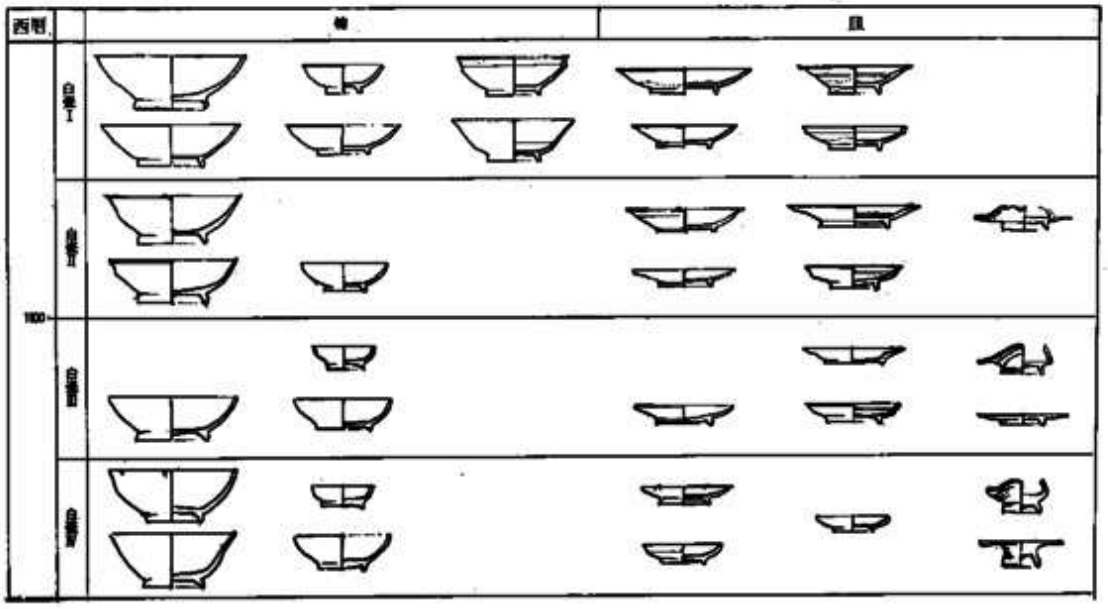
第4表　東濃窯白瓷器種
（田口昭二　白瓷と白瓷系陶器）

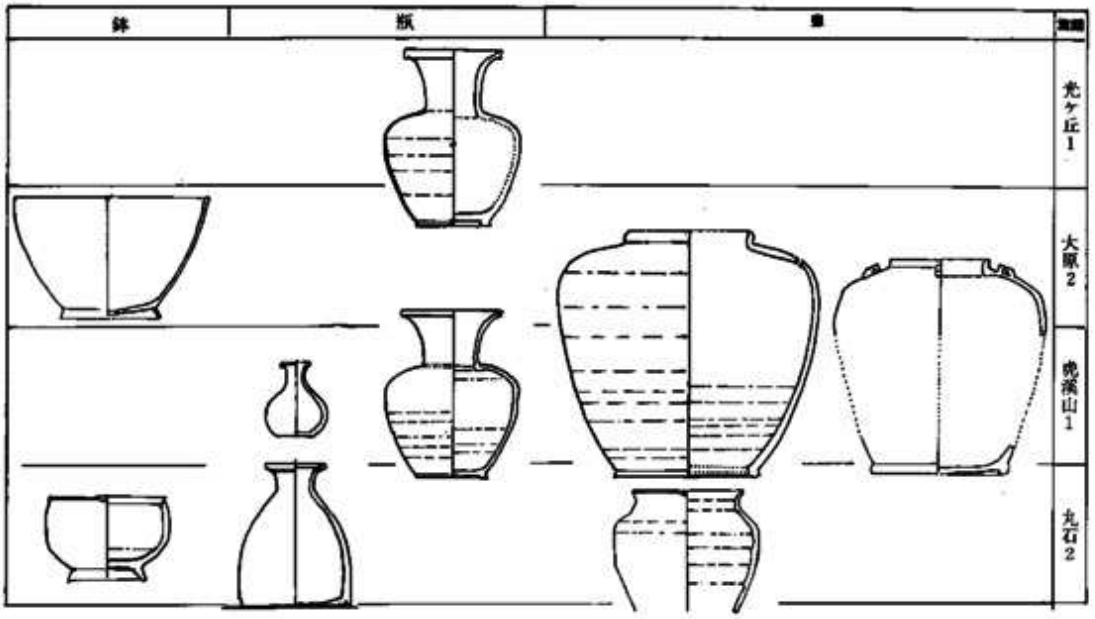
のではない。各地域を通して見ると、白瓷は椀がどの遺跡にも、数量的にも多く、ついで皿がある。このことは日常食器としての需要が強かったことを示す。数量的には少ないが長頸瓶の存在は液体容器としての機能の必要があり、最低必要貴重品として、家に1個はあったものと思う。須恵器は全体的に少ないがその中で、坏が数量的に多く、日常食器であったためと思う。甕が壺より多いのは、水甕としての必要性と思う。土師器では坏と甕が断然多く、どこにもある。坏は日常食器である必要性、より安かったということもあると思う。甕は煮沸用具としての必要性から、必ずなくてはならないものである。これらのあり方を地域的に見ると、下伊那では他地域にくらべると、白瓷では皿がより多くの遺跡で見られることと、須恵器の甕がない。上伊那では白瓷の椀と土師器の杯の量が多く、白瓷の瓶がほとんどなく、かわりに須恵器甕がある。諏訪では白瓷の量はへっているが、椀が中でも多くの遺跡に見られる。土師器がとくに杯に量が多い。同様なことは八ヶ岳や、中北信地方でもいえる。ほしいが手にとどかなかったためと思う。こうした長野県各地の状況とお玉の森遺跡をくらべると、お玉の森遺跡では、白瓷の器形は全部とも量的に多い。須恵器では坏より甕の方が多いのも、水甕という用途から当然と思う。土師器は甕はどの住居にも見られたが、坏は必ずしもそうでなく、白瓷椀におされていたためと思う。

お玉の森遺跡の時代　楢崎先生が県下の白瓷を調査した折、お玉の森遺跡校庭用地内の資料を見てもらった。その結果、生産地は東濃窯が多く、猿投窯も少量あり、時期は終末期の折戸53号窯期であるといわれた。田口先生は東濃地方の資料を窯を中心に研究して、

第54図　種別器形量対比一覧（●6以上　◎2～5　○1個）

地域	遺跡名 ＼ 種別・器形	白瓷 椀	白瓷 皿	白瓷 瓶	須恵器 杯	須恵器 壺	須恵器 甕	土師器 杯	土師器 皿	土師器 甕	土師器 釜
中津	平	●	●							○	
	青野原口	◎	◎							◎	
下伊那	杉の木平1	◎	●	◎	○		○	◎	○	◎	
	六反田4	○		○	○					●	
	小垣外11	○	○	○	◎			●		○	
	〃 12	◎	◎		◎	○		◎		◎	
	清水34	●	○					◎		●	○
	〃 41	●	◎		○		○	◎	○	◎	○
上伊那	南丘1	●	◎		◎		◎	●			
	百駄刈5	●	◎				◎	◎		◎	
	大境2	●	●	○		○	◎	●		◎	
	山の根5	◎			◎	○		●		●	
諏訪	新井南1			○	○			◎	◎	◎	
	〃 8	○				◎		●		◎	
	〃 9	●			○			●		○	
	新井北2	●	◎					●		◎	◎
	〃 6			○	○	○	○	●		◎	
	大熊上2	○	◎		○		○	●		○	○
	〃 3	○	◎	○				◎	◎		
八ヶ岳	足場3	○				○	○	●		●	○
	〃 8	○		◎		○	○	●	●	●	
	手洗沢1	●	○				○	●		○	
	柳坪B5	○						◎	◎	◎	
	〃B8	◎	○					◎	○	●	
	〃B22	○		○				◎		○	
木曽	お玉の森9	●	●	●	○		○	◎		◎	
	〃 10	●	◎	◎		○	◎	◎		◎	
	〃 11	●	●	◎			○			◎	
	〃 12	●	◎	○	◎	○	◎	◎		◎	
中・北信	七本松	◎		○	●	○	◎	●	○	●	
	大塚		○	○			◎	●	◎	●	
	石動下	◎	○	○			○	◎		○	





第55図　東濃窯群白瓷編年

四時期に編年している。光ヶ丘１号窯期→大原２号窯期→虎溪山１号窯期→丸石２号窯期がそれで、第55図の通りである。その説明によると（滝呂向島窯跡発掘調査報告書より）、

「東濃における白瓷窯は、二段階で四つの窯期にわけることができる。

長瀬山山麓に分布している光ヶ丘１号窯跡、住吉１号窯跡が最も古く、猿投窯黒笹89号窯期に比定されている。また、光ヶ丘１号窯跡からは、内面底部に陰刻文のある稜椀が採取され、住吉１号窯跡では、白瓷に加え青瓷を生産しており、緑釉の附着した椀、三叉トチ、などが採取されている。

次の時期の窯として、華立山地東麓の大原２号窯をあげることができる。光ヶ丘１号窯期では〝刷毛塗り〟による施釉が行われていたのにくらべ、大原２号窯期ではすべて〝つけがけ〟となり、省力化が進んでいる。椀などにはわずかに小形化の傾向も見られるが、よく精製された細かい胎土で焼け締り、灰白色を呈している。

この窯の東に一時期下る窯として、虎溪山１号窯跡をあげることができる。この窯の製品は、細かい胎土からなる精製品であり、椀など大原２号窯期より若干大形化している一方、一部器種に退化的傾向が見られる他は大差なく、猿投窯折戸53号窯期に比定されている窯である。

次の時期の窯として、虎溪山２・３号窯跡をあげることができる。この窯期は、土岐市泉町丸石所在の丸石２号窯跡が標式となっており、製品の口縁部、高台などには、粗雑化と退化現象があり、全体的器種については、画一化の傾向がみられる。」といわれていて、今まで、折戸53号窯期に初まるといわれていた東濃窯群が、一時期あがって、黒笹89号窯期にまであがることがわかった。

お玉の森遺跡の資料について、田口先生に実見して指導をうけました。その結果、当遺跡の白瓷は、その生産地は美濃窯で、多治見市北部の上畑窯品に胎土が似ている。わずかに猿投窯のものもある。時期については、ほとんどが光ヶ丘１号窯期で、丸石２号窯期は１号住居址の段皿と表採資料に、虎溪山１号窯期のは国道附近出土の椀に見られるだけである、といわれました。このことから、当住居址は東濃窯の中では最も古い時期のものであり、作り直しても、窯期の上では変化のない時間内でのことであることがわかる。平安時代後期でも古い時期で、楢崎先生の編年によれば黒笹90号窯期で、11Ｃ前半となる。最近、この編年も１Ｃから1.5Ｃも古くなるのではないかといわれており、もしそうであるとすると、９Ｃ末から10Ｃ前半ということになる。このことは今後の研究にまちたい。一応10Ｃ後半から11Ｃ前半位と思う。

10Ｃから11Ｃの時代　白瓷の年代から推定して、お玉の森遺跡は10Ｃ後半から11Ｃ前半と考えられる。この頃は、中央では藤原氏の摂関政治の全盛から、地方の乱れが初まり、武士が各地でおこり初めてくる。こうした中で政治の権力は院政へと移りゆく頃である。太宝律令によって整えられた律令制度がくずれだして、各地では有力豪族や中央貴族、社寺が荘園を増加していっている。また、在地農民も豪農を中心に開墾が進められ高まりが見られる。とくに東日本での農業の発展と高まりは、豊かな農民をうみ、その上に地方武士がのっかかり、政治力をつけてき、平将門の乱のような大きな反抗もあらわれてくる。この東日本の高まりが、白瓷の購入となり、主要道である東山道によって、中部地方から北関東や東北方面へと搬出されていったものといわれている。こうして東へとのびる時期に木曽はどうであったか、８Ｃ前半に吉蘇路のことがでてくるが、この道が木曽を北上する道であったか、神坂峠をはさむ峠道の改修であったかに論がわかれている。神坂峠では峠をこえて伊那へのおりる道が、谷にそって下る道と、山腹をつたって尾根にでて、それを下る道があって、後者には道のところどころから白瓷を出土しており、時期的にも

第5表　関係する年表

年　代	日本の主な出来事	木曽に関係すること
701	大宝律令ができる	
702		岐蘇山道の工事が初まる
710	平城京に都をうつす	
713		吉蘇路開通
743	墾田永年私財の法が定められる	
794	平安京に都をうつす	
858	藤原良房が摂政となる	
879		美濃、信濃国の国境裁定(県坂峠とする)
		吉蘇、小吉蘇村は恵那郡絵上郷なり
887	藤原基経が関白となる	
	この頃荘園が広まり、武士がおこる	
927	延喜式ができる	恵那郡（淡気、安岐、絵上、絵下、坂本、竹折）
939	平将門の乱	
940		岐曽道使を停止する
1051～62	前九年の役	
1083～87	後三年の役	
1086	白河上皇が院政を初める	
1155		源義賢が討たれ、義仲が木曽に逃れる
1156	保元の乱	源義朝の御家人に木曽中太、弥中太の名あり
1159	平治の乱	
1167	平清盛が太政大臣となる	
1180	源頼政、源頼朝、源義仲が兵をあげる	木曽で義仲が兵をあげる
1183	源義仲が京に入る	
1184	〃　征夷大将軍となる	
	〃　が源義経にうたれる	
1185	平氏がほろぶ	源義経の兵に木曽中次の名あり
1186		信濃国大吉祖庄の記録あり
1192	源頼朝が征夷大将軍となり、鎌倉幕府を開く	
1298		小技曽庄の記録あり

新しいので、これが吉蘇路ではないかと思う。そのもう一つの理由としては、二時期の遺物を出す遺跡が木曽地方に全くないこともあげられる。９Ｃに入って、木曽に吉蘇、小吉蘇村の２村があったことは、この時期に木曽へ再開発があったことを意味し、美濃方面から上流へと入ってきたためか、美濃国恵那郡に入っている。当時の恵那郡は山地でやせ地が多く、農業面では不作の多い地方であった。そのため８Ｃから９Ｃにかけて税の免除の記事が何回も見られる。また東山道の坂本駅の駅子が逃亡した記事も見られる。一方、木曽の遺跡を見ると、奈良時代から平安時代にかけての遺物はほとんど出土していないが、白瓷は全郡の至るところから採集されており、戦後になって開拓されたような山間の高冷台地にも見られ、驚くべき広がりを見せている。より奥へと入った傾向がうかがわれる。これらの白瓷が、楢崎先生の編年だと11Ｃ後半になり、吉蘇、小吉蘇村の成立とあわなくなる。もし、これが最近いわれているように１～1.5Ｃも古くなるとするとちょうど一致する。10Ｃでの木曽の高まりが、地方豪族を生み、木曽義仲を育てた中原兼遠がそれである。中原氏の屋敷はお玉の森遺跡より南の、木曽福島町新開の上田にあったといわれる。木曽義仲は日義村宮越に屋敷をもっていたといわれる。義仲の時期は12Ｃ後半なのでお玉の森遺跡の白瓷とは時期があわない。中原氏がこの地で勢力を伸ばす頃と考えられる。

Ⅵ まとめ

中学校用地内の平安時代住居址群についてまとめてみると

1. その時代は平安時代の後期、10Cから11Cにかけてである。
2. 住居址は大・中・小とあって、それが大を中心にしていくつか組みあわさって一単位をつくっている。その単位が房戸と思う。これらの房戸がたがいに関係しあって分布して集落をつくっていた。
3. その広がりは、学校を中心とした台地の中央部であり、台地縁の山麓よりには縄文時代の集落がある。縄文時代は早期・中期・後期の土器が検出されている。
4. 住居址は方形または長方形プランで、石組粘土カマドをもっている。これを基本として、カマドの位置、柱穴の有無と数などに変化があり、強い規制はなかったようである。
5. 住居址のカマドの破壊状況から見て、これらの家、すなわち集落は移転の際に人為で建物をこわしていったものである。
6. 出土白瓷は東濃窯群で製作されたもので、その中で最も古い光ヶ丘1号窯期のものであるという。わずかに後続する時期のものもあるが、白瓷の窯期が限定されていることは、この集落が継続して居住されなかったことを意味する。立地条件は当地方では恵まれているので、何等かの社会的条件が集落廃絶においやったものと思う。
7. 出土遺物から見て、当時の生業は多業であった。その主体は農業であったと考えられる。木曽川の沖積地での米作（水田）、遺跡のある台地での畑作、そして、木曽川での漁業、尻平沢川をあがってガレ場で、または木曽河原での石工、集落内ではカジ屋もいたことがわかる。鉄鏃の存在から武士もいたのだろうか。村をすてる時に道具を持ち去ったために、あまり残っていないので、以上しかわからない。当時、木曽谷の経済を支えていたものは農業だろうか。豊かな山林資源がある木材はどうだったのだろうか。斧などが出土していないので遺物からは判断できない。
8. 当遺跡の白瓷のしめる割合は県内のどの遺跡よりも大きい。商品であった白瓷の多量さは、この地が当時美濃国絵上郡に入っていたという結びつきもあるが、より購入できるという経済的な面もあったと思う。その経済力が何であったのだろうか、まだ明確にできない。
9. 白瓷は貴重であったと思われ、欠損品や不充分な焼成のものもあって驚く。また、ていねいにつかったのか、内面底部や高台端に使用ずれが激しかった。
10. 墨書も数多く見られ、知的面も相当に高かったことを示す。

当遺跡の調査した資料をもとに、もっと追求を深めなければいけないのだが、自分の力の至らなさで、今後に多くのものを残している。

先学の多くの文献を参考にしてもらったが、失礼だけど、その一覧は省略させてもらった。

第5表　お玉の森遺跡出土土器一覧表

図番号	住居址	器種	口径	底径	高さ	残存	器形	底裏	使用ずれ	施釉(整形)	胎土	色調	焼成	その他
10の1	1	白・椀	16.2	7.9	5.3	完	腰はあまり張らないで外に開き、口縁がわずかにふくらんで外に突出している。高台は低くて厚い。	中央に糸切痕が残る	あり（内面底部と高台端）	白色で光沢がない	ち密	白色	低火度	10の5が上にのっていた。
2	〃	白・椀	(13.0)	6.8	3.7	1/4	腰は張らないで外に開き、口端は丸味をもつ。高台は低く外に開く。	糸切痕が残る	あり	白色で光沢がない	ち密	白色	低火度	底にヒビ割れ
3	〃	白・椀	(12.4)	6.8	3.8	1/4	腰は張り、口縁部はわずかに立ちあがる。口縁でわずかに厚味をまし、口端は丸味をもち、わずかにふくらむ。高台は低く部厚い。	糸切痕が残る墨書がある	あり	黄褐色で、淡緑色の光沢が見られる	ち密	よう黒色	良い	
4	〃	白・段皿	15.7	7.7	2.4	完	開いてきた口縁が、カーブをえがいてさがり気味である。腰に一周ヘラケズリがみられる。高台は高くていねいにつくられる。	ヘラケズリ	あり	淡緑色で光沢がある	ち密	灰白色	良い	重ね焼痕あり
5	〃	白・皿	12.4	6.6	2.0	完	腰は張らなくて外に開き、口縁でわずか内側にカーブをしている。口端は丸い。高台は低く、断面が三角形である。	糸切痕が残る	あり	外は白色、内は褐色でわずかに光沢あり	ち密	灰白色	良い	10の1に入っていた。
6	〃	白・皿	11.9	7.2	2.1	完	カーブして口縁部へといき、部厚くなり、口端は丸い。高台は低く丸い。	糸切痕が残る		外は白色、内は淡褐色で光沢をもつ	ち密	白色	良い	重ね焼痕
7	〃	白・鉢	(13.4)				口縁はわずかにふくらみ、口端で内側におりかえしている。			なし	小石粒含	褐色	良くない	
8	〃	土・坏	(13.3)	6.6	6.0	1/4	腰が張り、胴から立ちあがる。口端は内側に丸味をもつ。高台は高く、外に開く。	ヘラケズリ		ロクロ整形、内面黒色研磨	密	褐色（外）	良い	
9	〃	土・甕		(8.6)				糸切り		ロクロ整形	ち密	赤褐色	良い	
12の1	2	白・椀	(17.3)	(8.1)	6.3	1/8	腰はわずかに張って、ヘラケズリが2周見られる。口縁はゆるく内湾している。口端は丸味をもつ。口縁にヘラ状のものでおさえた五弁の輪花がある。高台は高くていねいで外に張り出ている。	ヘラケズリ	あり	外は白色で光沢なし。内は淡緑色の光沢がある。	ち密	よう黒色	良い	

図番号	住居址	器種	口径	底径	高さ	残存	器形	底裏	使用ずれ	施釉(整形)	胎土	色調	焼成	その他
12の2	2	白・椀	(17.0)	6.7	5.4	十	腰は張らないで口縁と開き、口端はわずかに外に突出するようにふくらむ。高台は高くカーブして外に出、高台端が鋭い。	ヘラケズリ	あり	白色でわずかに光沢がある	ち密	灰白色	良い	
3	〃	白・椀	(13.5)	(7.9)	4.7	十	腰はわずかに張って、ヘラケズリが1周する。口端はわずかにふくらみ、外にはり出ている。高台は高くていねいにつくられる。	ヘラケズリ	あり	外は透明で光沢あり、内は褐色で淡緑色の斑点に光沢がある	ち密	よう黒色	良い	
4	〃	白・椀					底部のみ、高台は低く部厚い。	ヘラケズリ墨書	あり		ち密	灰白色	良い	
5	〃	白・皿	(13.4)	(7.2)	3.3	十	腰にヘラケズリが1周し、カーブして口縁に行き、わずかに内湾する。高台は低く外に張り出す。	ヘラケズリ全面に墨痕	あり	緑色で光沢が強い	ち密	灰白色	良い	
6	〃	白・皿	(12.7)	(6.5)	2.4	十	腰で内側におれるようになったのが口縁で外へ開く。高台は低く直。	ヘラケズリ	あり	白色で光沢が強い	ち密	白色	良い	
7	〃	土・甕					腰にロクロ整形の沈線が2本見られる	木の葉痕(?)		ロクロ整形	密	赤褐色	良い	
14の1	3	白・椀	14.7	7.2	3.6	十	腰はわずかに張って口縁へと開く。口端は厚くなる。高台は低く厚い。	糸切痕が残る	あり	白色で光沢あり口縁の一部内外に黒色で光沢のある附着物がつく(ウルシ?)	砂質で器肌がざらっぽい	灰白色	良い	
2	3	白・椀	(14.1)	(6.5)	4.1	十	腰は張らないで口縁へと開き、口端はわずかにふくらみ外に張る。高台は薄く外にはる。胴に小さい孔があいている。	不明	あり	黄白色で光沢はない	ち密	灰白色	良い	
3	〃	白・椀	(12.6)	(6.0)	4.7	十	腰が張り、胴から立ちあがり気味に開くので深味を感じる。口端は鋭い。高台は高く外に開く。	ヘラケズリ、「平」の墨書あり	あり	淡緑色で光沢あり	ち密	灰白色	良い	重ね焼痕
4	〃	白・椀		7.4			腰にヘラケズリあり。胴を外よりわざと打ち欠く(8回)高台は部厚く低い。	ヘラケズリ墨痕	あり	黄白色で光沢あり	ち密	白色	良い	重ね焼痕
5	〃	白・皿	13.7	6.9	2.9	完	腰は張らないで口縁へと開く。口端はふくらみ、外におれるように外反している。高台は外に開く。	ヘラケズリ墨痕	あり	黄白色で部分的に黄緑になり光沢がある	ち密	よう黒色	良い	

図番号	住居址	器種	口径	底径	高さ	残存	器形	底裏	使用ずれ	施釉(整形)	胎土	色調	焼成	その他
14の6	3	白・壺					口縁はわずかに内側にくぼむ。			内白色、外黒褐色で光沢あり。	ち密	白色	良い	
7	〃	白・壺		8.4			高台は厚く低い。	ヘラケズリ		白色で濃緑色部は光沢あり	ち密	白色	良い	
8	〃	白・壺		8.4			高台は厚く低い。	ヘラケズリ		白色で濃緑色部は光沢あり	ち密	白色	良い	
9	〃	須・甕		7.0			高台は厚く低い。	糸切痕が残る			小石粒を含む	灰白色	良い	
10	〃	土・坏	(11.5)	(5.4)	4.9	1/4	腰は厚く、胴から立上り気味に口縁へと開く。口端は内側より丸味をもって終る。内面黒色研磨され、内面底部にヘラ磨きの暗文が残る。器面は水に洗われたようにざらつき、石粒が見られる。	糸切底		ロクロ整形	石粒を含む	こげ茶色	良くない	
11	〃	土・坏	(12.4)	5.2	3.7	1/8	腰は張らないで口縁へと開き、口縁で外へカーブして開く。ハケなでしたらしく横走する浅い条線が両面に残る。	糸切底		ロクロ整形	少し石粒を含む	明褐色	良い	
12	〃	土・甕	(13.4)				胴径は口径とほぼ同じで頸部はしぼみ口縁は外反し、口端は外に厚くなっている。櫛描き条線が時計まわりについている。ススが附着。			ロクロ整形	小石粒を含む	茶褐色	良い	
13	〃	土・甕	(13.2)				口縁は頸部から外反し、口端は丸く終る。器面はなで磨き、ススが附着。			輪積み整形	雲母を含む	黒褐色	良い	
18の1	5	白・壺	胴 17.8	9.8			腰に4周のヘラケズリがある。胴はあまり張らず、器厚はうすい。	ヘラケズリ		濃緑色で光沢あり	ち密	白色	良い	
2	〃	土・坏	(16.0)	7.2	5.0	1/3	腰はわずかに張って口縁へと開く。ロクロ整形痕が残る。内面はていねいに研磨され、内面底部に墨書がある。高台は高く外に張り出す。	糸切痕がわずかにのこる		ロクロ整形	小石粒を含む	黄褐色	良い	
3	〃	土・坏	(13.8)	6.4	4.3	1/8	底から口縁へと直に開く。器面は両面とも水洗されたようにあれる。ロクロ整形痕が残る。	糸切底		ロクロ整形	小石粒を含む	灰褐色	良くない	

図番号	住居址	器種	口径	底径	高さ	残存	器形	底裏	使用ずれ	施釉(整形)	胎土	色調	焼成	その他
18の4	5	土・坏	(12.3)	(6.3)	3.8	1/3	わずかにカーブしてロ縁へと開く。口端は内側からけずられて鋭い。ロクロ整形痕が残る。内面は黒色研磨される。	糸切底		ロクロ整形	ち密	赤褐色	良い	
5	〃	土・甕	(13.6)	7.4	16.6	1/3	胴中央で最大径(16.9)をもつ球形に近い胴、口縁は頸部から外反し口端は丸く終る。口縁は横ナデ、胴はロクロ整形痕が強く残る。	糸切底中央がわずかに凹む		ロクロ整形	石粒を含む	赤褐色	良い	
6	〃	土・甕	(12.2)	8.6	16.1	1/3	底から開き、胴上半に最大径(14.4)をもち、口縁は頸部から外反し、外側へ肥厚くなり丸味をもつ。口縁は横ナデ胴に横走櫛描き条線がつく。内面は口頸部に櫛描き条線、胴は整形の凹みがある。	部厚く、平らである糸切底		ロクロ整形	小石粒を含む	黄褐色	良い	
7	〃	土・甕	(16.0)				わずかに胴のふくらむ(16.4)ずん胴形で、わずかにすぼまる頸部から気持ち口縁が外反している。細かいハケ状器具で胴は縦に、頸部は横に、内面も同様である。輪積み痕も残る。			輪積み整形	石粒を含み雲母片が多い	暗褐色	良い	
8	〃	土・甕						木の葉痕あり						
21の1	6	土・椀	16.0		7.9	完	鉢体形で、ヘラケズリして丸底にし腰は張って口縁へと立ち上がり、口縁はわずかに内湾している。口端は内側よりけずられて鋭い。胴にはロクロ整形痕がつく。内面は黒色研磨されている。	わずかに糸切痕が残る。		ロクロ整形	細石粒を含む	黄褐色	良い	
2	〃	土・坏	(12.2)	5.3	4.0	1/4	底部脇で腰が張って口縁へと開く。口端は内側にふくらみ丸味をもつ。外ば部分的に黒光りのススが附着する。内側は器肌がざらっぽい。	わずかに台状になっていて糸切痕が残る		ロクロ整形	細石粒を含む	赤褐色	良い	
3	〃	土・皿	13.0	5.8	2.7	3/4	底部から口縁へと直に開き、口端は丸い。外の器肌はざらっぽい。内側はていねいに研磨されている。高台は直に立っている。	糸切痕がわずかに残る		ロクロ整形	細石粒を含む	黄褐色	良い	
4	〃	土・甕		7.9			胴上部で最大径(13.1)となり、ズングリした器形。横走する浅い条線がつく内面にも同じ条線がつく。	糸切痕		ロクロ整形	密	赤褐色	良い	

図番号	住居址	器種	口径	底径	高さ	残存	器形	底裏	使用ずれ	施釉(整形)	胎土	色調	焼成	その他
24の1	7	白・椀	(16.8)	8.2	5.6	1/8	腰には2周のヘラケズリがあり、わずかに張って口縁へと開き、口縁はわずかに外反し、口端は外に肥厚くなって丸い。高台は高く外に開く。	ヘラケズリ	あり	淡緑色で光沢がある。	ち密	白色	良い	6住の破片と接合
2	〃	白・椀	(17.0)	(7.6)	5.3	1/4	腰に1周ヘラケズリがある。口縁は口端近くで外へおれるように外反している。	ヘラケズリ	あり	白色で光沢はない	ち密	白色	良い	
3	〃	白・皿	(15.0)	7.8	2.4	1/8	腰に2周ヘラケズリがある。口縁は外へカーブし、口端は外へ肥厚く丸くなる。胴にはロクロ整形のくぼみが見られる。高台は低く外へ開く。	ヘラケズリ		緑色で光沢がある	ち密	灰白色	良い	重ね焼痕
4	〃	白・壺	(12.6)				口端はわずかにくぼんでいる。			緑色がまばらにある 白色で光沢あり	ち密	白色	良い	
5	〃	須・甕					腰部にヘラケズリがある。高台は平らで厚い。	ヘラケズリ			小石粒を含む	よう黒色	良い	
6	〃	土・坏					腰がわずかにはって口縁へと立ち上り口端は厚く丸い。内部は黒色研磨されている。	糸切底		ロクロ整形	密	赤褐色	良い	
7	〃	土・甕	(13.0)				胴中央で最大径(14.4)となる。口縁は頸部から大きく外反する。口端は丸い。外に横走細条線が全面につく。内は口縁まで黒色炭化物が全面附着。			ロクロ整形	密	赤褐色	良い	
26の1	8	白・椀						ヘラケズリ 墨書あり						他に墨痕 朱痕あり
2	〃	土・坏					腰部に墨書あり。内部は黒色研磨されている。							
29の1	9	白・椀	(17.2)	(9.2)	7.3	1/8	腰に1周のヘラケズリがある。腰は張り立上り気味なので深さを感じる。口縁は肥厚くなり、わずかに外におれる。高台は高く外に張り出す。	ヘラケズリ	あり	外は部分的に淡緑色の光沢がある。内は淡褐色である	石粒を含む。焼き割れあり	白色	良い	
2	〃	白・椀	(17.2)	(7.4)	6.0	1/8	底から口縁へと開き、口唇は厚く丸味をもつ。高台は厚く面取りしている。	ヘラケズリ	あり	白色に淡緑の斑点がある。	ち密	白色	良い	重ね焼痕あり

図番号	住居址	器種	口径	底径	高さ	残存	器形	底裏	使用ずれ	施釉(整形)	胎土	色調	焼成	その他
29の3	9	白・椀	(16.2)	(7.6)	5.3	1/8	底から胴までヘラケズリが5周している。口縁は凹線状にくぼみ、口端はわずかに外にでる。高台はハの字形に開き鋭い。	ヘラケズリ	あり	黄緑色で光沢ある	ち密	白色	良い	
4	〃	白・椀	(16.5)	(8.6)	4.8	1/8	腰に1周ヘラケズリがある。口端がわずかにふくらみをもち丸い。高台は断面が丸味をもつ。	ヘラケズリ	あり	白色で光沢ある。	ち密	灰白色	良い	
5	〃	白・椀	(16.2)	8.4	5.1	1/8	腰がわずかにはって口縁へと開き、口端はわずかに外に突出している。高台は断面が丸味をもつ。	ヘラケズリ	著るしい	黄白色で淡緑の光沢がまばらにある	ち密	灰白色	良い	
6	〃	白・椀	15.4	7.8	4.9	1/8	腰は張らないで口縁へと開き、口端は外へおりかえして、肥厚く丸味をもたせている。	ヘラケズリ	あり	外は白色で光沢あり。内は褐色斑点が全面にある。	石粒を含み、ひび割れあり	灰白色	良い	
7	〃	白・椀	14.9	7.2	4.7	1/8	腰は張らないで口縁へと開き、口端はわずかに外に突出する。	ヘラケズリ中央に糸切痕のある円形突起が残る。	あり	外は白色で光沢あり、内は褐色斑点が全面にある。	ち密	灰白色	良い	
8	〃	白・椀	(15.2)	(7.7)	4.8	1/16	腰にヘラケズリが1周あり、わずかに張って口縁へと開く。口端はわずかに外に突出する。	ヘラケズリ	あり	褐色で光沢がある	ち密	灰白色	良い	
9	〃	白・椀	(14.6)	(7.4)	4.3	1/8	腰にヘラケズリが1周し、わずかに張って口縁へと開く。口端はわずかに外に突出する。	ヘラケズリ	あり	淡褐色で光沢がある。	ち密	灰白色	良い	
10	〃	白・椀	(14.4)	(7.1)	4.0	1/8	腰にヘラケズリが1周し、口縁へと開き、口端は外へおれるように突出する。	ヘラケズリ	あり	淡緑色で光沢がある。	ち密	黒褐色	良い	
11	〃	白・椀	(14.0)	(7.1)	4.4	1/8	腰ははらず口縁へと開く。口端は丸く終る。高台にひび割がある。		あり	白色で光沢がない	ち密	白色	良い	
12	〃	白・椀	(13.8)	(7.8)	4.2	1/8	腰が張り、胴から口縁へと立上がる。口端は丸い。	ヘラケズリ墨痕あり	あり	白色で光沢が少しある。	ち密	褐色	良い	
13	〃	白・椀					腰にヘラケズリが1周している。	ヘラケズリ「万」の墨書	あり	白色に緑色部があり光沢あり。	ち密	黄褐色	良い	

図番号	住居址	器種	口径	底径	高さ	残存	器形	底裏	使用ずれ	施釉(整形)	胎土	色調	焼成	その他
29の14	9	白・椀						ヘラケズリ 墨書あり		白色で光沢なし	ち密	よう黒色	良い	
15	〃	白・椀					内面底部に墨書あり	ヘラケズリ 墨書あり	あり	外は白色光沢なし 内は淡緑色	ち密	よう黒色	良い	重ね焼痕あり
16	〃	白・椀					内面底部に墨書あり	ヘラケズリ 墨書あり	あり	白色で光沢なし	ち密	白色	良い	
17	〃	白・椀					高台のおさえつけが雑である	ヘラケズリ 墨書あり	あり	白色で部分的に淡緑色で光沢あり	ち密	褐色	良い	
18	〃	白・椀						糸切痕が残る 墨書あり	あり		石粒を含む	灰白色	良い	
19	〃	白・椀					内面底部に墨書あり	ヘラケズリ 墨書あり	あり	白色で部分的に淡緑色で光沢あり	ち密	黄褐色	良い	
20	〃	白・椀					内面底部に墨書あり	糸切痕あり	あり		ち密	よう黒色	良い	
30の1	〃	白・皿	(16.4)	(8.4)	3.1	1/4	底部から口縁へと大きく開き、口縁はわずかに立ちあがり、口端は厚くなり外にふくらむ。巾広におさえて輪花をつくる。	ヘラケズリ	あり	外は白色透明で光沢あり。内は淡緑色斑点があり光沢あり	石粒を含む	灰白色	良い	
2	〃	白・皿	15.3	7.6	3.1	1/2	底部と体部を別につくり接合しているため高台脇にヒビ割れが見られる。口縁は指でおさえた輪花が4弁ある。	ヘラケズリ	あり	内の口縁一部に施釉している	ち密	よう黒色	普通気ほうふくれがある。	
3	〃	白・皿	(14.9)	(7.7)	2.9	1/4	腰に2周ヘラケズリあり。口縁はわずかに外反気味である。ヘラで軽くおさえた輪花が見られる。高台に重ね焼の剥離痕が見られる。	ヘラケズリ	あり	外は白色透明光沢あり。内は黄褐色の斑点がある。	ち密	灰白色	良い	重ね焼痕あり
4	〃	白・皿	14.0	7.0	3.0	3/8	口縁で丸味のある稜をつくって立ちあがり、口端は外へおれる。高台端が鋭い。	ヘラケズリ 墨書？	あり	外は白色光沢あり 内は褐色に淡緑色の光沢がある。	ち密	灰白色	良い	重ね焼痕あり
5	〃	白・皿	(14.1)	6.6	3.2	1/4	口縁は内側へ丸味をもって立ちあがる高台端が鋭い。	ヘラケズリ	あり	淡緑色で光沢あり 内は褐色で光沢がない	ち密	灰白色	良い	重ね焼痕あり
6	〃	白・皿	(13.8)	(7.4)	3.2	1/4	腰に1周ヘラケズリあり。口縁は丸味のある稜をつくって立ちあがり、口端はわずかに外へ突出する。高台端が鋭い。	ヘラケズリ	あり	白色で光沢はうすい。	ち密	灰白色	良い	重ね焼痕あり

図番号	住居址	器種	口径	底径	高さ	残存	器形	底裏	使用ずれ	施釉(整形)	胎土	色調	焼成	その他
30の7	9	白・皿	13.6	7.0	2.3	1/2	口端がわずかに内側にカーブする。高台端に重ね焼きの剥離痕がある。	ヘラケズリ	あり	緑色で光沢あり	石粒を含む	灰白色	良い	重ね焼痕あり
8	〃	白・皿	(12.8)	6.0	2.5	1/2	口端がわずかに厚くなる。高台は低く厚い。	糸切痕が残る墨書あり		緑色で光沢あり	小石粒を含む	白色	良い	重ね焼痕あり
9	〃	白・皿	(13.6)	6.3	3.2	1/2	口縁がわずかに立ちあがり、口端は外に突出する。高台に重ね焼剥離痕がある。	ヘラケズリ	あり	褐色でにぶい光沢あり	やや砂っぽい	灰白色	良い	重ね焼痕あり
10	〃	白・皿	13.2	6.4	3.0	3/4	口縁が全体に丸味をもっている。	ヘラケズリ中央に円形の墨痕あり	あり	緑色で光沢あり。内は全面に施釉される。	ち密	灰白色	良い	
11	〃	白・皿	(13.4)	7.1	2.7	1/2	口端がわずかに内側にカーブする。高台端が鋭く、重ね焼剥離痕あり	ヘラケズリ全面が黒くすすれる	あり	外は白色で光沢あり。内は褐色で淡褐色の光沢あり。	ち密	黄白色	良い	重ね焼痕あり
12	〃	白・壺	(13.0)				口端は直立状である。			緑色の光沢がある	ち密	白色	良い	
13	〃	白・壺	(12.6)				口端が直立状で、わずかに中央がくぼむ。			緑色の光沢がある	ち密	白色	良い	
14	〃	白・壺	(11.8)							白色で光沢あり	ち密	灰白色	良い	
15	〃	白・皿	(12.0)							透明で光沢あり	ち密	灰白色	良い	
16	〃	白・皿	(8.8)							緑色で光沢あり	ち密	白色	良い	
17	〃	白・皿								透明で光沢あり	ち密	灰白色	良い	
18	〃	須・坏					高台端が段状になっている。	ヘラケズリ			小石粒を含む	よう黒色	良い	
19	〃	須・壺	(19.0)							よう黒色で光沢あり。	小石粒を含む	よう黒色	良い	
32の1	10	白・椀	(16.2)	(8.5)	5.5	1/2	腰にヘラケズリが1周する。口端が外へ突出する。高台端に重ね焼き剥離痕あり。	ヘラケズリ	あり	白色で内側は光沢あり	ち密	灰白色	良い	重ね焼痕あり

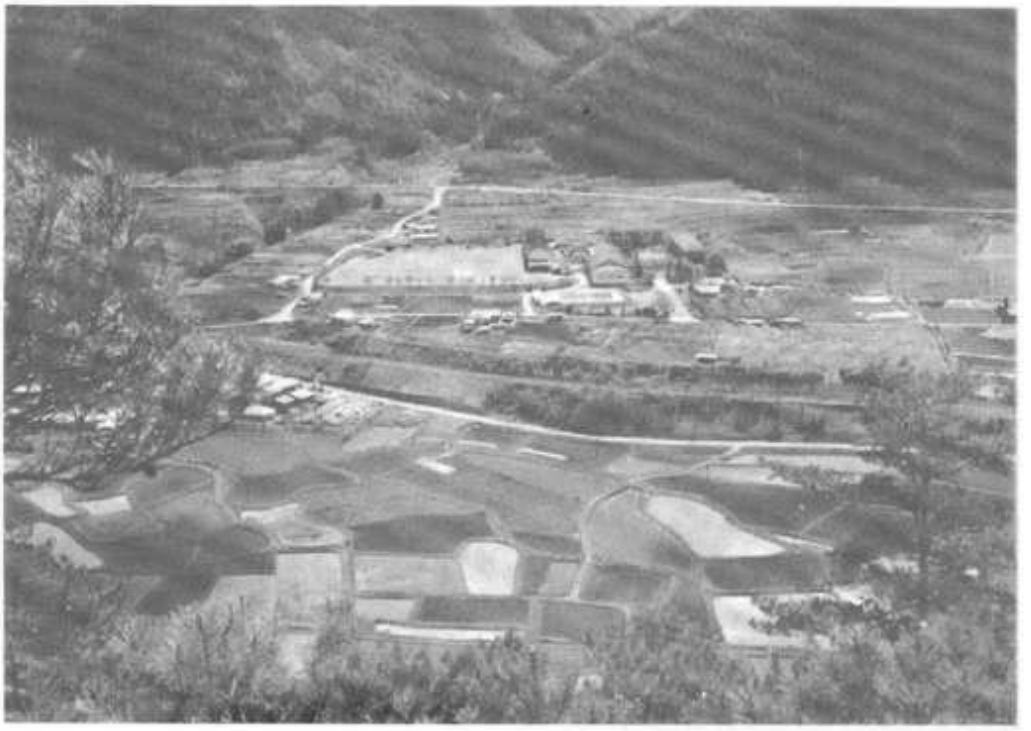
図番号	住居址	器種	口径	底径	高さ	残存	器形	底裏	使用ずれ	施釉(整形)	胎土	色調	焼成	その他
32の2	10	白・椀	(16.0)	(7.2)	4.5	1/4	腰がはり、ロクロ整形時の凹みがあり、口縁はねじれて正円でない。高台端は鋭い。	ヘラケズリ	あり	白色で光沢あり、内は緑の斑点あり	ち密	白色	良い	
3	〃	白・椀	15.2	7.8	5.0	完	腰がわずかに張って口縁へ開き、口端は鋭い。ロクロ整形の凹みあり。高台は低く厚い。	ヘラケズリ ヘラ刻みあり	あり	なし	ち密	白色	生やき	
4	〃	白・椀	(14.0)	(7.0)	4.2	1/4	口端がわずかに外へ突出する。内面底部に墨書あり。	ヘラケズリ 墨書あり	あり	白色で光沢あり	ち密	黄褐色	良い	
5	〃	白・椀	(13.5)	(6.8)	4.2	1/4	高台脇が凹み状になっている。口縁が外へ張り出す。	ヘラケズリ	あり	白色で光沢あり	ち密	灰白色	良い	重ね焼痕あり
6	〃	白・椀	(13.4)	(6.7)	5.0	1/4	腰が張り立ち上り、口縁は外へはりだす。	ヘラケズリ	あり	白色でうすい光沢あり	ち密	灰白色	良い	重ね焼痕あり
7	〃	白・椀	(13.0)	(6.9)	4.1	1/4	腰はわずかに張り、口端は鋭い。		あり	薄緑色で光沢あり	ち密	白色	良い	
8	〃	白・椀					内面底部に墨書あり。高台端が鋭い。	ヘラケズリ	あり		ち密	よう黒色	良い	
9	〃	白・皿	(15.4)	(8.5)	3.0	1/8	口端は丸く、わずかに外へ厚くなる。高台端が鋭い。	ヘラケズリ	あり	外は黄白色で光沢あり、内は白色で緑色の斑点あり。	ち密	灰白色		
10	〃	白・皿	(13.2)	(7.0)	2.5	1/4	腰にヘラケズリが1周ある。口縁はわずかに内側にカーブする。		あり	外は白色透明光沢あり。内は緑色の斑点あり。	ち密	灰白色	良い	
11	〃	白・皿	12.6	6.4	2.2	完	口縁はおれるように立ちあがり、口端は外へはり出す。内面底部に墨書あり高台端は鋭い。	ヘラケズリ	あり	白色で光沢なし	ち密	褐色	良い	
12	〃	白・壺		(8.4)			腰にヘラケズリあり。高台は巾広く内側に段状となる。	ヘラケズリ			ち密	灰白色	良い	
13	〃	須・壺					肩部に断面三角形の突帯が2帯あり、それをまたぐ耳がつく。			暗緑色で光沢がある。	ち密	よう黒色	良い	
14	〃	須・甕		(12.4)			腰にヘラケズリがある。	ヘラケズリ			小石粒を含む	灰白色	良い	

図番号	住居址	器種	口径	底径	高さ	残存	器形	底裏	使用ずれ	施釉(整形)	胎土	色調	焼成	その他
34の1	11	白・椀	(13.8)	(8.0)	4.7	1/4	腰がわずかに張り立ちあがり気味、口端は外側に厚くなる。	ヘラケズリ	あり	外は白色で光沢でうすい。内は褐色で光沢なし。	ち密	灰白色	良い	
2	〃	白・椀	(13.2)	(7.3)	4.0	1/4	口端が気持ち外へ厚くなる。	ヘラケズリ	あり	白色で光沢なし。	ち密	灰白色	良い	
3	〃	白・椀	13.2	6.8	3.8	完	腰にヘラケズリが2周する。口端は丸く終る。高台端に重ね焼剥離痕あり。	ヘラケズリ	あり	外は白色で光沢あり。内は緑色の粒状の斑点あり。	ち密	灰白色	良い	重ね焼痕あり
4	〃	白・椀	(13.2)	7.4	3.9	1/4	腰にヘラケズリが1周する。口端は外へ厚くなる。高台端は鋭い。	ヘラケズリ	あり	外は白色、内は緑色斑点あり。	ち密	灰白色	良い	重ね焼痕あり
5	〃	白・椀	(12.5)	6.4	3.2	1/4	腰が張り、口縁は外へカーブする。	ヘラケズリ	あり	外は高台内部まで全面に施釉、緑色の小斑点あり、内は褐色で光沢あり	ち密	灰白色	良い	
6	〃	白・椀	10.6	5.8	4.0	完	腰は張って立ち上がる。口縁は外へおれるように外反する。高台に重ね焼き剥離痕あり。	ヘラケズリ	あり	白色で緑色の光沢あり	ち密	灰白色	良い	重ね焼痕あり
7	〃	白・椀					内面底部に墨書あり。2字か？	ヘラケズリ 墨書あり	あり		ち密	白色	生焼き	重ね焼痕あり
8	〃	白・椀					内面底部に墨書あり	ヘラケズリ 墨書あり	あり		ち密	灰白色	良い	重ね焼痕あり
9	〃	白・椀					内面底部に朱塗が見られる。	ヘラケズリ			ち密	灰白色	良い	
10	〃	白・皿	(15.0)	(7.8)	2.7	1/4	口縁で内側へわずかにカーブする。	ヘラケズリ	あり	白色で緑色の光沢あり。	ち密	灰白色	良い	
11	〃	白・皿	(12.7)	(6.2)	2.8	1/12	腰に1周ヘラケズリがあり、口端がわずかに外に張る。		あり	白色で緑色の光沢あり	ち密	灰白色	良い	
12	〃	白・皿	(11.6)	(6.6)	2.3	1/4	口端はうすく丸い。高台は低く厚い。	ヘラケズリ	あり	白色で光沢はうすい。	ち密	灰白色	良い	
13	〃	白・皿	(11.2)				口縁は内側へ稜をつくってあり、口端は外へ張りでている。			淡緑色で光沢がある。	ち密	灰白色	良い	

図番号	住居址	器種	口径	底径	高さ	残存	器形	底裏	使用ずれ	施釉(整形)	胎土	色調	焼成	その他
34の14	11	白・皿	(13.0)				口縁内側にウルシをぬっている。			淡緑色で光沢がある。	ち密	灰白色	良い	
15	〃	白・壺	(11.2)				口端は外へわずかに丸味をもつ			外は白色で光沢あり。内は淡緑で光沢あり。	ち密	灰白色	良い	
16	〃	白・壺					外は格子状の、内は内海波のたたき目がある。			白色で光沢あり。	ち密	灰白色	良い	
36の1	12	白・椀	(14.3)	(7.0)	4.1	1/4	口端が外へおれるように張りだす。	ヘラケズリ		褐色で緑色粒状の斑点あり。	ち密	灰白色	良い	
2	〃	白・椀	(13.3)	6.2	4.7	1/4	口縁はわずかに内側へカーブし、口端は外へ張り出す。	ヘラケズリ	あり	白色で緑色斑点に光沢あり。	ち密	灰白色	良い	
3	〃	白・皿	(17.4)	(7.7)	3.6	1/4	腰に1周ヘラケズリがある。口端が外へおれている。	ヘラケズリ	あり	白色透明で緑色斑点の光沢あり。	ち密	灰白色	良い	
4	〃	土・坏	(14.8)				わずかに腰がある。内面黒色研磨されている。			ロクロ整形	小石粒を含む	明褐色	良い	
5	〃	土・坏	(12.4)				胴から立ちあがり、口端は内側よりうすくなって丸くおわる。内面黒色研磨されている。			ロクロ整形	小石粒を含む	明褐色	良い	
6	〃	土・坏		(6.0)			腰部に墨書あり。	糸切底	あり	ロクロ整形	小石粒を含む	明褐色	良い	
39の1	13	白・椀		(6.8)			内面底部に「主」の墨書ある。高台端が鋭い。	ヘラケズリ「主」の墨書	あり		ち密	灰白色	良い	重ね焼痕あり
2	〃	白小壺					わずかに肩がはる。			淡緑で光沢あり	ち密	白色	良い	
3	〃	須・甕	(26.6)				口縁は肥厚くなって口縁帯部をつくる			黒色で光沢あり	ち密	よう黒色	良い	
4	〃	土・坏	(15.3)				口縁が外側にわずかに肥厚くなる。			ロクロ整形	小石粒を含む	明褐色	良い	
42の1	14	白・皿	15.5	8.2	2.4	完	わずかにカーブして立ちあがり、口端は外におれる。高台端が段状をなす。	ヘラケズリ	あり	まばらにあって光沢がない。	わずかに石粒を含む	茶褐色	良い	
2	〃	土・坏	(15.8)	5.8	4.9	1/4	腰は張らず、口縁はわずかに外におれている。内面黒色研磨され、ヘラで口縁は横に、体部は底へむかって縦に軽くなでている。	糸切底		ロクロ整形	小石粒を含む	暗褐色	良い	
3	〃	土・坏	(13.5)	5.4	3.9	1/4	底から開く。口縁の両側に黒い附着物がつく。内面は部分的に黒色で軽くヘラ研磨している。	糸切底		ロクロ整形	石粉を含む	茶褐色	良い	

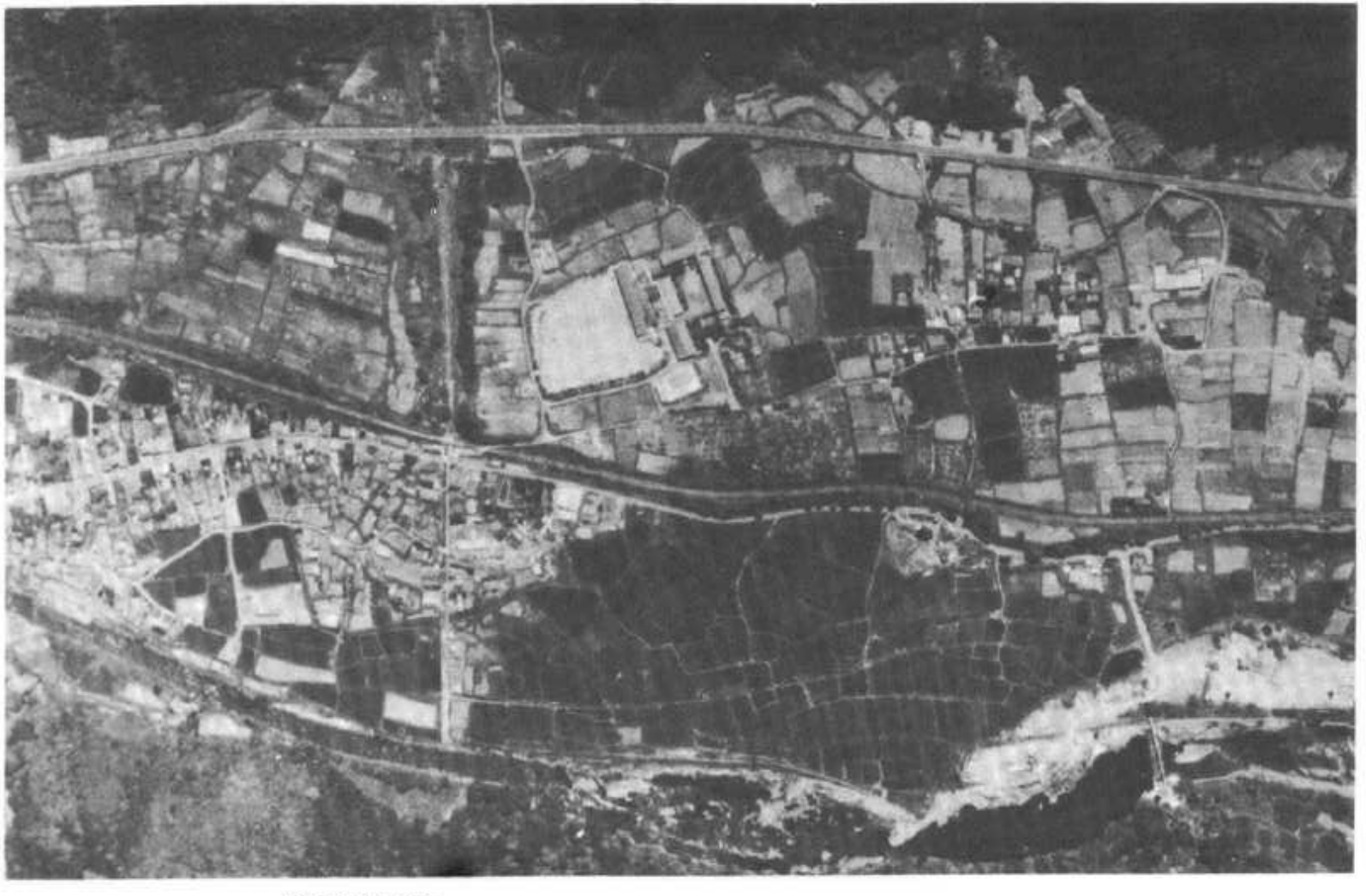
図番号	住居址	器種	口径	底径	高さ	残存	器形	底裏	使用ずれ	施釉(整形)	胎土	色調	焼成	その他
42の4	14	土・坏	(13.4)	6.6	3.5	1/4	腰がわずかに丸味をもつ。内面は黒色研磨されている。	糸切底	口端に使用ずれあり	ロクロ整形	石粉を含む	暗褐色	良い	
5	〃	土・坏	(12.8)	6.0	5.0	1/4	腰から立ちあがり、わずかに口端が外にでる。内面は黒色研磨される。	糸切底	口端に使用ずれあり	ロクロ整形	石粉を含む	茶褐色	良い	
6	〃	土・坏	(13.0)	5.8	4.0	1/4	底から開く。内面は黒色研磨される。	糸切底		ロクロ整形	石粉を含む	明褐色	良い	
44の1	15	白・壺		7.6			高台は平たく、内側に低くなる。	糸切底		濃緑色で光沢あり	ち密	灰白色	良い	
2	〃	土・坏	(14.1)	6.4	4.4	1/4	わずかに腰が張る。口端は内側からうすくなり丸く終る。内偶は黒色研磨される。	糸切底		ロクロ整形	石粉を含む	暗褐色	良い	
3	〃	土・坏	(12.7)	(7.0)	3.7	1/4	底から開く。口端は外からけずられたようになって尖っている。器肌があれている。内面も研磨されていたがあれいる。	糸切底		ロクロ整形	ち密	明褐色	良い	
4	〃	土・甕	(14.2)	7.6	15.1	1/4	胴上半に最大巾をもつ安定した器形。器厚は胴上部にかけてうすくなる。胴下部に二次焼痕がある。口縁は頸部から「く」の字状におれる。口端はわずかに稜をなしている。外には櫛状器具の横走条痕がつき、内にはロクロ整形痕がある。	糸切底		ロクロ整形	石粉を含む	赤褐色	普通	
45の1	16	白・椀	(15.2)	(8.0)	4.6	1/4	腰にヘラケズリが1周する。口端は外へ強くおれる。		あり	透明で光沢あり	ち密	灰白色	良い	
2	〃	白・椀		(8.8)				ヘラケズリ円形の墨痕あり	あり	暗緑色で光沢あり	ち密	灰白色	良い	
3	〃	須・蓋	10.1		(2.3)	完	つまみは偏平ギ宝子状で、そのまわりをヘラケズリしている。		あり		小石粒を含む	よう黒色	良い	
4	〃	土・坏	(14.2)	6.4	4.1	1/4	底から開く。口端は内側からうすくなり尖る。内面は黒色研磨されている。	糸切底		ロクロ整形	小石粒を含む	明褐色	普通	
5	〃	土・坏	(13.1)	6.4	4.0	1/4	腰はわずかに内側へカーブする。口端は丸い。	糸切底		ロクロ整形	小石粒を含む	明褐色	普通	

図番号	住居址	器種	口径	底径	高さ	残存	器形	底裏	使用ずれ	施釉(整形)	胎土	色調	焼成	その他
45の6	16	土小壺	(9.2)	6.0	9.2	十	胴中央で最大巾(11.8)をもつ。断面偏円形で、口縁は頸部(8.7)から短かく外反する。内面は黒色研磨される。	糸切底		ロクロ整形	小石粒を含む	明褐色	良い	
47	17	土・杯	(17.3)	5.6	3.8	十	底から開く。口縁はわずかに外張っている。	糸切底	あり	ロクロ整形	小石粒を含む	暗灰白色	普通	
48の1	遺構外	白・椀	(15.3)	7.4	4.8	十	腰が張り、胴はわずかに凹む。高台は逆台形状で厚い。	糸切痕残る「し」の墨書あり	あり	白色で光沢なし	砂質っぽい	灰白色	良い	重ね焼痕あり
2	〃	白・椀	13.8	7.0	5.6	完	腰にヘラケズリ1周あり。腰が張って立ちあがり、口縁はわずかに外反する高台は高い。	ヘラケズリ	あり	白色で光沢あり	ち密	灰白色	良い	3を中に入れる
3	〃	白・椀	12.7	6.8	5.1	十	腰がわずかに張って開く。口縁内側に沈線が1周する。高台は高い。	ヘラケズリ	あり	白色で光沢あり	ち密	灰白色	良い	2の中に入って出土
4	〃	白・椀		6.4			内面底部に「上」の墨書あり。高台は低い。	ヘラケズリ		淡緑色で光沢あり	密	暗灰白色	良い	
5	〃	白・皿	(13.4)	7.4	2.6	十	口端がわずかに外へ厚くなっている。高台は部厚く低い。	ヘラケズリ	あり	淡緑色で光沢あり	ち密	灰白色	良い	
6	〃	白段皿	12.4	6.5	2.6	十	ヘラケズリで段をつくっている。	ヘラケズリ	あり	淡緑色で光沢あり	ち密	灰白色	良い	
7	〃	白耳皿		4.6		十	高台は高くわずかに外に開く。	糸切痕が残る	あり	淡緑色で光沢あり	ち密	白色	良い	
8	〃	白・壺	(12.2)	8.7	(18.0)	十	腰部はヘラケズリし、肩部で最大巾(13.8)となる安定した器形で、口縁は外に丸味をもつ。高台は低く、内彎へ低くなっている。	ヘラケズリ		淡緑色で光沢あり	ち密	灰白色	良い	
9	〃	白小壺	4.6	5.3	8.5	完	胴下を4周ヘラケズリしている。胴下半に最大巾(7.2)があり、重心が低い。頸部からの外反は大きくない。底部にけずりすぎの孔があく。	糸切底		口頸部に施釉し、淡緑色で光沢がにぶくある。	ち密	灰白色	良い	
10	上の原	白・椀		(9.2)			高台脇に墨書あり。	ヘラケズリ	あり	白色で光沢がない	ち密	灰白色	生焼	



遺跡遠景（西の山より）

遺跡遠景（東の山より）



遺跡航空写真

1. 1号住居址

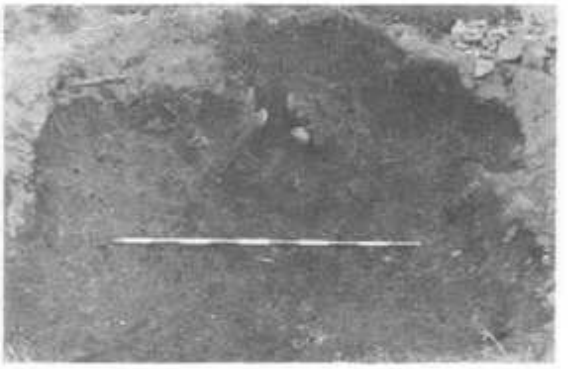
2. 1号住居址カマド

3. 2号住居址

4. 2号住居址カマド

5. 3号住居址

6. 3号住居址カマド



1. 4号住居址

2. 4号住居址カマド

3. 5号住居址

4. 5号住居址カマド

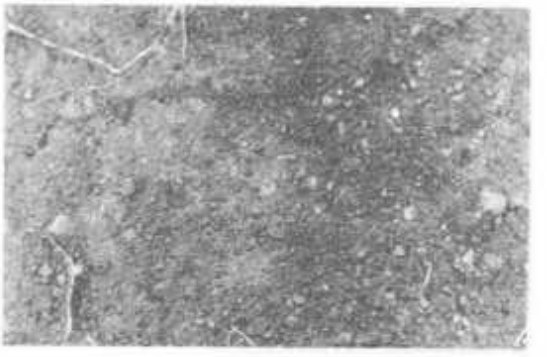
5. 6号住居址

6. 6号住居址カマド

1. 7号住居址

2. 7号住居址カマド

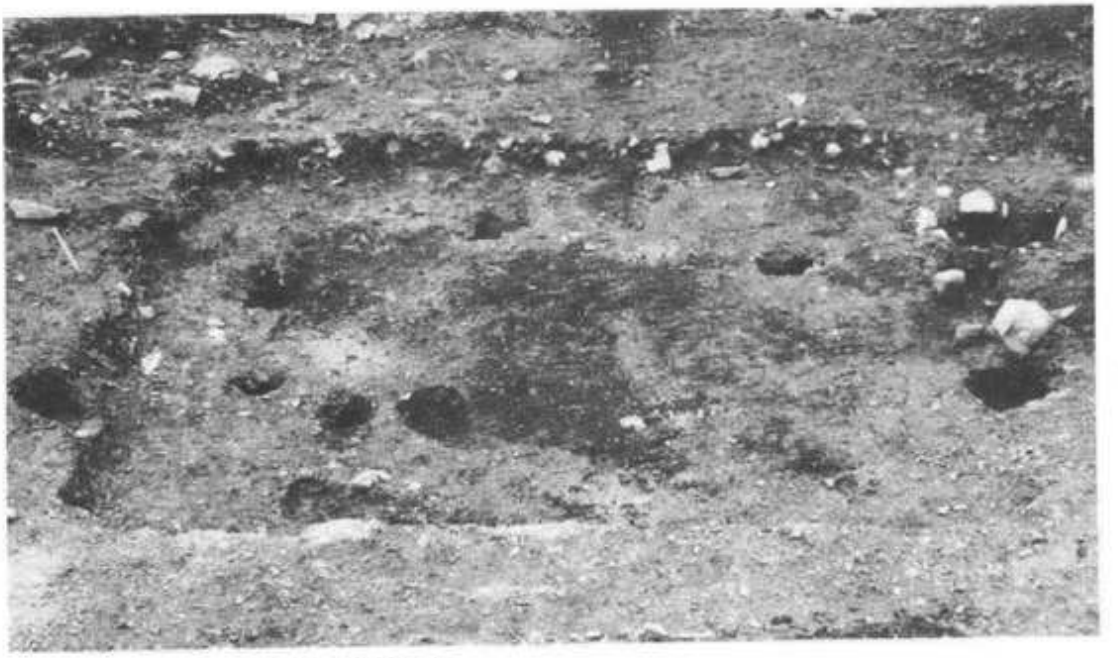
5. V 字 溝



3. 6号住居址出土炭化米

4. 6号住居址床面にあるカヤ(ワラ?)

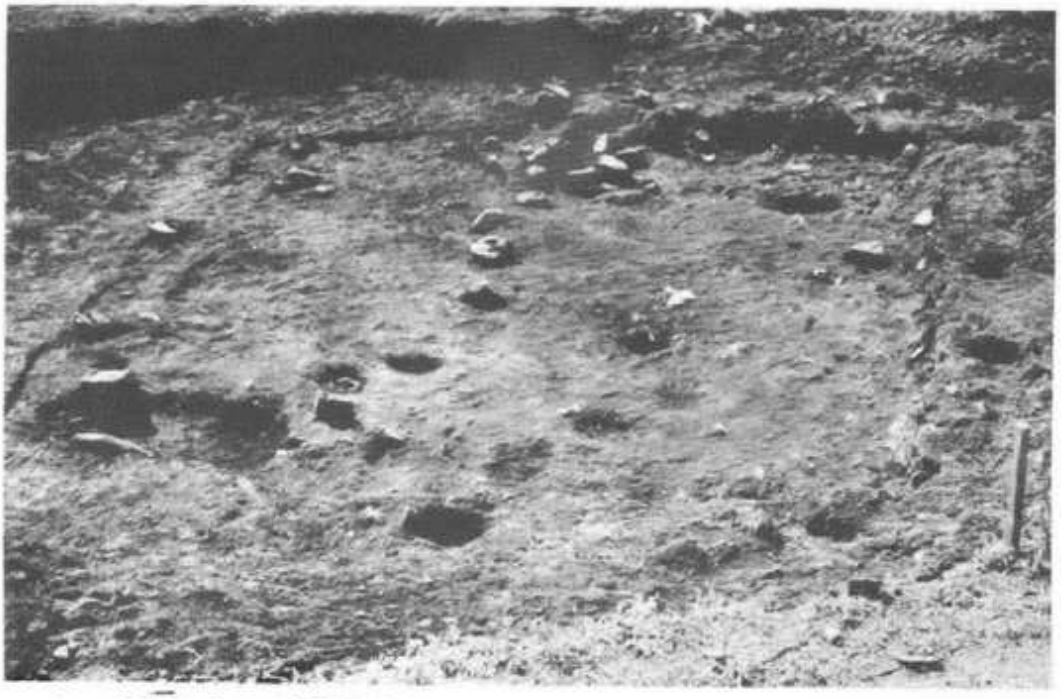
6. 調査参加者



1.　北東より見た8号住居址

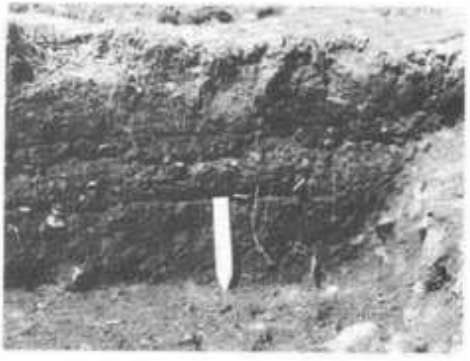
2. 石が点在する8号住居址

3.　石が残るカマド



1.　東南よりみた9号住居址

2.　石がくずれたカマド

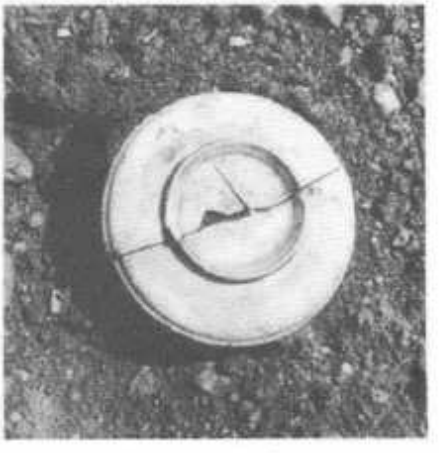


4.　埋土の状態

3.　南隅の方形ピット

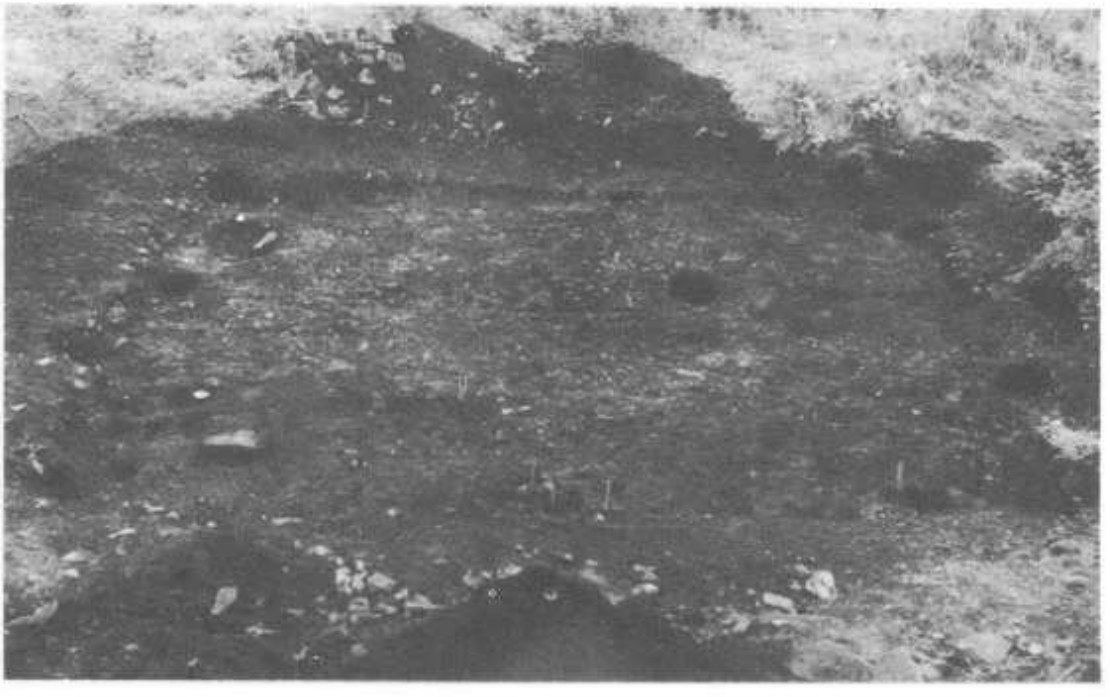
1.　東南よりみた10号住居址

2.　ほとんどこわされたカマド



3.　皿の出土状態

1.　礫でうめられていた11号住居址



2.　北東よりみた11号住居址

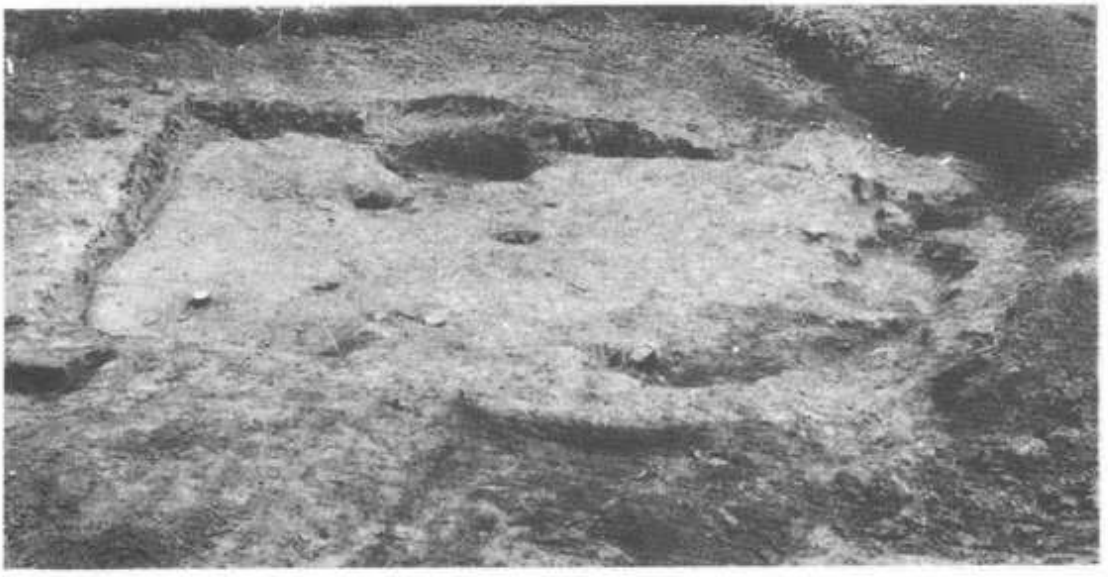
1. 北東よりみた
12・16号住居址

2. 西よりみた
12・16号住居址

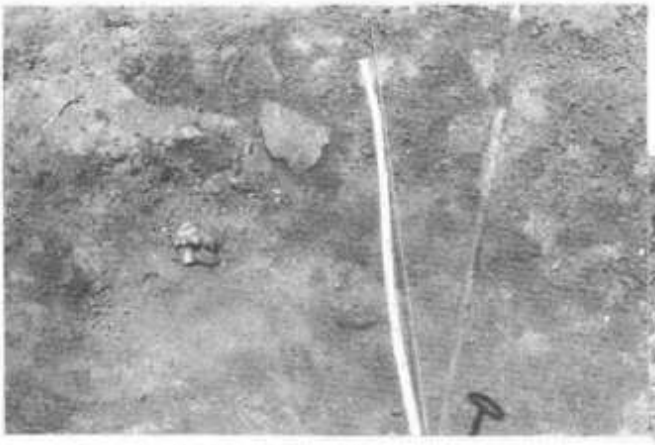
3. 煙道部の残る12号住居址カマド

4. 煙道口

5. 16号住居址のカマド



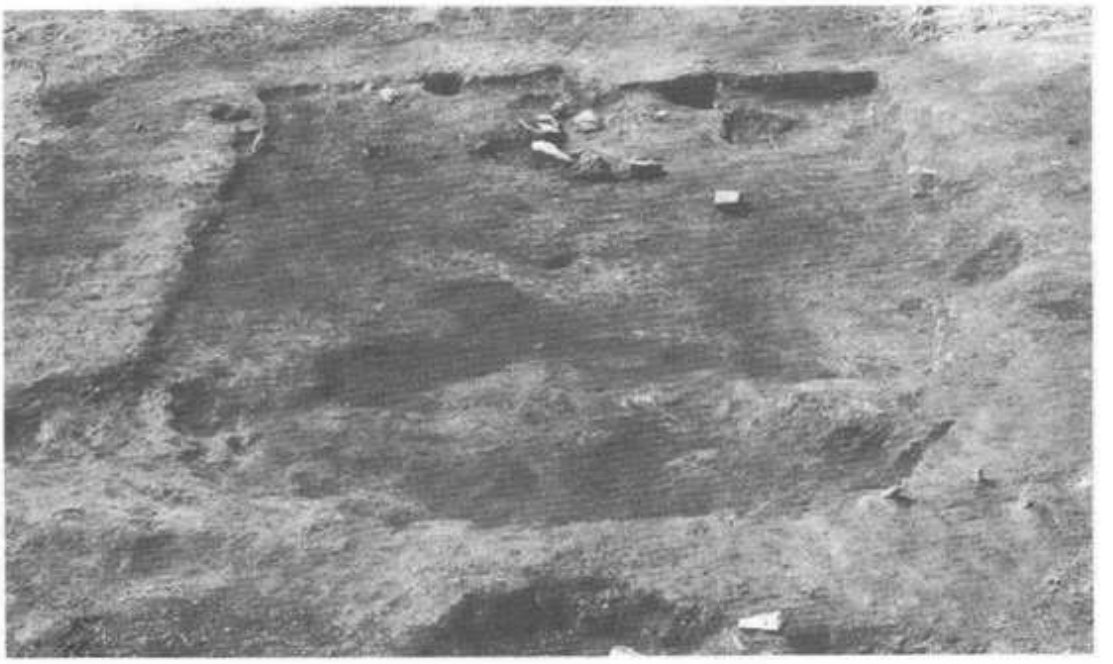
1.　北西よりみた13号住居址(手前14号住居址)



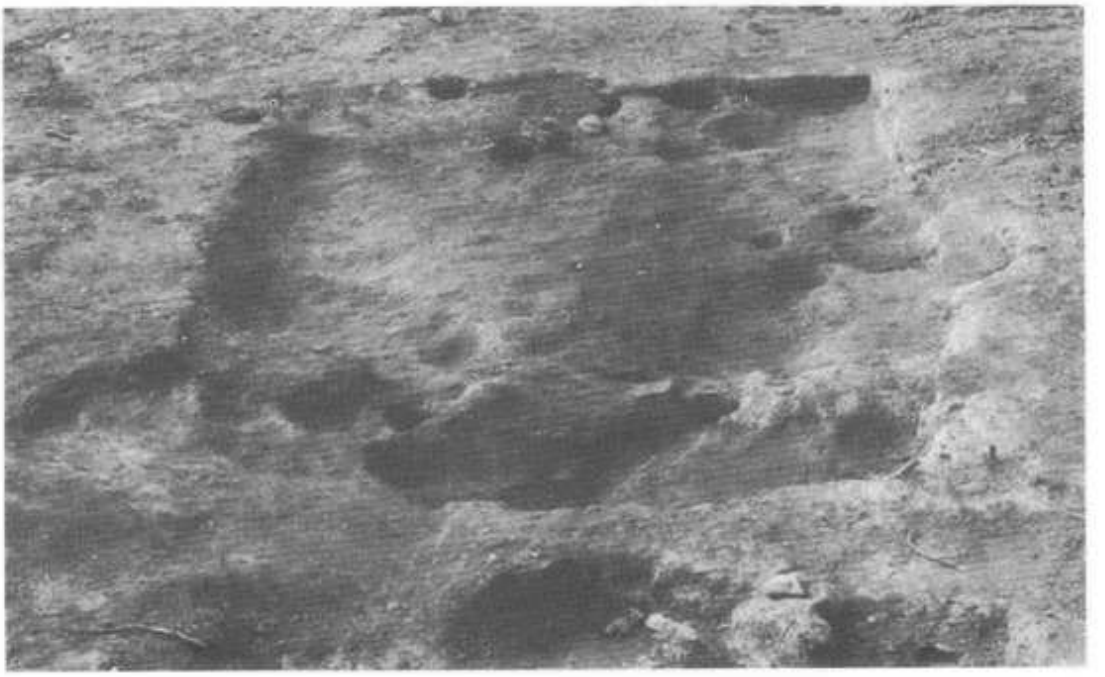
2.　くずされたカマド

4.　墨書白瓷出土状態

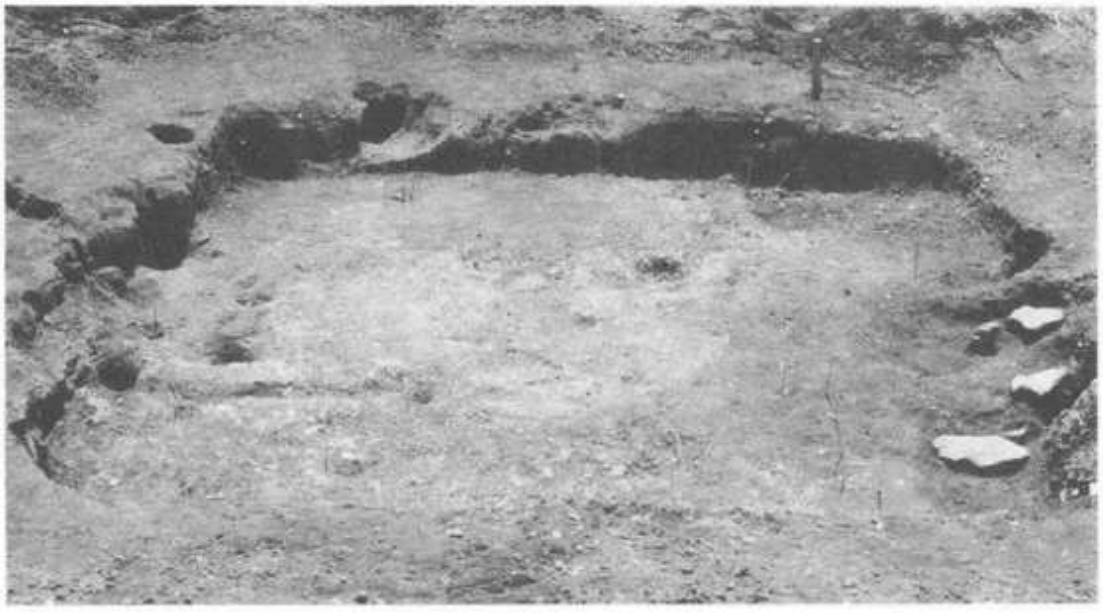
3.　カマドより出たフイロ



1.　東南よりみた14号住居址上面



2.　14号住居址下面

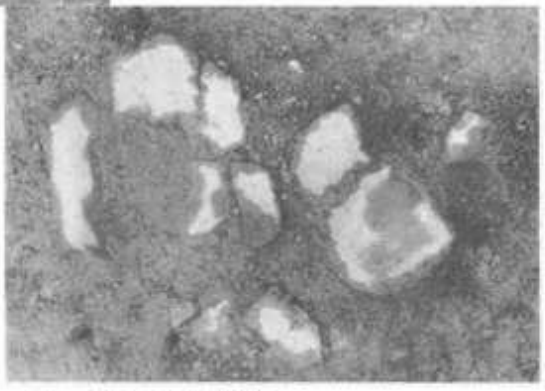


1.　北東よりみた15号住居址

2.　支脚の残るカマド

4.　鉄鏃の出土状態

3.　カマの出土状態



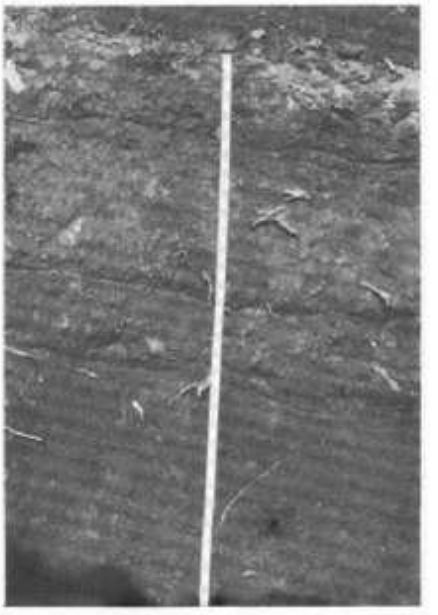
5.　甕の出土状態

1.　東南よりみた17号住居址

2.3.　くずれおちた石組カマド

4.　斜めにほりこまれた柱穴

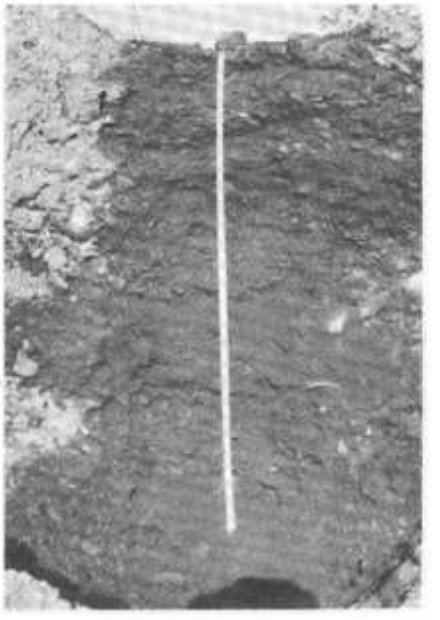
2



18

5

8



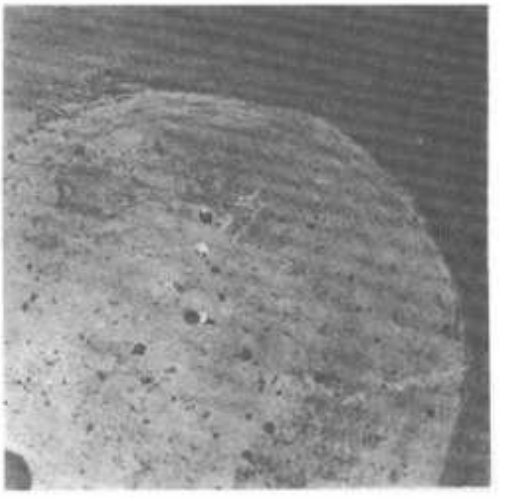
和村部落附近
（遺跡南側の水田地帯）

14

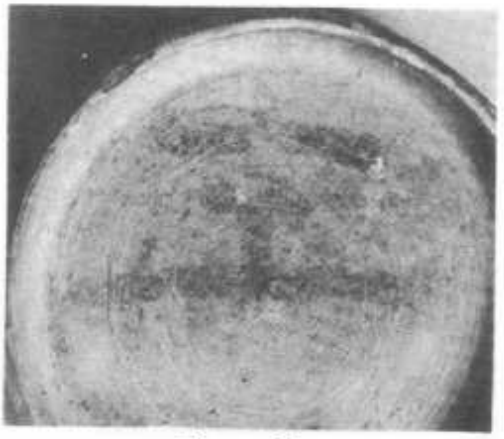
輪積整形

ロクロ整形

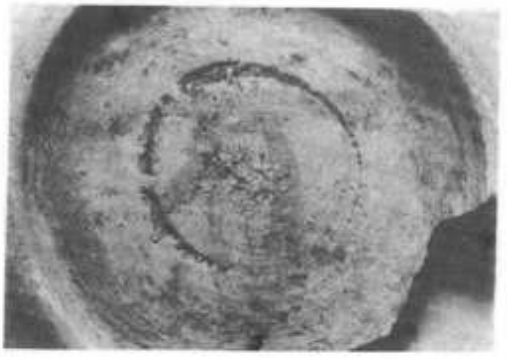
（上の裏面）



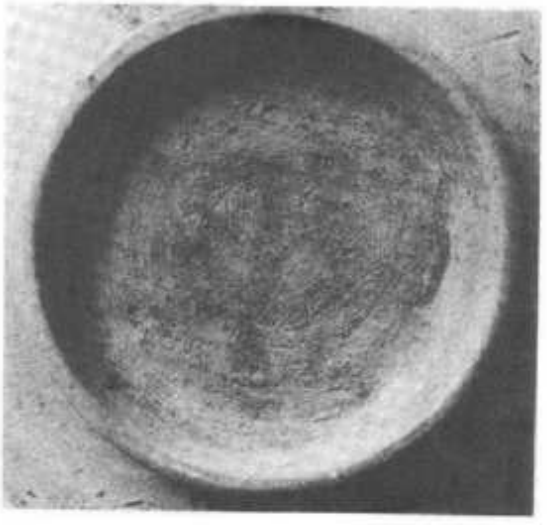
ヘラ切り底部



主　平



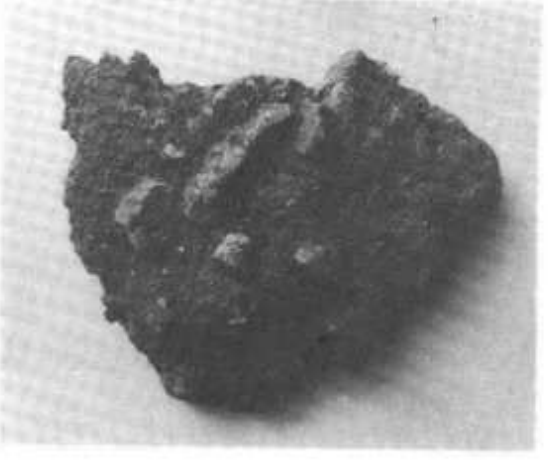
墨書白瓷　　万



カナくそ（表）

フイゴの口

カナクソ（裏）



調査団　神村　長谷川　青沼　村井
田中　山下　伊深

木曽西高地歴部

豊科高校郷土班

上松中学校考古学クラブ

日義中学生，三岳中学生も

非売品
発　行　昭和52年3月31日
発行所　長野県木曽郡日義村
日義村教育委員会
印刷所　㈲安藤印刷
☎(02642)　2－2353